

都市的事物に着目した設計手法の提案

東京理科大学大学院
工学研究科 建築学専攻
坂牛研究室 修士課程

4120524 多田 星矢

指導教員 主査 坂牛 卓
副査 山川 誠
副査 郷田 桃代

Abstract

PROPOSAL OF A DESIGN METHOD FOCUSING ON URBAN ENTITIES

Sayer TADA

This study consists of three parts.

1. A revision of the post-modernism architecture movement and an overview of the Generic City (as defined by Rem Koolhaas). This part attempts to define the validity of the usage of post-modern theory in present day.

2. Proposal of a new design language based on the theories of post-modernist architects (i.e., Robert Venturi's theories on complexity). This method focuses on the random products of the Generic City (images of the city) and re-evaluates each example as a structure of meaning as words. The words then are re-designed into individual architectural spaces as case studies.

3. Proposal of a complex (kindergarten, housing, library) using the method obtained in part 2. The design focuses on how the architect perceives the images of the cityscape, and not the form of the objects retrieved in step 2.

In conclusion, this study aims to discover the elements that inhabitants of the city create, and utilizes it to create an complex architecture that activates a new perception.

目次

梗概	p.007
第1章 序論	p.013
1.1. 目的と内容	
第2章 多解釈性と【都市の非合理的事物】	p.016
2.1. 多解釈性	
2.2. 現代から考察するポストモダンへの反省	
2.3. 多様性と対立性、すなわち多・他解釈性	
2.4. 都市の非合理的事物	
2.5. 【都市の非合理的事物】とポストモダニズムの記号的手法の差異	
第3章 設計手法の概要と提案	p.029
3.1. 設計手法の概要	
3.2. 【都市の非合理的事物】の発見 / 収集	
3.3. 言葉による事例の記述	
3.4. 〔解釈〕の抽出とキーワードへの変換	
3.5. キーワードと設計可能性	
3.6. 一連の手順を踏まえたケーススタディ	
	p.039
第4章 ケーススタディ一覧	
4.1. 【都市の非合理的事物】から設計されるケーススタディ	
第5章 プロジェクト	p.103
5.1. はじめに	
5.2. 対象敷地	
5.3. 用途	
5.4. 設計手法を取り込んだスタディ	
5.5. 図面	
第6章 プレゼンテーション	p.155

第 7 章 結 p.199

第 8 章 参考文献 p.203

梗概

都市的事物に着目した設計手法の提案

坂牛研究室

4120524 多田 星矢

1. 研究の意義と目的

建築を設計する際には、常にクライアントの要望や社会的条件を満たすことが要求される。しかし、一設計者の職能として、自らの設計表現に対する意思表示をすることも欠かせない。なぜなら、自らの創造に対する考察を開示することによって、他者からの理解だけでなく、自らの表現姿勢に対する反省と自己理解が深まると考えられるからである。そこで本研究では、自らの設計手法の方法論を提示し、それを応用した設計物の提案を行う。

本論で筆者が目指すものは空間の多解釈性であり、それを体現する空間を設計することである。多解釈性とは、合理主義的な建築システムと比べ、様々な空間の読み取り方を介在させ、ときには非合理さや矛盾を許す姿勢である。

本研究では、設計をおこなう手がかりとして、【都市の非合理的事物】(2.3章で後述)に着目して、それらを収集し、建築的要素として再構築ができるような設計プロセスを提案する。

2. 多解釈性と【都市の非合理的事物】

筆者が重視している多解釈性という概念は、ポストモダニズムの建築理論に拠るものである。

本章では、まず、近代建築へのアンチテーゼを打ち立てたポストモダニズムの建築ムーブメントを考察し、次に、R. ヴェンチューリの言説から多解釈性の意義を導出する。最後に、都市における合理性と、それに相反する都市的事物に着目する。多解釈性を獲得する手がかりとしての都市的事物の中でも特に【都市の非合理的事物】に着目する。

2.1 現代から考察するポストモダンへの反省

ポストモダニズム期は1970年代初めから、1990年代あたりまで^{註1}とされている。象徴的な形式性や、記号論的設計物の印象が強いが、その背景には多くの言説がある。ポストモダニズムがもっとも盛んに議論されていた時期は短く、ムーブメントとしても短命であった。ポストモダニズムの建築家が提示した理論の背景には、エリート主義的であったモダニズムとは対比的な、空間の利用者のために考えられたものであった。このような民衆的な思想は現代においても、有用であると思われる。近年の建築界の動向でもポストモダニズムに関する議論が再び行われるようになってきている^{註2}。

美術批評家 / 歴史家であるハル・フォスターによれば、ポストモダニズムは「決して多元主義ではなく、開

かれた政治や文化に対する全体的なシステムの下で生きているという信念の単なる転倒に過ぎない」^{註3}と位置づけられており、ポストモダニズムの本質は対象とその社会的コンテクストを変換することであるとしている。さらに、門脇耕三は、ポストモダニズムの根源的思想が伝統に対する批判的脱構築であるにも関わらず、「歴史主義的で記号論的な建築というポストモダン建築の通俗的イメージは、そこに至るまでの多量の議論を矮小化させてしまった」^{註4}と述べ、ポストモダニズム建築が持たれてしまったイメージによってムーブメントの縮小が起こったと考察している。

2.2 多様性と対立性、すなわち多・他解釈性

ポストモダンの思想から発想されるものとしては、本研究のテーマである、解釈性をめぐる問題がある。ポストモダニストの巨匠である、ヴェンチューリの代表的著書の中に『建築の多様性と対立性』^{註5}がある。本書で掲げられているマニフェストでは、近代建築を打開するための新しい建築理論としての意味論に関する言及がなされている。ヴェンチューリのいう多様性・対立性とは近代建築の均質で単調な建築に対し、空間の複雑性^{註6}を導入させることによって多様に富んだ空間を体現させるというものである。ヴェンチューリは、「厄介事とされるものも受け入れ、不確実性を利用する。多様性と対立性をともに抱え込んで、私は生命感と妥当性を獲得しようと思う」^{註7}と多様に富んだ空間の有効性とポストモダニズム建築が示唆する空間の豊かさを論じ、自らの姿勢を表明している。

本研究では、ポストモダニズムの衰退の原因と思われる記号的手法の反省としての、現代の都市(東京)にも応用可能な、観察者の解釈いわば意味論に着目した建築的設計方法を提案してゆく。ポストモダニズムのエッセンスである多様性、すなわち建築空間の複雑性を自らの設計手法論により再構築することを試みる。

2.3 【都市の非合理的事物】

建築における多様性、すなわち多解釈性を獲得する手がかりとして【都市の非合理的事物】に着目する。【都市の非合理的事物】とは、都市や建築がもつ合理的構造から逸脱したもの、社会的なシステム^{註8}から見ると非合理^{註9}に感じられるものと定義する。方法としては、こうした事物の状態を記録^{註10}し、建築空間として構築する。都市にある事物を取り上げ、建築的応用を行うことにより、人間の様々な意図や、微視的な都市に対する個人が及ぼす弱い行為^{註11}を空間化する。

レム・コールハースの『ジェネリックシティ』^{註12}の論考によると、東京(のような大都市)は彼が定義するジェネリックシティに該当する。それは、「うまくいかないものはさっさと捨て、理想主義という名の舗装は現実主義という名のハンマーで打ち砕き、うまく育つものは歓迎する」と、合理主義的に構成されていた都市から芽生える様々な文化性や多様な要素を擁護する都市性について言及している。【都市の非合理的な事物】はジェネリックシティの中で発見される様々な行為を指しており、本研究はそれらを記録し、設計される空間として再構築しようという試みなのである。

また、ポストモダン論でしばしば議論に上がる歴史主義的で記号論的な手法を避けるために【都市の非合理的な事物】を建築空間として再構築する。その際、各プロセスを言葉を用いて記述する。事物の状態や観察者の解釈を言葉によって記述することにより、プロセスとしての共通認識や共通価値が創出可能となると考える。

3. 設計手法の概要

本研究で提案する設計手法の概略を以下に記す。

3.1 【都市の非合理的な事物】の発見 / 収集

設計の手がかりとなる事例の収集を行う(本研究では60の事例を扱う)。

方法としては、都市生活の中で興味の引くものに遭遇した時、それらの事物を写真に収め、記録する。(図1)



▲図1 【都市の非理論的事物】の記録(一部)

発見される事物は建築的要素を持つ必要はないが、関連する事物やその状態に着目して記録を行う。これらの写真を事例として扱い、設計を始める手がかりとする。

3.2 言葉による事例の記述

3.1で発見 / 収集された事例を説明する詳細な記述を行う。記述の際、意識的に[事物][状態][解釈]について記述する。(図2)

- ・事物：事例に関する物体そのもの(記述する際は「何」)。
- ・状態：事例に関する事物の状態(記述の際は「どのよう」)。
- ・解釈：事例に関する観察者の理解・解釈を示す。

3.3 [解釈]の抽出とキーワードへの変換

3.2で記述された文章を参照する。3.2で記述された[解釈]を建築に応用できるよう、それに関連するキーワードをさらに記述する。(図3)

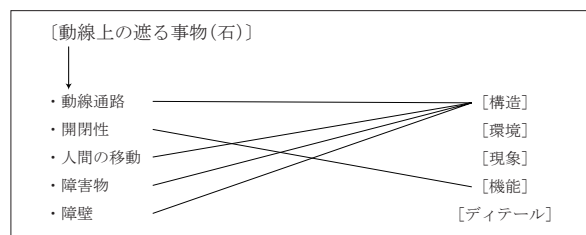
3.4 キーワードからケーススタディの設計

3.2と3.3から記述された[解釈]とキーワードをもとに、建築空間の設計を行う。キーワードを空間に変換するとき、建築を構成する諸要素から設計を行う。(図3)建築的要素は、構造、機能、環境、現象、ディテールなど建築を構成するいくつかの要素から設計を行い、出来上がる空間の可能性を検討する。(図4)

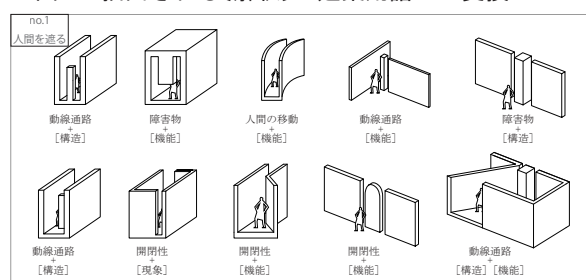
設計を行う際、キーワードと関連する建築的要素を



▲図2 事例の記述(言語への変換)



▲図3 抽出される[解釈]の建築用語への変換



▲図4 建築用語から建築空間に変換(ケーススタディ)

複合的に想定することによって空間の変換までのプロセスを細分化し、言葉から空間を設計することが容易になるようにしている。

3.5 ケーススタディから実際の設計物への適応

3.1 から 3.4 にかけて設計された多数の空間を、設計する建築物に介入 / 適応させ、建築物としての全体像を構築する。この時、建築物全体には複数の事例から得られた解釈と、それらから発生した空間が重なり合い、多解釈性をもつ建築空間が設計される。

4. 本設計

4.1 はじめに

本設計では、前半までに示した設計手法をもとに、実在する敷地を選定し、建築物を設計する。【都市の非合理的事物】を取り込んだ設計手法を用いて設計することにより、利用者に対し、空間を読み込む余地を与える豊かな解釈性を持つ建築が設計されることを目的とする。

4.2 対象敷地

対象敷地は東京都新宿区の矢来公園である。この敷地付近は第一種低層住居専用地域で、低層の住宅地と事務所が混在する。矢来公園が位置する周辺は、子育てをする若年代の公園利用が多く見られる。敷地から 150m ほど離れたところには日ごろから交通量が多い早稲田通りがあるが、敷地が位置する矢来公園はその喧騒から少し離れた閑静な住宅街にたたずむ。

4.3 用途

用途は、公園・幼稚園・児童図書館・集合住宅の複合施設とする。選定の理由としては、敷地周辺には多くの子育て世帯が居住しているにもかかわらず、彼らのための施設が不足していることがあげられる。集合住宅に関しては本敷地の周辺は、閑静な高級住宅街であるため、ある程度の整然さと専有面積を持った住居を用意する必要がある。住戸部は全体で 9 住戸用意し、単身住居者から家族世代を想定した住戸を用意する。

4.4 設計手法を取り込んだスタディ

研究 (3. 設計手法の概要) にて提示した設計手法を取り込み、設計のスタディをおこなう。手順として、最初の第 0 スタディ (ST. 0) では敷地や周辺環境の読み込みを行う。現状の敷地の高低差、方位、前面道路や周辺環境などを抽出することにより、設計物ではなく、様々な条件を基点に次の第 1 スタディ (ST. 1) に繋げることを心掛ける。ST. 1 以降は、【都市の非理論的事物】から発想される設計手法を取り込みながら建築物の形式を決定する。スタディの回数が増えるごとに、設計物のヴォリュームから詳細な収まりまでもが取り合いを持ち、互いに共生する建築物ができる。スタディを重ねていくことによって建築空間の極端な機能的破綻も防ぐとともに、着実に多解釈性に富んだ場が創出されることを期待する。

4.5 結

本研究より提案した設計手法は大都市に点在する、人々の生きる姿、すなわち彼らの都市に対する行為を

観察することを主眼としている。都市で発見される事例を我々が再考し、建築空間として社会に再び還元することは建築設計を行う我々が行うべき職務であるのだと信じているからである。新たな視点で都市を観察し、都市と設計されるべき建築の関係性を再考するきっかけになることを期待している。



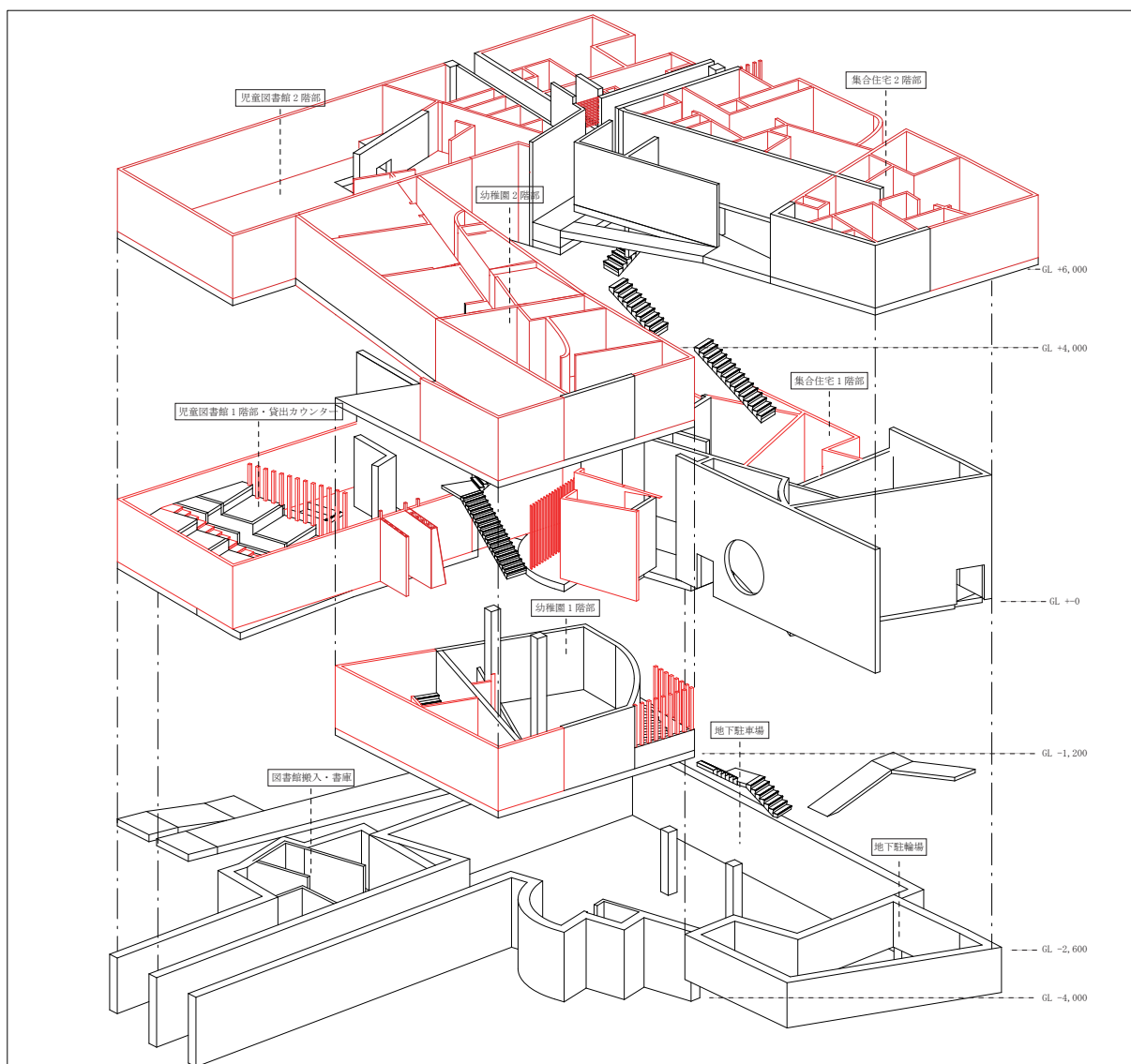
▲図5 ケーススタディ設計までのプロセス(事例 no1)

【脚注】

註 1) 参考文献 19) p238 より、1970 年代初め、今日では通常「ポストモダニズム」と呼ばれる建築における新たな手法群が現れたと言及。また参考文献 17) p158 より、1990 年代にポストモダニズムが急速に力を持ったと言及。註 2) 参考文献 17) p162 より、「『包摂を目指す日本建築には…多様で、ときには矛盾する要素はますます珍しいものではなくてきていて…』」註 3) 参考文献 15) p6 より註釈「…1960 年頃からモダニズムの多くの機能的や理念や価値観を、過剰な言語を蘇生させるために極端にまで押し進めた…」註 4) 参考文献 17) p158 註 5) 参考文献 16) 註 6) 参考文献 16) p33 註 7) 参考文献 16) p34 註 8) 参考文献 20) p120 よりバーソンの社会システム論を参照 (社会システムは、アクターの共通認識の大部分を満たすことにより構造として成立する) 註 9) 参考文献 18) p1252 より、ジェネリックシティの土台となっている合理的建築からなる都市を参照 註 10) 参考文献 12) より、乾久美子の『風景のポートレート』の論考を参照 (本研究では、観察される風景や都市を建築設計に応用する方法を提案する) 註 11) 参考文献 13) p213「人間が世界をどのように体験し、働きかけるか」という論考より参照 註 12) 参考文献 18) p19

【参考文献】

1) 青木淳. (n.d.).『フラジャイルコンセプト』. NTT 出版. 2) 千葉雅也. (2018).『意味がない無意味』. 河出書房新社. 3) (2017). A+U, 17:05(米国の若手建築家). 4) Rasmussen, S. E., 訳. 佐々木宏. (1966).『Experiencing Architecture』. 美術選書. 5) Lefebvre, H. (1929).『The Production of Space』. Blackwell. 6) Norberg-schulz, C. (1971).『Existence, Space & Architecture』. Praeger. 7) 門脇耕三. (n.d.). 反一空間としてのエレメント. Retrieved from https://www.10plus1.jp/monthly/2015/02/issue-01.php 8) 迫田正実. (n.d.). 建築をめぐる意味と解釈. 日本建築学会近畿支部研究報告集, 計画系 (27), 889-892. 9) 渡辺豊和. (1968). 建築に於ける記号の意味 (その 1~8). 日本建築学会学術講演梗概集, 計画系 (43). 10) 大山敏吉. (2016).『ドゥルース抽象機械 (非) 性の哲学』. 河出書房新社. 11) Venturi, R., Brown, D. S., & Izenour, S. (1977).『Learning from Las Vegas』(新装版). MIT Press. 12) 乾久美子. (2014).『小さな風景からの学び』(初版第 3 刷.). TOTO 出版. 13) 古谷嘉幸. (2020). 人類学的観察のすすめ (1st ed.). 古小島舎. 14) Mallgrave, H. (2011).『An Introduction to Architectural Theory: 1968 to the Present』(1st ed.). Wiley. 15) Foster, H. (1987). 反美学『ポストモダンの諸相』(室井公文, & 吉岡洋, Trans.). (新装版第 6 刷.). 勁草書房. 16) Venturi, R. (1982).『建築の多様性と対立性』(伊藤公文, Trans.). (第 1 版 16 刷.). 鹿島出版. 17) 門脇耕三. (2021).『ポストモダン建築とは何だったのか』. 現代思想. 18) O.M.A, Koolhaas, R., & Mau, B. (1995). S,M,L,XL (1st ed.). 010 Publishers. 19) Relph, E., 浩夫神谷, & 寛之岩瀬. (1999). The Modern Urban Landscape. (高野岳彦, Trans.). (初版.). 筑摩書房. 20) 種井タカシ. (2000). 社会学の理論 (1.). 有斐閣ブックス.



▲図6 プロジェクト(アイソメ図)



▲図7 全体配置図(1:900)



▲図8 内外パース図

第 1 章

序論

1.1. 目的と内容

建築を設計する際には、常にクライアントの要望や社会的条件を満たすことが要求される。しかし、一設計者の職能として、自らの設計表現に対する意思表示をすることも欠かせない。なぜなら、自らの創造に対する考察を開示することによって、他者からの理解だけでなく、自らの表現姿勢に対する反省と自己理解が深まると考えられるからである。そこで本研究では、自らの設計手法の方法論を提示し、それを応用した設計物の提案を行う。

本論で筆者が目指すものは空間の多解釈性であり、それを体現する空間を設計することである。多解釈性とは、合理主義的な建築システムと比べ、様々な空間の読み取り方を介在させ、ときには非合理さや矛盾を許す姿勢である。

本研究では、設計をおこなう手がかりとして、【都市の非合理的事物】(2.3 章で詳しく後述)に着目して、それらを収集し、建築的要素として再構築ができるような設計プロセスを提案する。

第 2 章

多解釈性と【都市の非合理的事物】

2.1. 多解釈性

筆者が重視している多解釈性という概念は、ポストモダニズムの建築理論に拠るものである。

本章では、まず、近代建築へのアンチテーゼを打ち立てたポストモダニズムの建築ムーヴメントを考察し、次に、R. ヴェンチューリの言説から多解釈性の意義を導出する。最後に、多解釈性を獲得する手がかりとしての【都市の非合理的事物】について論じる。

2.2. 現代から考察するポストモダンへの反省

建築におけるポストモダニズム期は 1970 年代初めから、1990 年代あたりまでとされている。ポストモダニズムというムーブメントをひとくくりに扱うことは難解でかつ、誤解を起こす危険性がある。しかし、ポストモダニズムを取り上げる以上、ムーブメントに対する定義をつける必要がある。ハル・フォスター【*Hal Foster, 1955-, America*】の『反美学～ポストモダンの諸相』よりポストモダニズムと呼ばれる運動の理念を次のように定義している。

ポストモダニズムは一文化と経済における新しいモードと古いモードとの、そしてまたそれぞれが帯びている様々な利害間の闘争として考えるのが一番よいように思われる。現在（1987）におけるポストモダニズムの標準的な立場というものは存在する。我々はポストモダニズムを民主主義として支持し、エリート主義のモダニズムを攻撃することができる。逆に、エリート主義（未来の文化として）のモダニズムを支持し、単なるキッシュとしてのポストモダニズムを攻撃することができるだろう。註 1

とポストモダニズムの運動はモダニズムが推進してきた合理主義やエリート主義に対する反動や抵抗の姿勢であることを定義としている。まだポストモダニズムの時代区分を強いてするならば、エドワード・レルフ【*Edward Relph, 1948-, Canada*】『都市景観の 20 世紀～モダンとポストモダンのトータルウォッチング』より参照する。

1970 年代初め、今日では通常「ポストモダニズム」と呼ばれる建築における新たな手法群がほぼ（ベトナム戦争や環境破壊に対する反発と）同時に出現した。それは旧市内の古びた建物を再生する試み、伝統遺産の保護に対する関心の高まり、都市デザインに対する新たな見方などである。註 2

また、ポストモダニズムの運動が収束する決定的出来事はないのだが、収束した時期を定義するならば、『現代思想 2021.6 月号』より門脇耕三【*Kozo Kadowaki, 1977-, Japan*】が投稿した『ポストモダン建築とは何だったのか』を参照する。

1990 年代に急速に力を失ってしまったとはいえ、ポストモダン建築は、モダニズム建築への強力な異議申し立てであったことは間違いない、それを支えた議論もモダニズム、モダニズムに劣らないほどの分厚さがあった。註 3

1990 年代にポストモダニズムのムーブメントが収束したと述べている。

【脚註】

1) 参考文献 15 p.6. 7 2) 参考文献 19 p.238 3) 参考文献 17 p.158

ポストモダニズムの建築には象徴的な形式性や、記号論的設計物の印象が強いが、その背景には多くの言説がある。ポストモダニズムがもっとも盛んに議論されていた時期は短く、ムーヴメントとしても短命であった。しかし、ポストモダニズムが残した議論や理論を一蹴し、切り捨ててしまってはあまりにももったいない。ポストモダニズムの建築家が提示した理論の背景には、エリート主義的であったモダニズムとは対比的な、空間の使用者のために考えられたものであった。このような民衆的な思想は現代においても、有用であると思われる。

さらに、ポストモダニズムの議論が収束してから 30 年ほどであるが、近年の建築界の動向でもポストモダニズムに関する議論が再び行われるようになっている。日本国内でも、SANAA などのポストモダンの意味論を漂白しようとした建築家たちを乗り越えるように、様々な若手建築家が台頭し、再び複雑性や矛盾性を持つ空間が議論に上がるようになっている。

しかし、そもそもなぜポストモダニズムの議論が為されなくなってしまったのかという疑問が残る。再び門脇耕三の言説を参照すると、

ポストモダニズムの根源的思想が伝統に対する批判的脱構築であるにも関わらず、「歴史主義的で記号論的な建築というポストモダン建築の通俗的イメージは、そこに至るまでの多量の議論を矮小化させてしまった」註 4

とポストモダニズム建築が持たれてしまったイメージによってムーヴメントの縮小が起こったと考察している。

【脚註】

4) 参考文献 17) p.158

2.3 多様性と対立性、すなわち多・他解釈性

前章で取り扱った、ポストモダンの思想から発想されるものとしては、本研究のテーマである、解釈性をめぐる問題がある。本章で扱うのは、ポストモダニズムのなかでも先進的な理論展開を行ったロバート・ヴェンチュリー【Robert Venturi, 1925-2018, America】である。ポストモダニストの巨匠である、ヴェンチュリーの代表的著書の中に『建築の多様性と対立性』がある。本書で掲げられているマニフェストでは、近代建築を打開するための新しい建築理論としての意味論に関する言及がなされている。ヴェンチュリーのいう多様性・対立性とは近代建築の均質で単調な建築に対し、空間の複雑性を介入させることによって多様に富んだ空間を体現させるというものである。

私は厄介事とされるものも受け入れ、不確実性を利用する。多様性と対立性をともに抱え込んで、私は生命感と妥当性を獲得しようと思う。私は、「純粋なもの」より混成品が、「研ぎ澄まされたもの」よりおり合いをつけたものが、「単刀直入」よりねじれまがったものが、「明確な接合」より多義的で曖昧なものが、非個人的であるとともにひねくれており、「興味深く」同時に退屈で、「デザイン」されたものより紋切型が、排除せずにつじつまを合わせてしまったものが、単純より過多が、革新的でありながら痕跡的であり、直接的で明快なものより矛盾に満ち両義的であるものが、好きだ。註 5

ヴェンチュリーは多様に富んだ空間の有効性とポストモダニズム建築が示唆する空間の豊かさを論じ、自らの姿勢を表明している。

本研究では、ヴェンチュリーが言及するような多様性・対立性すなわち、空間における多解釈性をどのような方法で表出させ、設計手法として提案するかを検討してゆく。また、ポストモダニズムの衰退の原因と思われる記号的手法の反省として、現代に着目した、新たな姿勢で設計手法の確立に臨まなければならない。

現代の都市（東京）に着目し、それに応用可能な、観察者の解釈いわば意味論に着目した建築的設計方法を提案してゆく。ポストモダニズムのエッセンスである多様性、すなわち建築空間の多解釈性を自らの設計手法論により再構築することを試みる。

【脚註】

5) 参考文献 16) p.34

2.4. 【都市の非合理的事物】について

建築における多様性、すなわち多解釈性を獲得する手がかりとして【都市の非合理的事物】に着目する。【都市の非合理的事物】とは、都市や建築がもつ合理的構造から逸脱したもの、社会的なシステムから見ると非合理に感じられるものと定義する。方法としては、こうした事物の状態を記録し、建築空間として構築する。都市にある事物を取り上げ、建築的応用を行うことにより、人間の様々な意図や、微視的な都市に対する個人が及ぼす弱い行為を空間化する。

【都市の非合理的事物】を提案するにあたり、社会システムや合理性を定義する必要がある。まず、社会システム（社会における一般的な枠組み）というものを定義する。碓井 崧【*Takashi Usui, 1962, Japan*】らの『社会学の論理』より、タルコット・パーソンズ【*Talcott Parsons, 1902-1979, America*】の社会システム論についての言説を参照する。

われわれの日常生活においては、新しいグループのなかなどで次第に役割が形成されていく機会もなくはないが、われわれをとりまいているのはほとんどが既成構造的役割ばかりだといっても過言ではない。個人行為者にとっては、既成の役割はデュルケムのいう「社会的事実」すなわち外在的で拘束的なものとして立ち現れる。そのため、役割はその担い手にとってしばしば疎外感の源ともなる。自分分は組織の歯車にすぎず既成のシナリオに従って行為させられてだけだという感情がそれである。註6

パーソンズによると、個人的行為はしばし、社会が規定する“既成構造的役割”に準ずる。個人においても、社会全体においても、同じような拘束的仕組みが働き、そこから一般性、社会性というものが生成される。都市においても、パーソンズのいう社会システムは反映されているはずであり、都市の中の合理性やジェネリックな構成に現れている。

現代における新たな設計手法の提案にあたり、現代の都市（東京）から得られる様々な事物を参照し、設計の手掛かりとする。そこで、レム・コールハース【*Rem Koolhaas, 1944, Netherlands*】の著書『S,M,L,XL(ジェネリックシティ)』の論考を参考にする。彼によれば、東京（のような大都市）はジェネリックシティと定義されるものに該当する。著書から参照すると、

ジェネリック・シティの偉大なる独自性はうまくいかないものは一消費期限が切れたら一さっさと捨て、理想主義という名のアスファルト舗装は現実主義という名のハンマーで打ち砕き、逆にうまく育つものは歓迎するところにある。その意味で、ジェネリック・シティとは、かつて都市だったものの残滓である。註7

【脚註】

6) 参考文献 20 p120 7) 参考文献 18 p1252

『ジェネリック・シティ』の論考は、合理主義的によって構成されていた都市から芽生える様々な文化性や多様な行為性を擁護する都市性について言及している。本研究では、ジェネリック・シティに当たる東京が包容する、社会的合理性から逸脱した行為を発見する。それらの記録を【都市の非合理的事物】と定義し、本研究においてはそれらを記録し、設計される空間として再構築しようという試みなのである。

2.5. 【都市の非合理的事物】とポストモダニズムの記号的手法の差異

前項にて定義した【都市の非合理的事物】は、ポストモダニズム論でしばしば議論に上がる歴史主義的で記号論的な手法を避けるためにも有効な提案であると期待している。本項では、ポストモダニズムの設計手法でよく問題として挙げられる記号性について言及する。

[記号論的手法]（ポストモダニズムにみられる方法論）

- ・事物と建築物の直接的関係性に重点を置いてしまっている
- ・特定の事物がもつイメージを建築物に介入させることで建築のコンテキストを変更させる。
→建築物に事物の社会的認識を投影することによって意味の強靱化またはコンテキストの対立を成立させる。
- ・直接的な事物の投影を行うことによって、刹那的な存在にならざるを得ない。用いられる事物のイメージが古びてしまうと同様に建築も古びる。

[意味論的手法]（【都市の非合理的事物】を用いた設計手法）

- ・事物から発見される意味自体に重点を置いている
- ・必ず事物は、それから発生する社会的認識（主意味）と個人の解釈などの副次的意味の二重性があり、それを考察することをひとつの構造とする。
→事物にから認知される意味の複層性を“構造”としている。

さらに、

「記号論的手法」において、



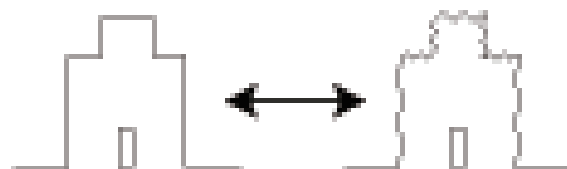
事物の“主解釈^{註8}”を建築に投影すると結果的に建築のコンテキストがその持つイメージに吸収され、新しい意味の持つ建築物として生まれ変わる。

“主解釈”とは、事物全般が持つ、意味のヒエラルキーと関係する。観察され、解釈（理解）される事物には、社会的に一般的な主解釈とそうでない、“副解釈”があるという考えがある。例えば、鉛筆を観察した時には、筆記用具としての“主解釈”と、木片と木炭の塊としての“副解釈”という捉え方が可能である。また、“主解釈”は社会システムの中での一般性によって創出されるので特定は比較的容易であるが、“副解釈”は主観的、あるいは特例によって無数に存在しうるので、完全に観察者の解釈に委ねるしかないのである。

註 8

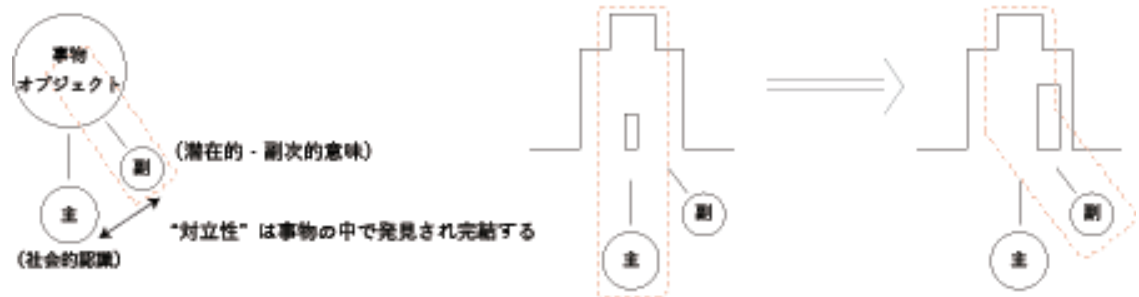
ヴェンチューリやポストモダニズムの建築家たちが目指した“対立性”というのは、あくまでも建築に事物の投影を行う前後の関係性が“対立”しているとみなしており、事物と建築物の関係を記号的に設計しているのではないだろうか。

このような記号的システムに従った手法を用いて設計することは事物と建築物が直接的に関係を持つ、あまりにも強烈なシステムなのである。



また、

〔意味論的手法〕（【都市の非合理的事物】を用いた設計手法）においては、



“構造としての対立性”を優先的に採用し、事物と建築物を区別し意味の構造のみを抽出する方法である。逆に、設計される建築物に意味の体系を挿入する場合（本研究）でも同じように事物が持つ意味性と建築物がもつ意味を区別して考える必要がある。

ここで構想されることは事物が持つ意味の多重性を生かし、建築的に応用しようというものである。事物の想定される“主解釈”とは、社会的認識であり、そのモノが発揮するであろうと期待される機能とも捉えられる。鉛筆は描くという機能が期待されるように、エレベーターが人を昇降させることが期待されるように。また、事物が期待される機能は必ず1つではなく、多数存在するものである。状況や鑑賞者が変わると事物の発揮する“解釈”は変わり、ある程度自由に認識される。さらに、事物には同時に複数の“解釈”を認知させることが可能であり、同時にいくつもの社会的共通認識が存在する。例えば、花は咲いて散ることもあるが、ハチに蜜を与え繁殖するということが我々はある程度認識している。

ここで目指す“構造”とは、社会的認識である“主解釈”を踏まえたうえで、“副解釈”となる、潜在的・発見的意味を見つけることである。ここで位置付ける“副解釈”とは、日常的な状況では想定されない事物の有様（ポテンシャル）のことである。

これらの現象は、鑑賞者が特定な時間と場所に居合わせたから発見できた“解釈”なのである。このような社会的な共通認識にそぐわない、ときには非日常な状況が事物に起こり得ることは承知しておかなければならない。

また、“主解釈”と“副解釈”は必ず、差異があると認識せねばならず、その体験的強度の違いから、“解釈”というものの構造の重要性を強調したい。

“記号的対立性”との最大の違いは、事物と建築の関係性にある。“構造的対立性”は事物から認知される意味を一度、事物と関わるものたちの関係にとどめ、意味を構造化したうえで建築的応用を行う。建築と事物は直接的に複合化されることなく、それぞれの構造の中で考察され、間接的に対応するのである。

本研究で扱う設計手法は解釈に結びつく“意味的構造”と考えられ、ポストモダニズム的手法は“記号”における事物の捉え方という違いと定義する。

第3章では、本章で扱った概念を建築空間として再構築し、建築空間として提案する。本研究の要となる設計手法を確立するのであるが、その際、各プロセスを言葉を用いて記述する。事物の状態や観察者の解釈を言葉によって記述することにより、プロセスとしての共通認識や共通価値が創出可能となると考える。

第 3 章

設計手法の概要と提案

3.1. 設計手法の概要

2章より、設計手法を考案するまでに至る論考を行った（ポストモダニズムの意味論に関する現代における応用と、東京という都市を用いた提案の有効性について）。

本章では具体的な事例と共に、都市で観察される【都市の非合理的事物】の記録と設計する建築空間に応用可能にする手法の提案を行う。

3.2. 【都市の非合理的事物】の発見 / 収集

本項は提案する設計手法の第一の手順にあたる。

設計の手がかりとなる事例の収集を行う（本研究では 60 個の事例を扱う）。

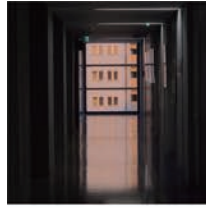
方法としては、都市生活の中で興味の引くものに遭遇した時、それらの事物を写真に収め、記録する。（次項図 1）発見される事物は建築的要素を持つ必要はないが、関連する事物やその状態に着目して記録を行う。これらの写真を事例として扱い、設計を始める手がかりとする。



no. 1 「人間を遮る」



no. 7 「地球のスケールを
思い出す行為」



no. 13 「フレームによる
遠近感の狂い」



no. 19 「機能の破綻を起こす細工」



no. 25 「透明に不透明が重なる」



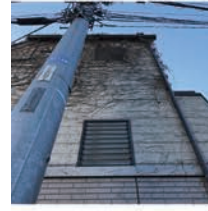
no. 2 「表と裏を同時に観賞」



no. 8 「機能という意味の
不成立」



no. 14 「使い方の規定を
読み替える」



no. 20 「自然と人工物の取り合い」



no. 26 「空間を規定する事物」



no. 3 「並び・リズムの崩壊」



no. 9 「無用となってしまった
モノが空間を作る」



no. 15 「重なりによる
事物の消失」



no. 21 「1つの事物内での
素材の違い」



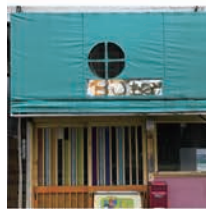
no. 27 「隠す行為が逆に目立つ」



no. 4 「期待を裏切る静けさ」



no. 10 「軸のあるものが
ズレるとき」



no. 16 「不都合な重なりによる
譲渡」



no. 22 「用途への付け足し」



no. 28 「飽和または過剰な状態」



no. 5 「材にとる分節」



no. 11 「モノの見え方の誤読」



no. 17 「見慣れた様相との不一致」



no. 23 「人の気配を感じる対比」



no. 29 「見え方の対比」



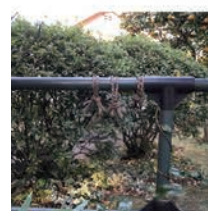
no. 6 「素材による切り替わり」



no. 12 「独立した状態、
孤立した状態」



no. 18 「内側から外へ向かうとき」



no. 24 「工業品と手工芸品」



no. 30 「事物がその場所にある
理由の不明さ」



no. 31 「平滑と突起物」



no. 37 「機能を示す文字」



no. 43 「情報媒体としての建築」



no. 49 「空間をつなぐ接合」



no. 55 「斜めに敷き詰める」



no. 32 「面的な事物と線的な事物」



no. 38 「新旧の同時確認」



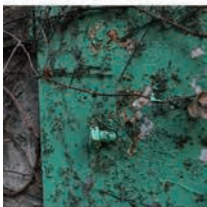
no. 44 「裏表の反転」



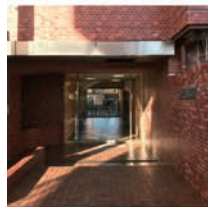
no. 50 「似たもの同士を重ねる」



no. 56 「きれいな円形」



no. 33 「はみ出しに対する補い」



no. 39 「小さなフレームから
何う外界」



no. 45 「身体スケールと
ジオラマ」



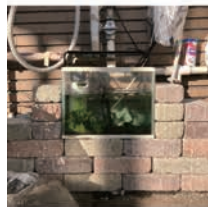
no. 51 「ソフトな葉と
ハードな屋根」



no. 57 「勝ち負けの譲り合い」



no. 34 「覆うことと
覆われないこと」



no. 40 「面を構成するもの同士」



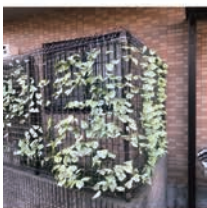
no. 46 「重なり合って一つになる」



no. 52 「埋める事物が主役になる」



no. 58 「屋根の上にさらに屋根」



no. 35 「曖昧な遮蔽」



no. 41 「外側のさらに外」



no. 47 「小さいものたちの集合」



no. 53 「建築の被り物」



no. 59 「曲がりくねった線」



no. 36 「弱い空間の区切り方」



no. 42 「過剰な保護」



no. 48 「付け合わせのモノで
成立させる」



no. 54 「同じ者たちの不揃いな整列」



no. 60 「倒壊の危うさ」

3.3. 言葉による事例の記述

本項は事例の設計化プロセスの第 2 の手順にあたる。

3.2. で発見 / 収集された事例を説明する詳細な記述を行う。記述の際、意識的に〔事物〕〔状態〕〔解釈〕について記述する。(図 2)

- ・事物：事例に関する物体そのもの（記述する際は「何」）。
- ・状態：事例に関する事物の状態（記述の際は「どのように」）。
- ・解釈：事例に関する観察者の理解・解釈を示す。

図 2 に示される写真は【都市の非合理的事物】から収集された事例 no.1 を例に作成している。全事例とも、図 2 のような記述を行っており、簡略化し、全事例の設計化プロセスを載せた表を 5 章で紹介する。



▲ 図 2（事例 no.1 の記述）

【脚註】

6) 参考文献 6

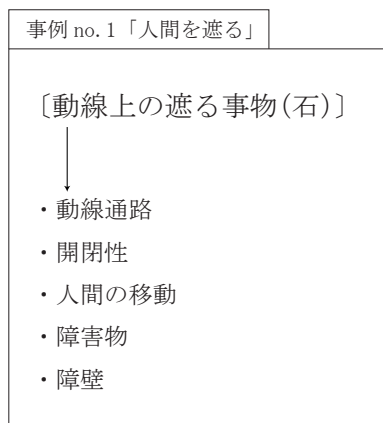
3.4. 「解釈」の抽出とキーワードへの変換

本項は事例の設計化プロセスの第3の手順にあたる。

3.3. で記述された文章を参照する。

3.3. で記述された「解釈」を建築に応用できるよう、それに関連するキーワードをさらに記述する。(図3)

記述される観察者の「解釈」を元に、関連キーワードを書き足すことによって写真で見られる事物が観察者にとってどのような事物として映っているのか発見できるのではないか。



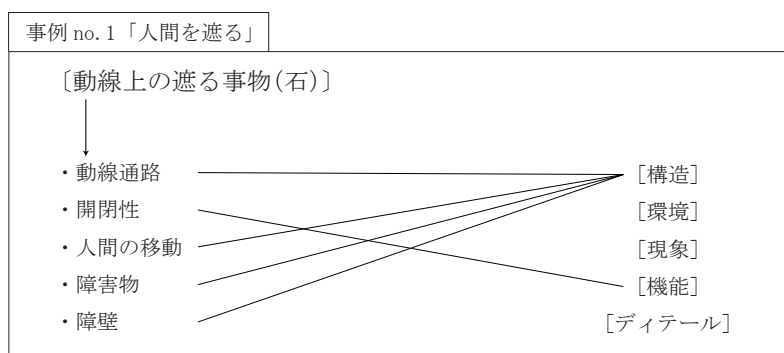
▲ 図3 (更なるキーワードの記述)

3.5. キーワードと設計可能性

本項目は事例の設計化プロセスの第4の手順にあたる。

3.3. と 3.4. から記述された〔解釈〕とキーワードをもとに、建築空間の設計を行う。キーワードを空間に変換するとき、建築を構成する諸要素を出発点とし、設計を行う。(図4)建築的要素は、構造、機能、環境、現象、ディテールなど建築を構成するいくつかの建築を構成する要素から設計を行い、出来上がる空間の可能性を検討する。

設計を行う際、キーワードと関連する建築的要素を複合的に想定することによって空間の変換までのプロセスを細分化し、言葉から空間を設計することが容易になるよう、設計化のプロセスに取り込んでいる。



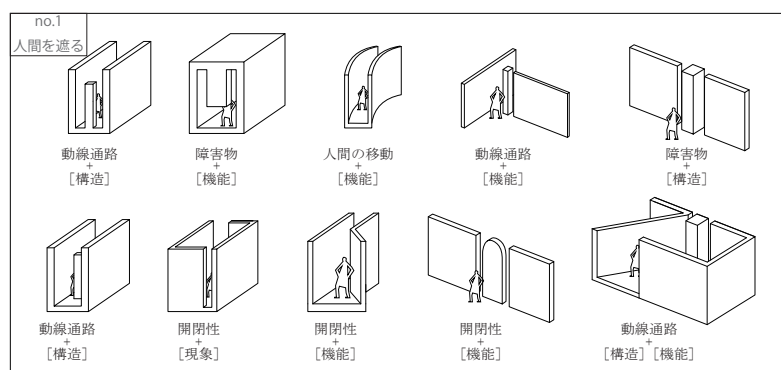
▲ 図4 (更なるキーワードの記述)

3.6. 一連の手順を踏まえたケーススタディ

本項は事例の設計化プロセスの第5のステップにあたる。

3.2. から 3.5. にかけて行われた事例の記述を空間として再構築する。抽出されたキーワードと建築を構成する要素とを、組合せながら、設計される空間をスタディする。

設計されるケーススタディは様々であり、建築的要素やキーワードを組合せながら観察された〔解釈〕としての表現の可能性を探っていく。(図5)に示される平面投影図は事例 no.1 にかんする幾つかのケーススタディである。それらのケーススタディから、設計されるプロジェクトに適合可能な空間を挿入または、組み込んで最終的に一つの建築物を成立させる。この時、建築物全体には複数の事例から得られた解釈と、それらから発生した空間が重なり合い、多解釈性をもつ建築空間が設計される。



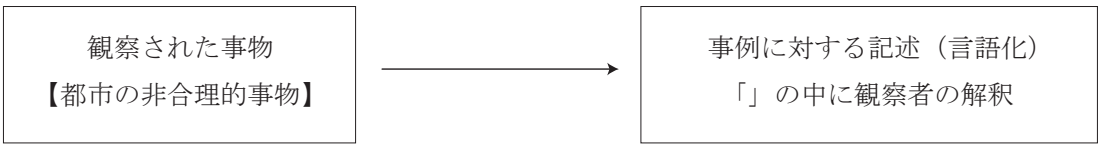
▲ 図4 (更なるキーワードの記述)

第 4 章

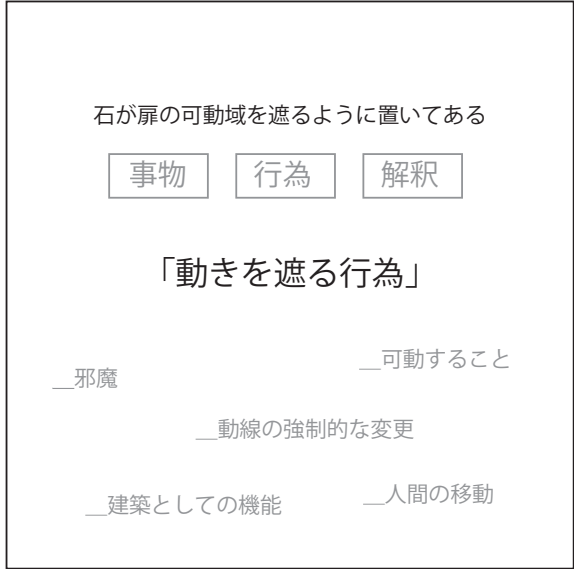
ケーススタディ一覧

4. 1. 【都市の非合理的事物】から設計されるケーススタディ

本章では、第3章にて観察された【都市の非合理的事物】のケーススタディ全60事例記載する。第3章で示した、設計化プロセスを簡略化してまとめたものが本章にまとめてある。一覧の見かたとして（図6）を参考にし、発見された事物から、建築的空間に変換される一連のプロセスを読み取っていただきたい。



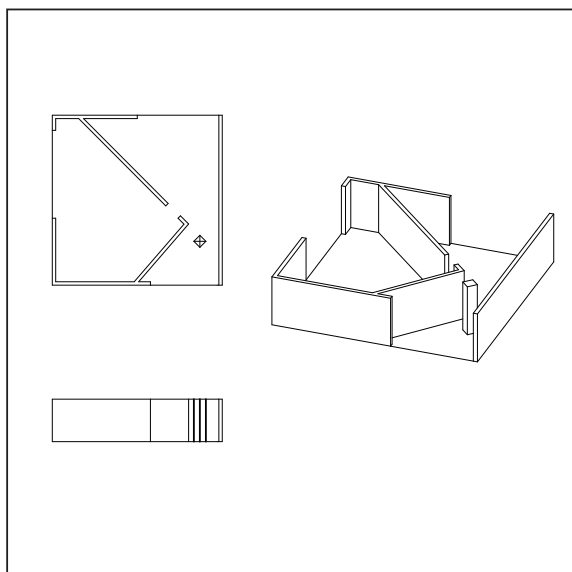
事例 no.1



▲ 図6 ケーススタディを導き出すまでのプロセス

言語化されたものから設計された
ケーススタディ

ケーススタディの
画像



事例 no.1



石が扉の可動域を遮るように置いてある

事物

行為

解釈

「動きを遮る行為」

__邪魔

__可動すること

__動線の強制的な変更

__建築としての機能

__人間の移動

事例 no.2



道路標識が異なる方向を向き、同時に表と裏がみえる

事物

行為

解釈

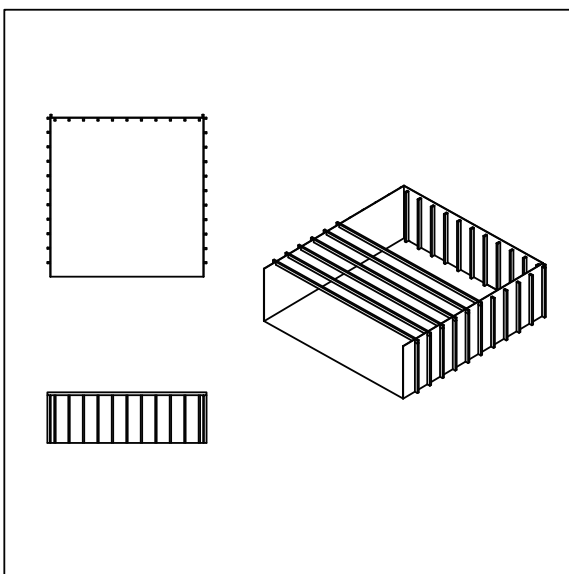
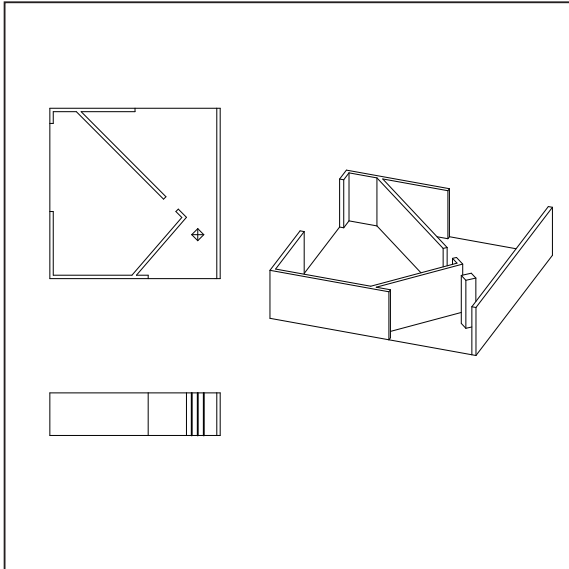
「正面と背面を同時に観察する」

__表層と構造

__同時性

__表と裏

__両面性



事例 no.3



1階に店舗が入り、上層階と建築表現が異なる

事物

行為

解釈

「協調・リズムの瓦解」

__反復

__リズム

__異質感

__パターン

__並置されるもの

事例 no.4



高速道路が閉鎖され、交通が途絶えている

事物

行為

解釈

「期待される充満とその静けさ」

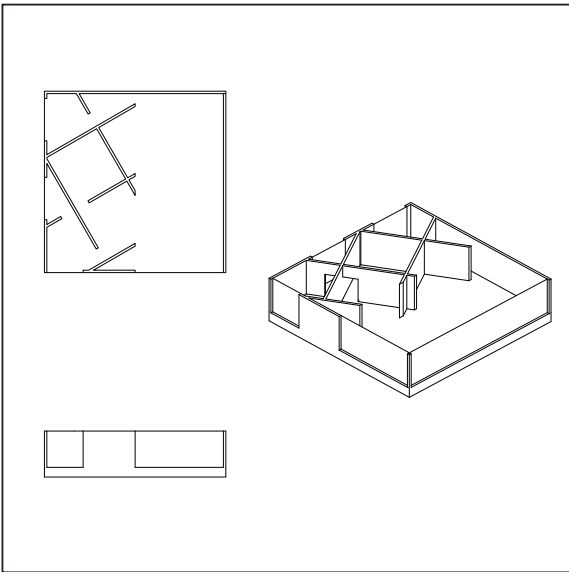
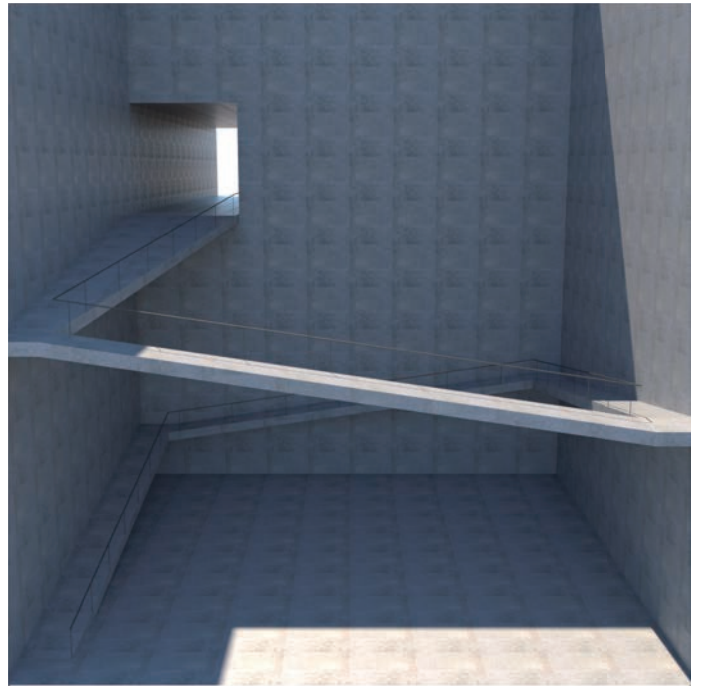
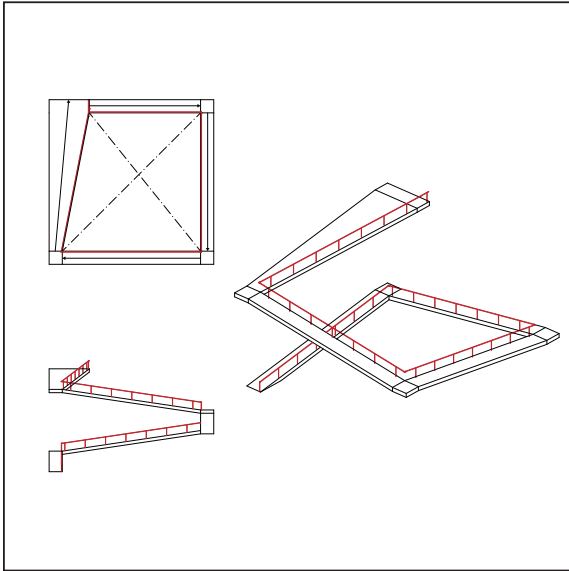
__空虚

__移動するためのインフラ

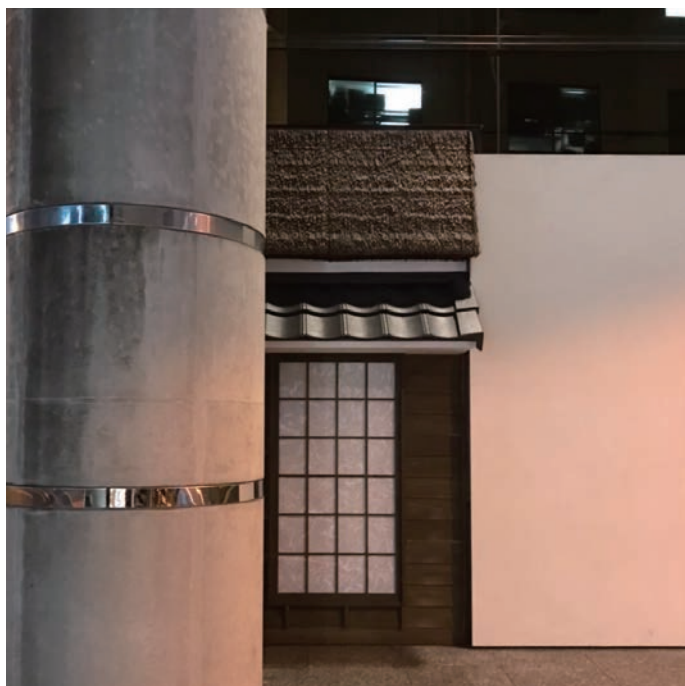
__充填と空白

__あるべきものがないとき

__モノの流れとその欠如



事例 no.5



異なるコンテキストの並置されたファサードが
空間を分節する

事物

行為

解釈

「多種の事物による空間文節」

__コンテキスト

__テクスチャ

__表現言語

__繋がりと分断

__コラージュ

事例 no.6



駅舎内の整備階段の上部のみ、壁面でなく柵に
変わっている。

事物

行為

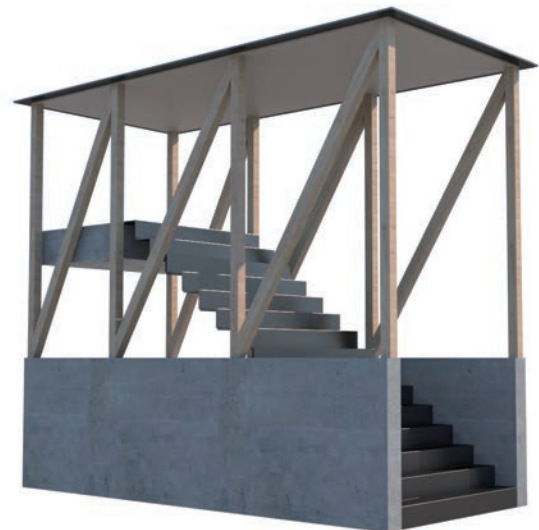
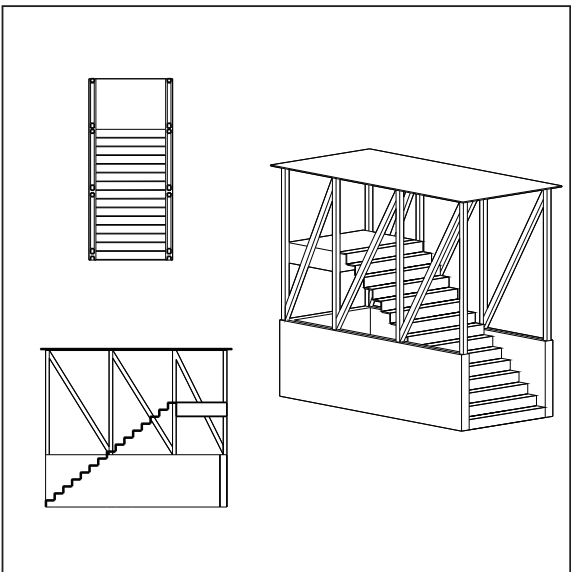
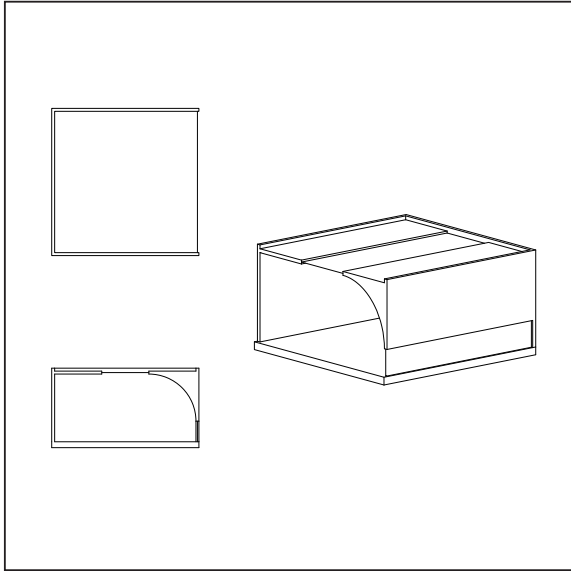
解釈

「素材による切り替わり」

__テクスチャー

__必要条件

__建築の分断



事例 no.7



地上では日が暮れてしまったが、高度のある飛行機
だけはまだ夕日に照らされて赤く染まっている

事物

行為

解釈

「地球のスケールを思い出す行為」

__現象

__恒常的物体への意識

__巨視的スケール

__光

事例 no.8



椅子が上下の向きとは関係なく、積みあがっている。
座面が上向きという概念はもはやなく、ただ積みあ
がったオブジェクトに還元される

事物

行為

解釈

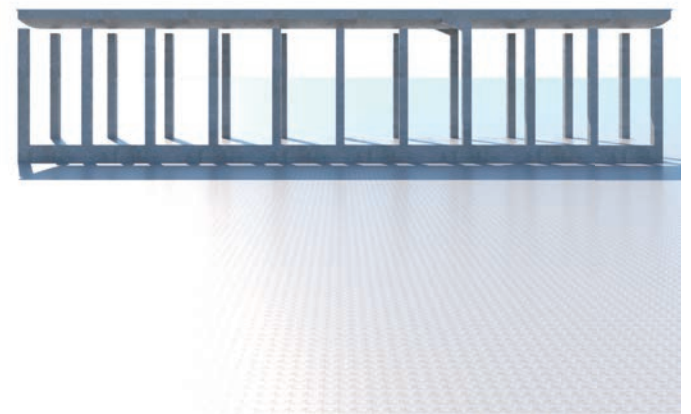
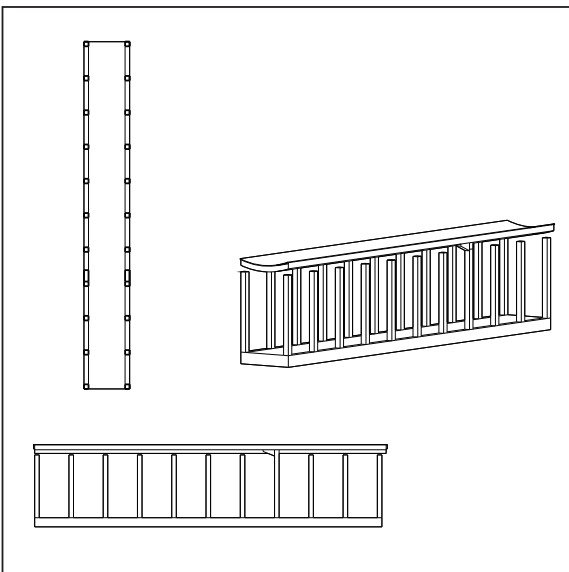
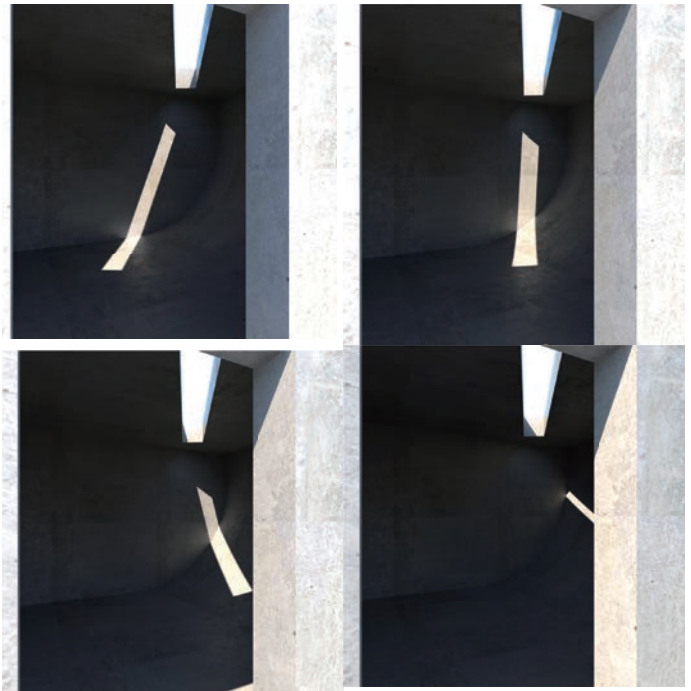
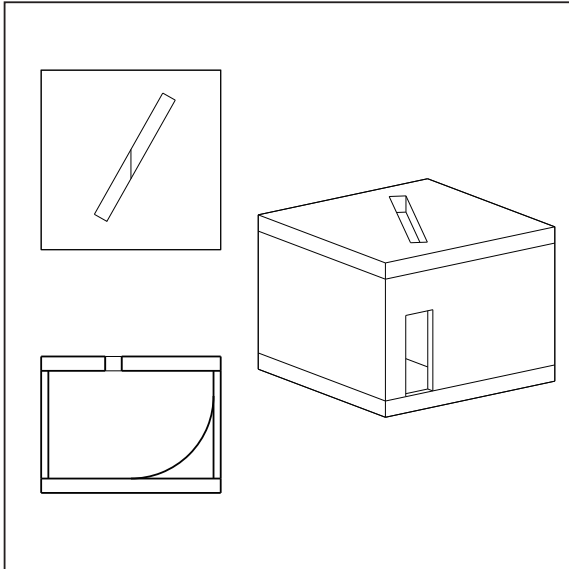
「機能という意味の不成立」

__機能性

__意味の破綻

__まばら

__ルールの欠如



事例 no.9



ミシンと古い空調機が民家の外に置かれている

事物

行為

解釈

「無用となってしまったモノが空間を作る」

__機械

__人間理用

__いないもの

__元の機能と現在の無用途

事例 no.10



舗装された道の軸に沿ったマンホールと
沿ってないマンホール

事物

行為

解釈

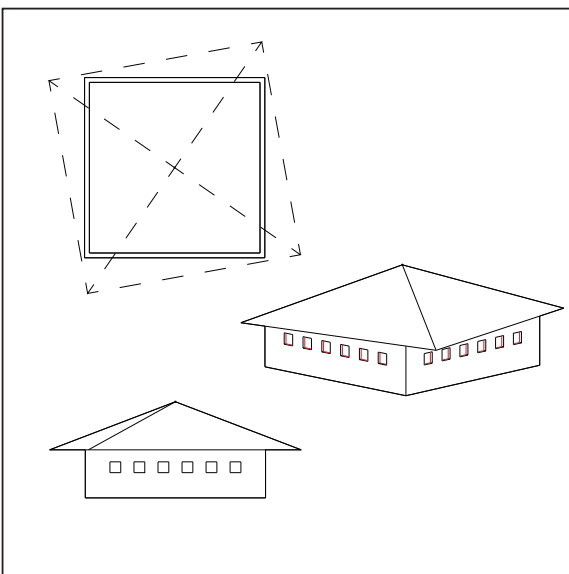
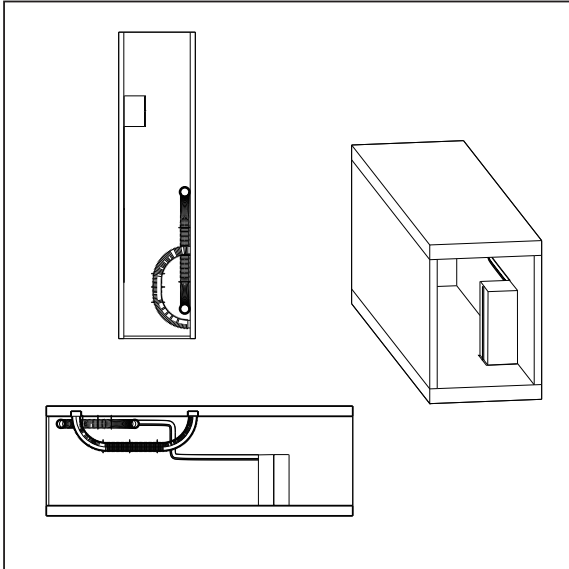
「軸のあるものがズレるとき」

__ズレ

__斜め

__方向性が決められたもの

__軸性



事例 no.11



時間や曜日によって消火器が都市の目印として機能し、ゴミ置き場と変わる様子

事物

行為

解釈

「モノの見え方の誤読」

__写り込み

__同時存在性

__相容れない事物の関係性

__対立的概念

事例 no.12



旗を立てる重しが駐車場の真ん中にポツンと置かれている

事物

行為

解釈

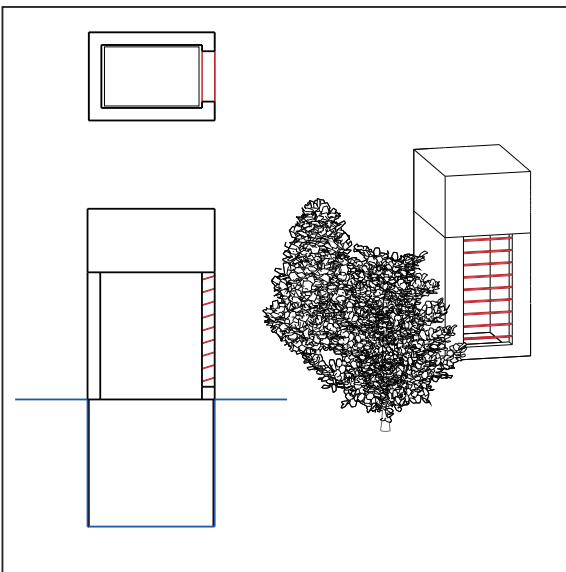
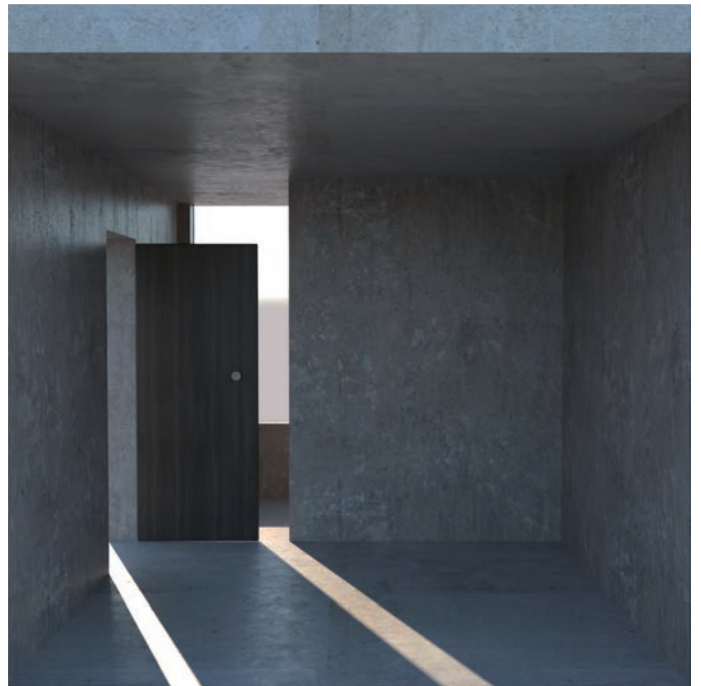
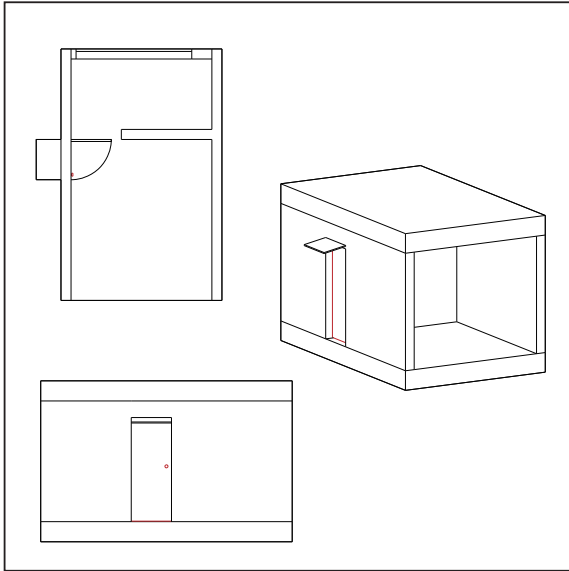
「独立した状態、孤立した状態」

__モノリシク

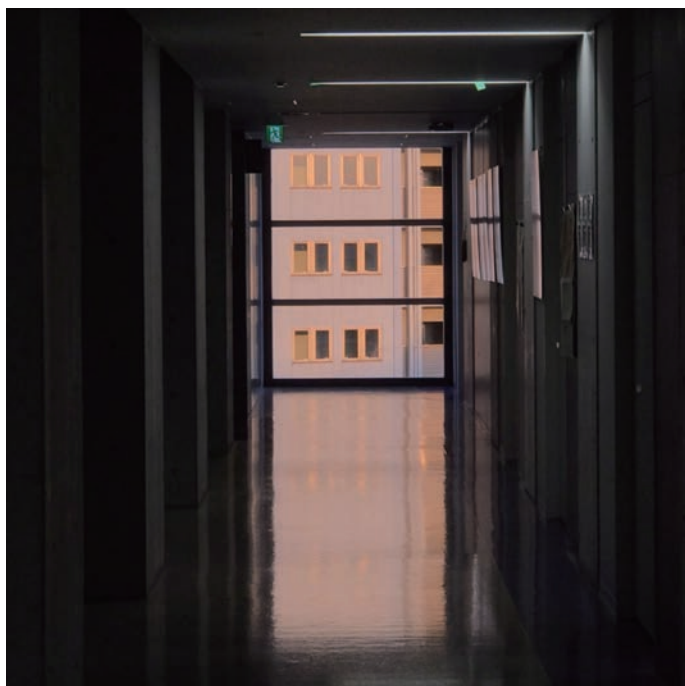
__孤立

__関係性を持たないこと

__多用途に埋もれる



事例 no.13



細長い廊下から見た窓の先にある建物が
思いのほか近く見える

事物

行為

解釈

「フレームによる遠近感の狂い」

__遠近感

__視線の軸

__視線の誘導

__細長さ

事例 no.14



店舗先に展示されている時計はプールで使用する
スポンジヌードルを台座として転用している

事物

行為

解釈

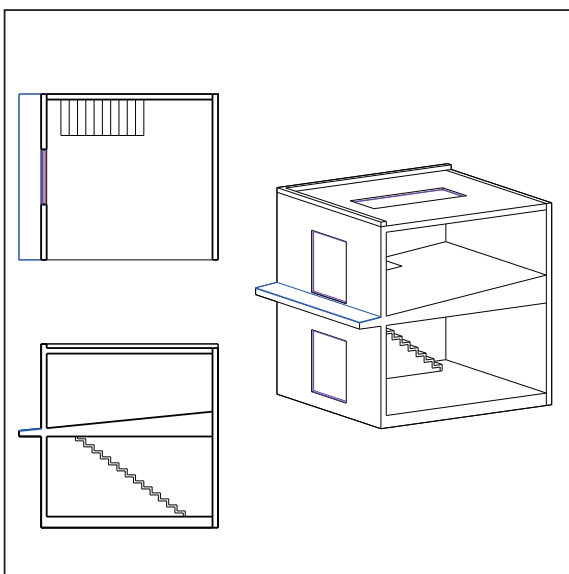
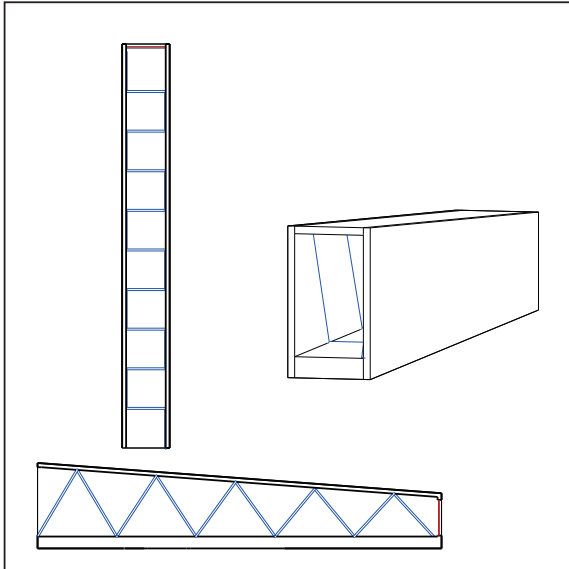
「使い方の既定を読み替える」

__読み替え

__モノが持つ意味

__既定の使い方

__転用



事例 no.15



駅舎を支える柱と、配線の保護筒が重なって見え
柱と一体になったように見える

事物

行為

解釈

「重なりによる事物の消失」

__重なり

__見えなくなる位置

__隠し

__一体性

事例 no.16



店舗のフーチングの裏に空調換気扇があり
通風のために穴がけられている

事物

行為

解釈

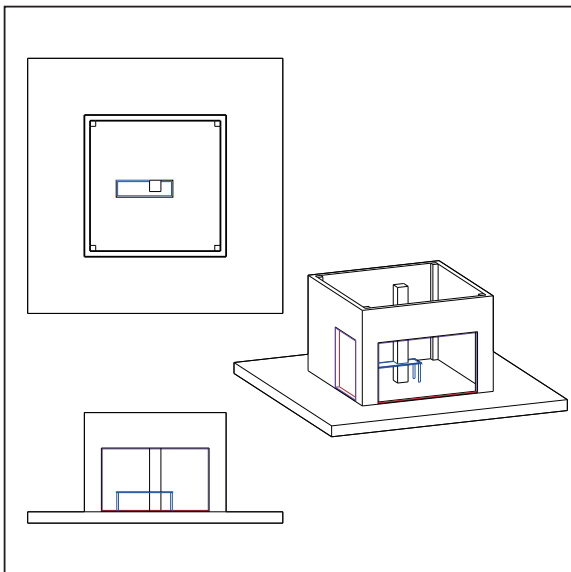
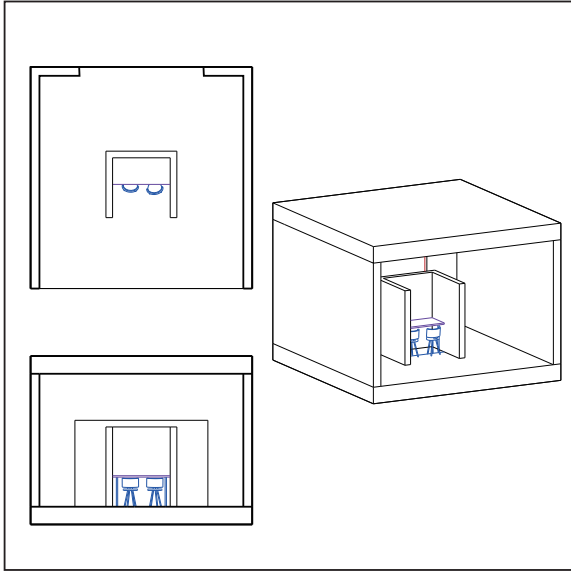
「不都合な重なりによる譲渡」

__取り合いの悪さ

__環境の共存

__相容れない事物の関係性

__貫通



事例 no.17



横積みのレンガに見慣れてしまった我々は
斜めに積まれた状態を見ると違和感を感じる

事物

行為

解釈

「見慣れた様相との不一致」

__事物の向き

__建築的方向性

__斜めである違和感

__直交性

事例 no.18



物置のトップライトから、内側の照明
に光があふれだしている

事物

行為

解釈

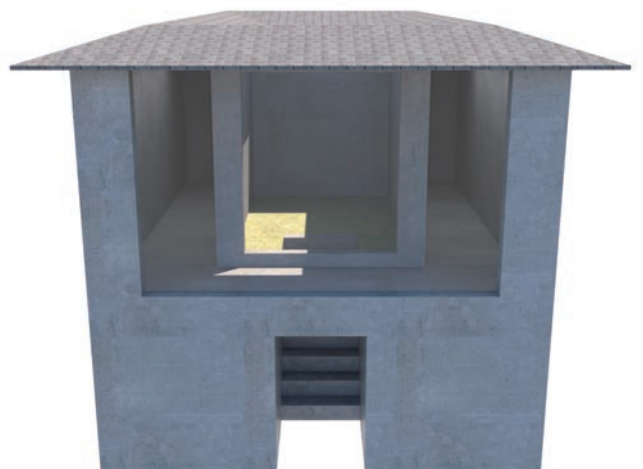
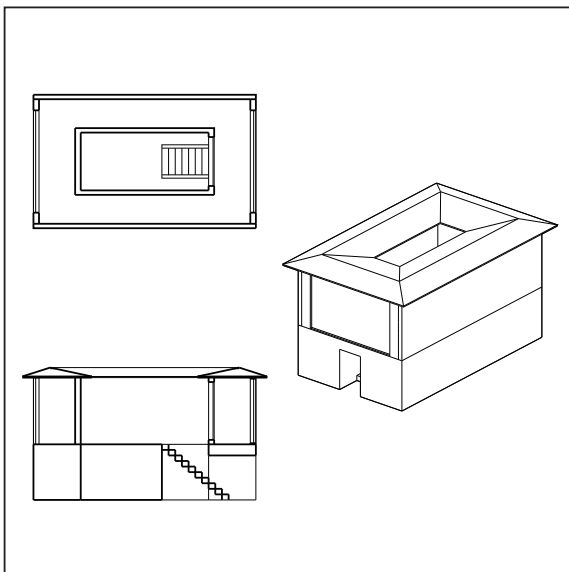
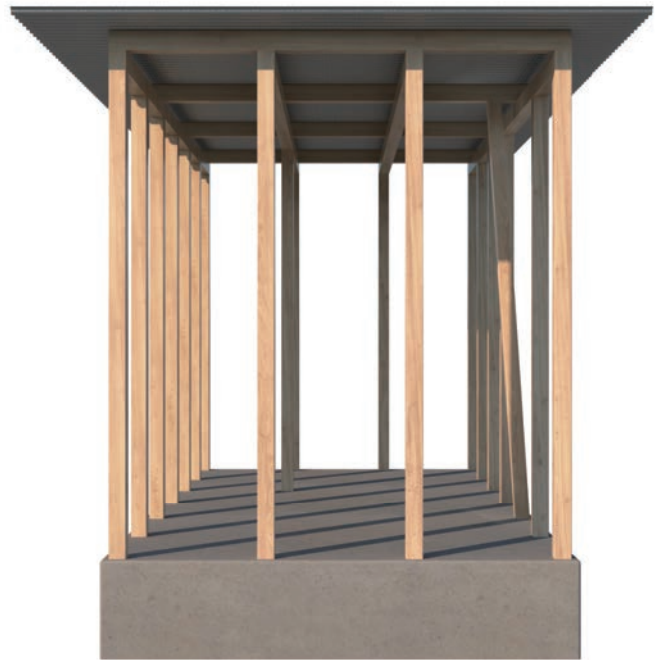
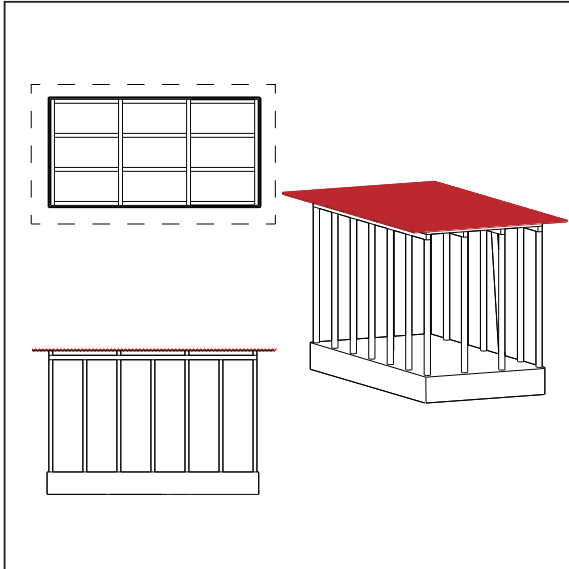
「内側から外へ向かうとき」

__逆向性

__外部と内部

__現象光と照明

__内外のヒエラルキー



事例 no.19



住宅の門が針金で結ばれ、
開かないように細工が施されている

事物

行為

解釈

「機能の破綻を起こす細工」

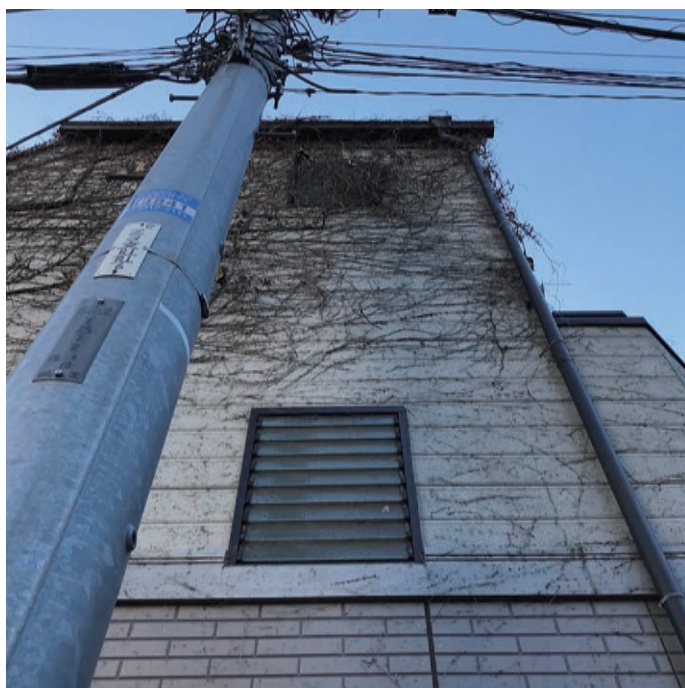
__用途の変更

__機能の重なり合い

__可動から不動

__転用

事例 no.20



住宅の壁面にツル植物が生え
窓すらも開かないようになっている

事物

行為

解釈

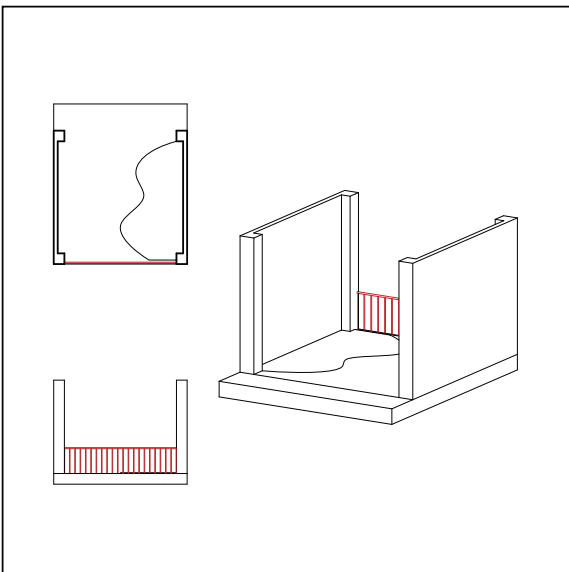
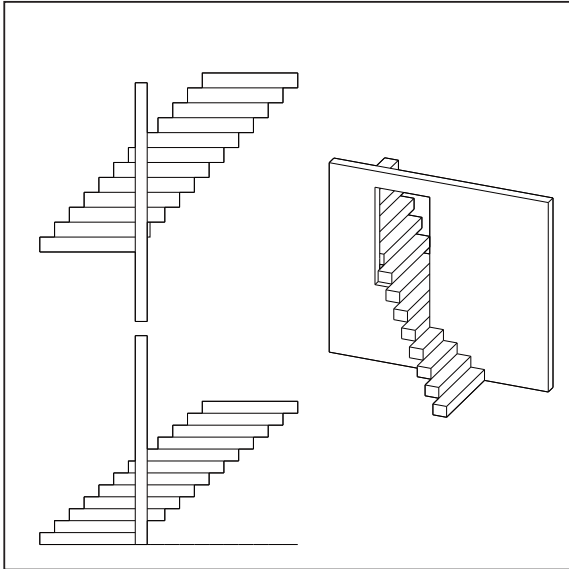
「自然と人工物の取り合い」

__自然

__庭と雑草

__自然の浸食

__人工物と自然の関係



事例 no.21



連続する一面の屋根であるにも関わらず、
屋根面の途中で瓦とトタンの屋根を使い分けている

事物

行為

解釈

「1つの事物内での素材の違い」

__素材性

__適当な切り替わり

__一つの機能で差材が変わる

__つぎはぎ

事例 no.22



給湯器の淵に

ホックに様々な掃除用具がぶら下がっている

事物

行為

解釈

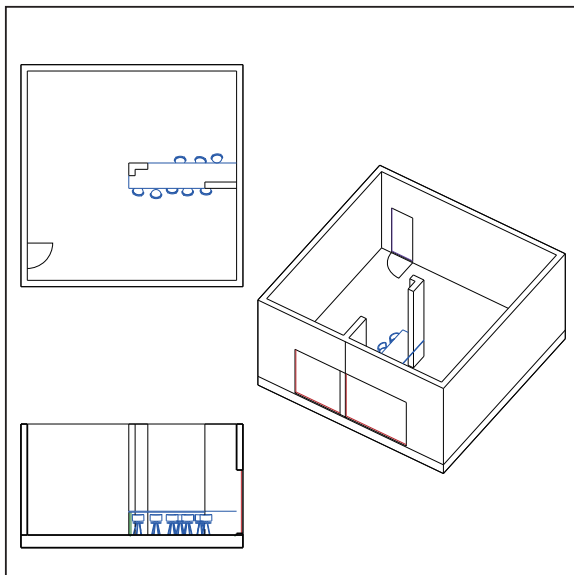
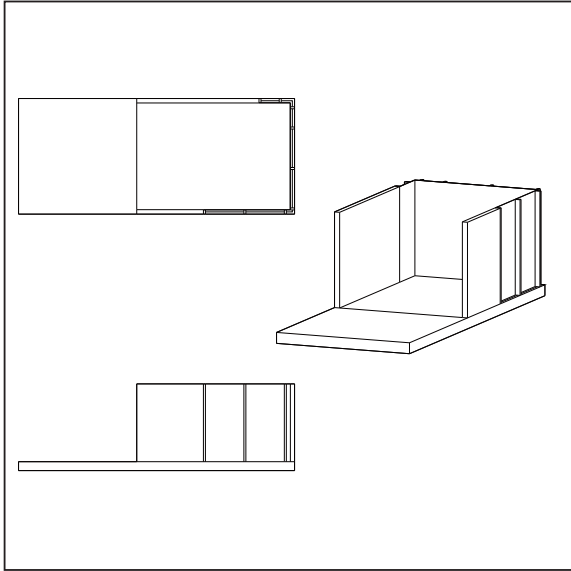
「用途への付け足し」

__+αとしての機能

__本来とは違う使い方

__利便性

__都合の良い使い方



事例 no.23



空き家の角にきれいに置まれた傘が
ひっそり置かれている

事物

行為

解釈

「人の気配を感じる対比」

__人の気配

__痕跡

__生活感

__無人と有人

事例 no.24



庭先の長いパイプ柵に短い縄が結び付けられている

事物

行為

解釈

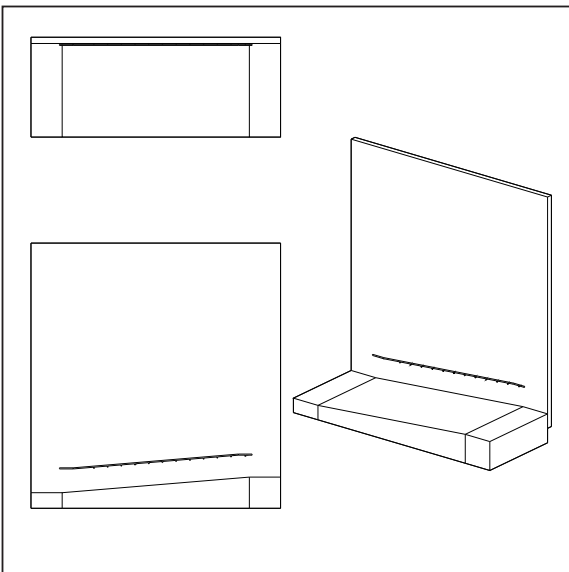
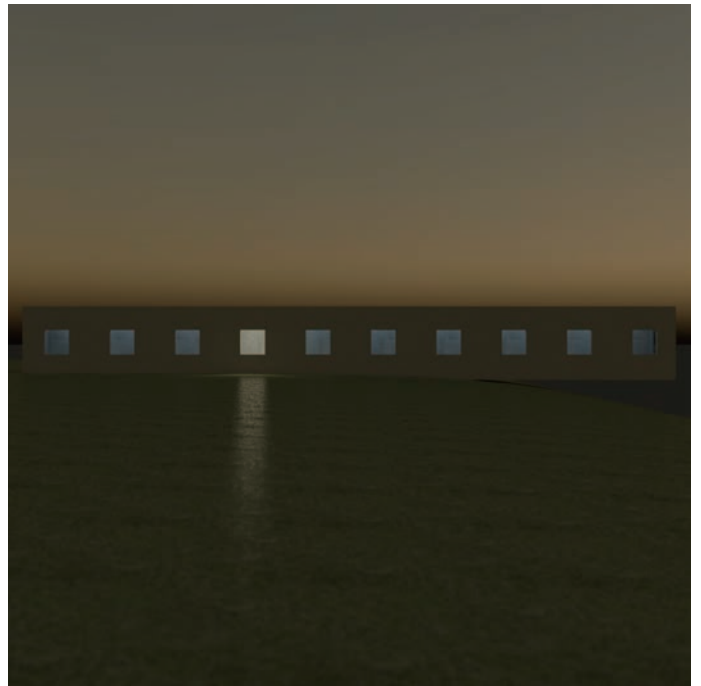
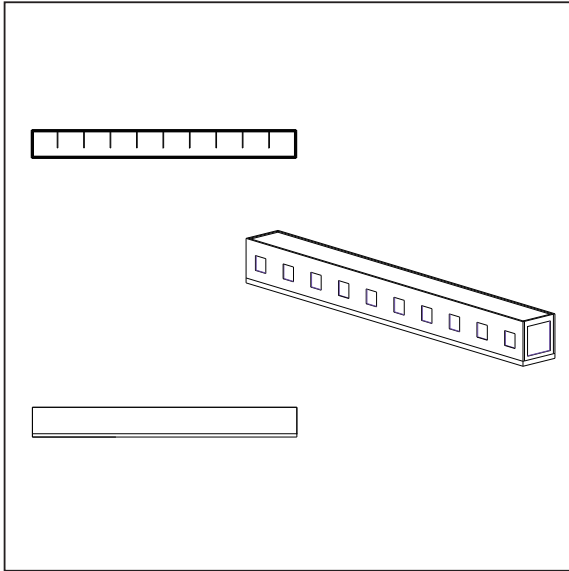
「工業品と手工芸品」

__既製品と手作り

__スケールの大小

__強力なものと弱小

__性質の差異



事例 no.25



透明なガラス窓に真っ赤な落書きが施されている

事物

行為

解釈

「透明に不透明が重なる」

__重なり

__レイヤー

__複層性

__透明と不透明

事例 no.26



店先空間に巨大な岩が2つ転がっている

事物

行為

解釈

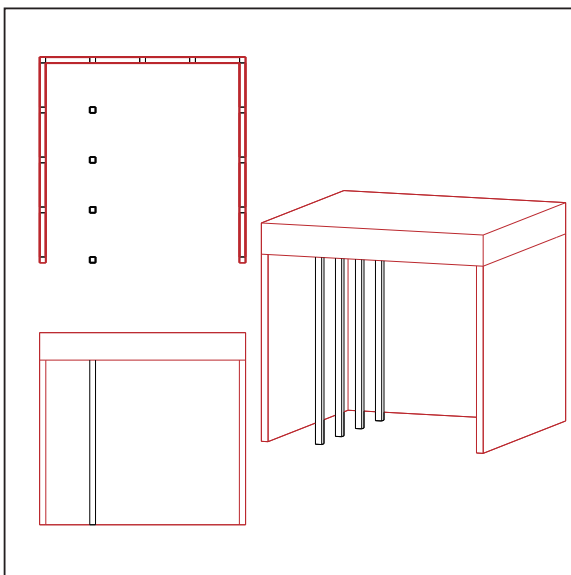
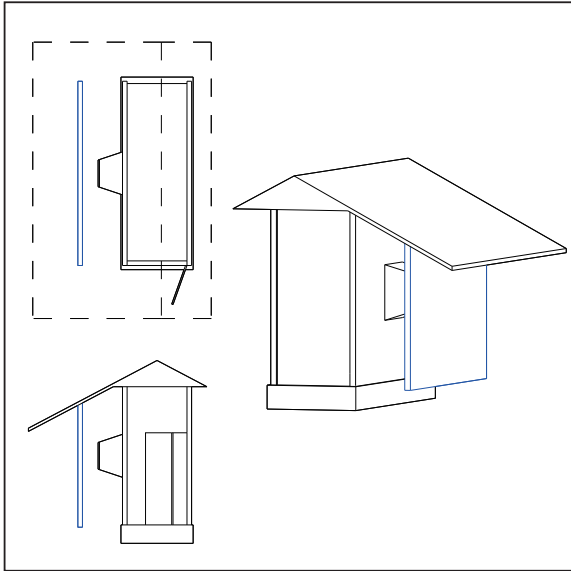
「空間を規定する事物」

__非建築空間

__無意識な空間

__大きさによる誘導

__空間の延長



事例 no.27



蛇口の立ち上がり管が手作りのカバーで覆われている

事物

行為

解釈

「隠す行為が逆に目立つ」

__隠し

__収まりの悪さ

__大きな覆い

事例 no.28



ゴミ箱からペットボトルや缶があふれ出し
ゴミ箱の上に積み上げられている

事物

行為

解釈

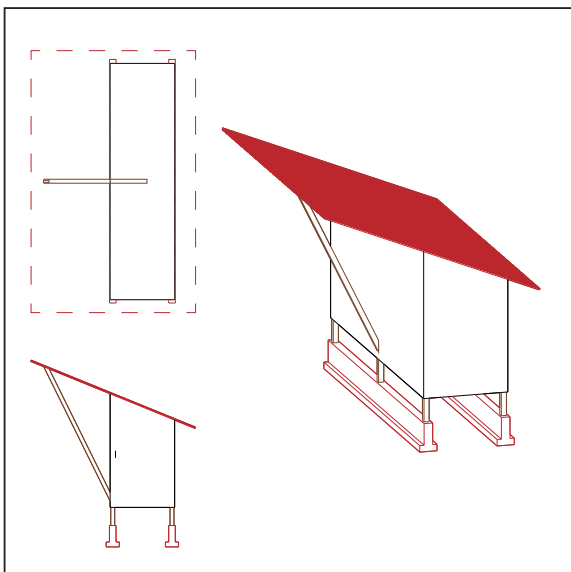
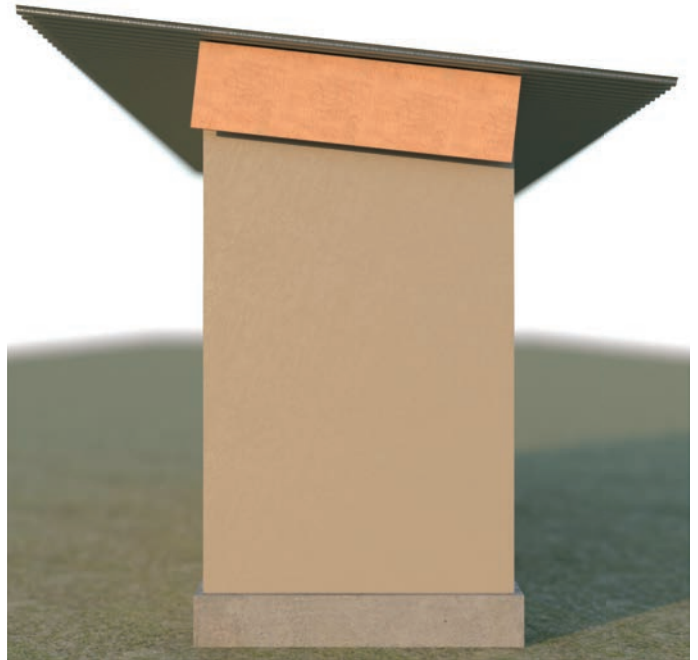
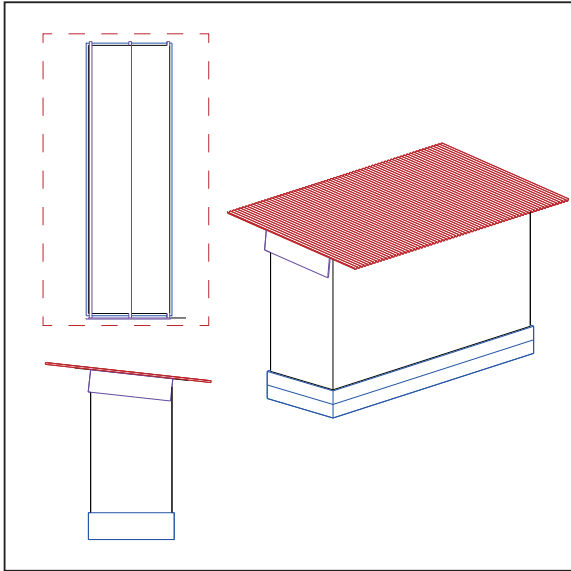
「飽和または過剰な状態」

__溢れだし

__収まりきらない

__過剰性

__大きすぎ・多すぎる状態



事例 no.29



レンガタイル仕上げの外装に対し
光沢のある金属煙突が目立っている

事物

行為

解釈

「見え方の対比」

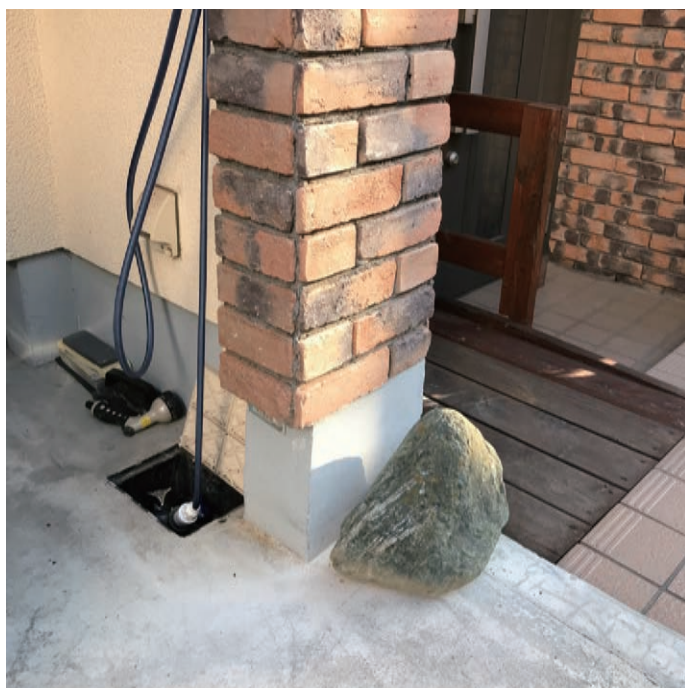
__色

__素材感

__光沢とくすみ

__対比

事例 no.30



住居の外に大きな石が転がっている

事物

行為

解釈

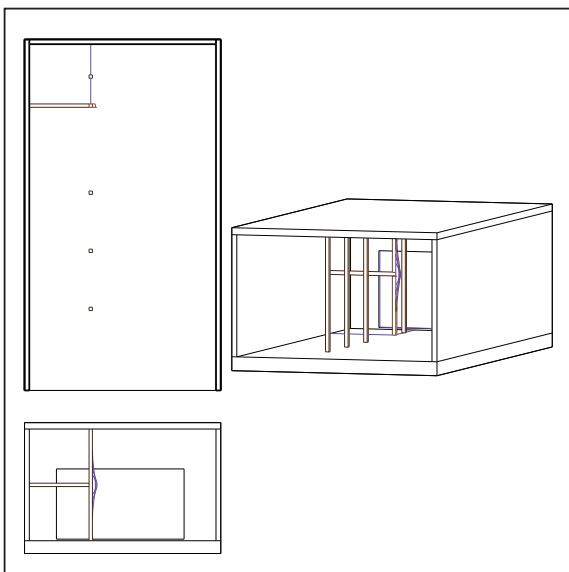
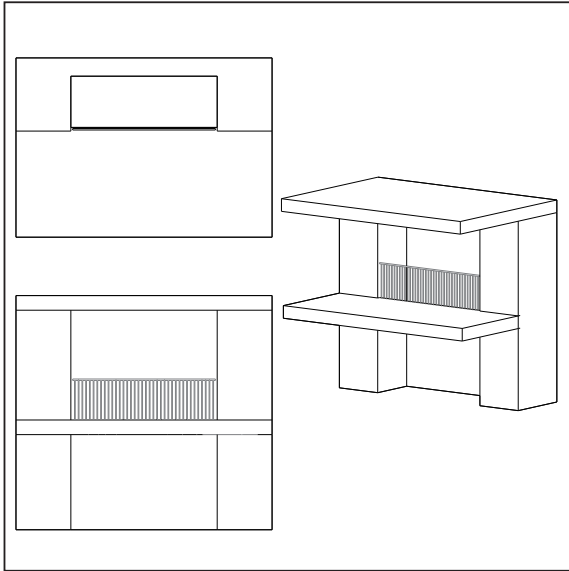
「事物がその場所にある理由の不明さ」

__場所性

__無意味に思われる配置

__形式の不一致

__不明な意図



事例 no.31



住居の壁面から排気煙突が突き出ている

事物

行為

解釈

「平滑と突起物」

__平面

__突き出し

__突起

__はみ出し

事例 no.32



コンクリート塀に鉄パイプが設置されている

事物

行為

解釈

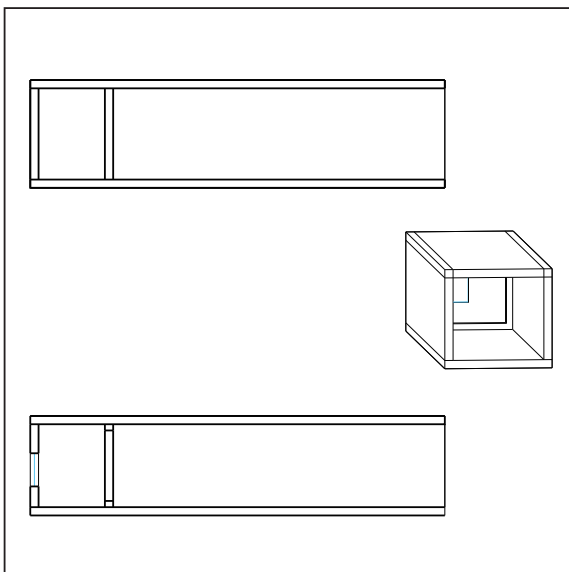
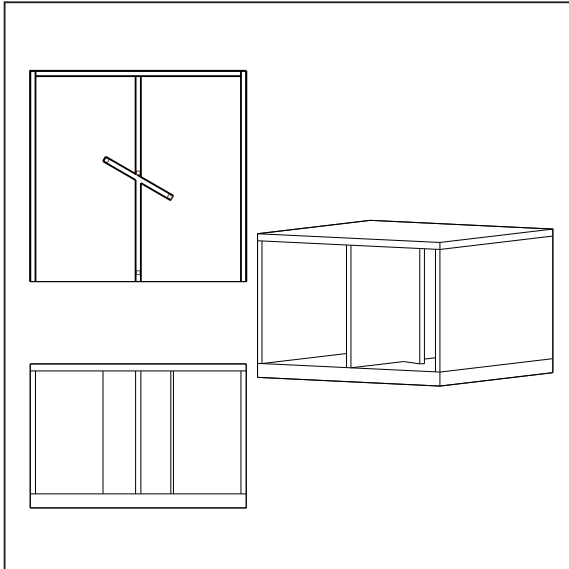
「面的な事物と線的な事物」

__凹凸

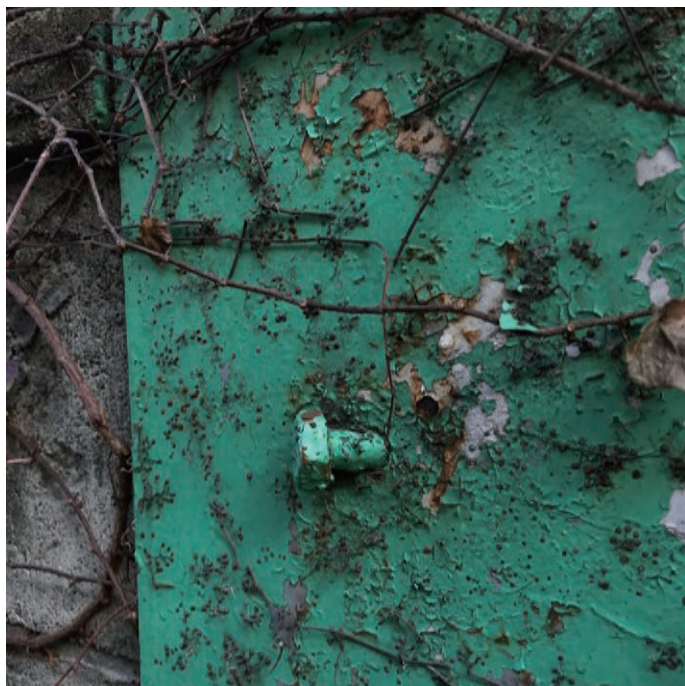
__面と線

__線による空間の仕切り

__弱い領域性



事例 no.33



壁面に取り付けられた鉄板を留めるネジがゆるみ
突き出た部分が曲げられている

事物

行為

解釈

「はみ出しに対する補い」

__収まりの悪さ

__あまり

__曲げ

__余剰

事例 no.34



庭先の木に網状のカバーが架かっているが
木の半分にはしか収まっていない

事物

行為

解釈

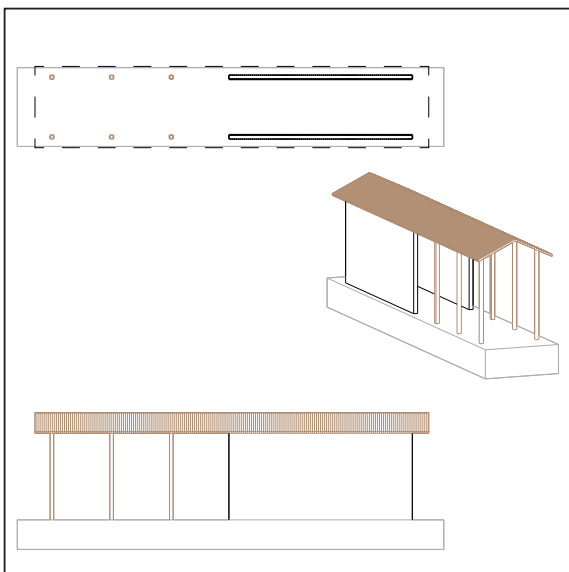
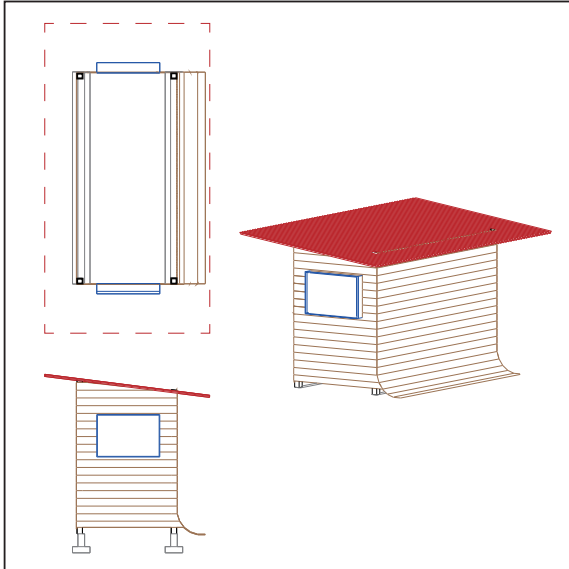
「覆うことと覆われないこと」

__覆い

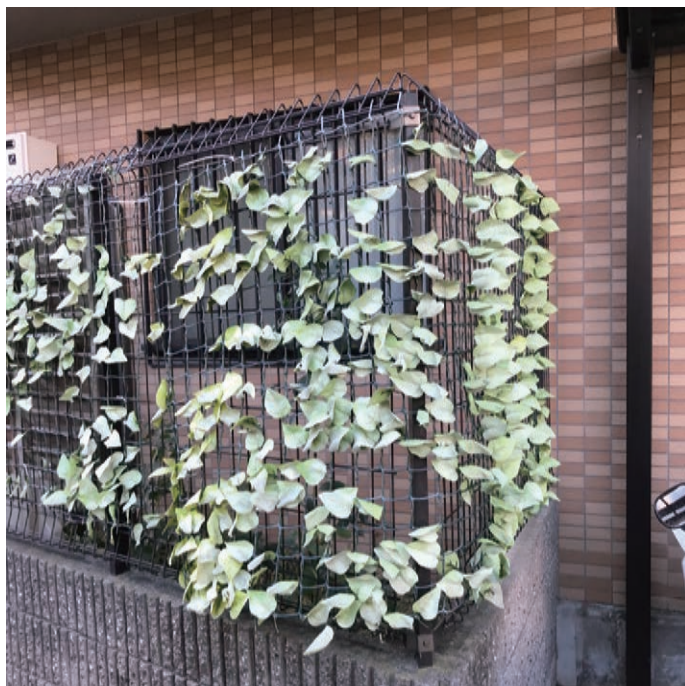
__隠し

__かぶり

__透明と不透明



事例 no.35



マンションのバルコニーへの視界を
造花の葉っぱで隠れている

事物

行為

解釈

「曖昧な遮蔽」

__隠す行為

__遮蔽の柔さ

__視線

__空間の区切り

事例 no.36



住居の柵には「たくさんの植木がひっかけられており
壁とはまた違った性質を持った境界が生まれている

事物

行為

解釈

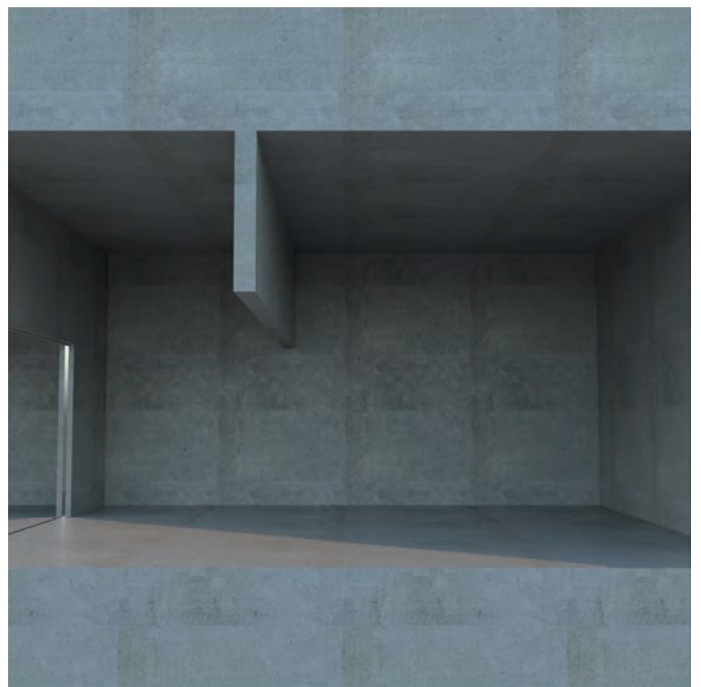
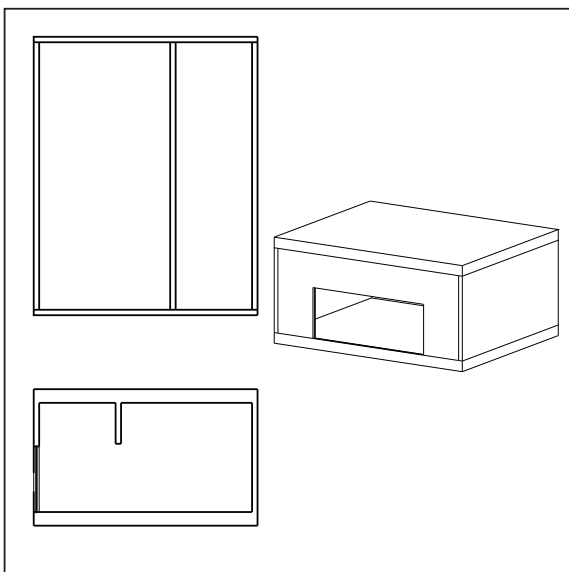
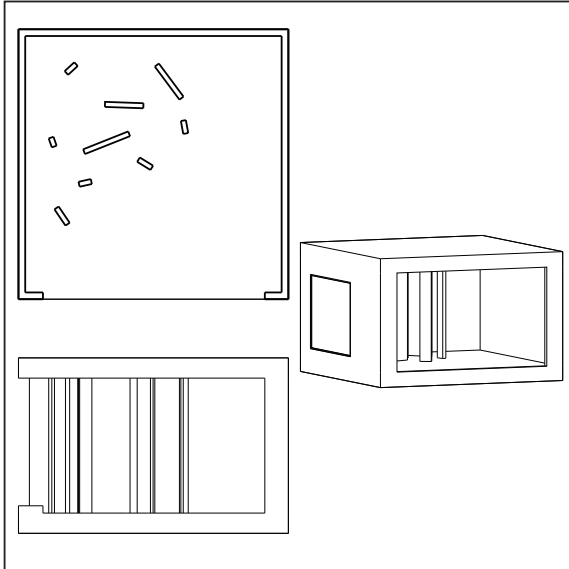
「弱い空間の区切り方」

__空間の仕切り

__境界

__植物による目隠し

__空間文節



事例 no.37



受水タンクの入口の扉に
大きな文字で容量が記されている

事物

行為

解釈

「機能を示す文字」

__非広告的文字

__機能を示す

__明瞭さ

__情報の記述

事例 no.38



きれいなコーンと壊れたボロボロのコーンが
駐車場に置かれている

事物

行為

解釈

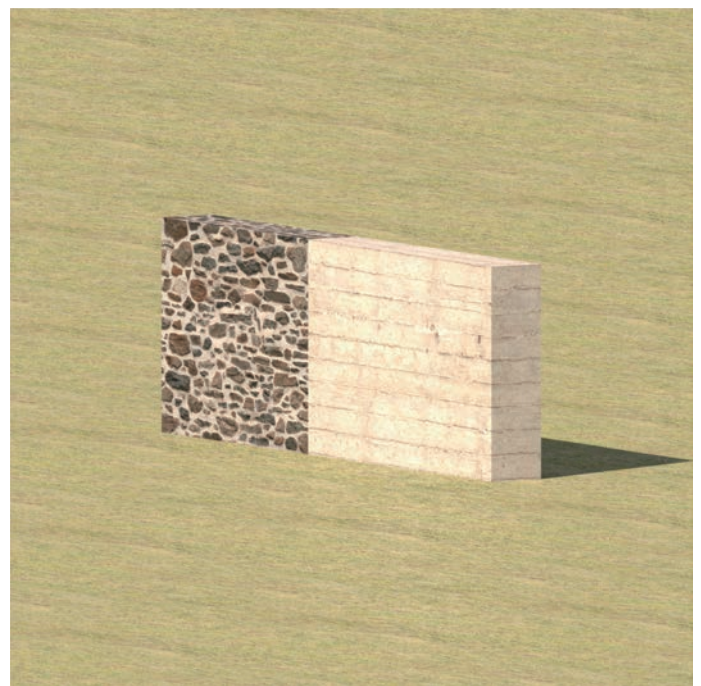
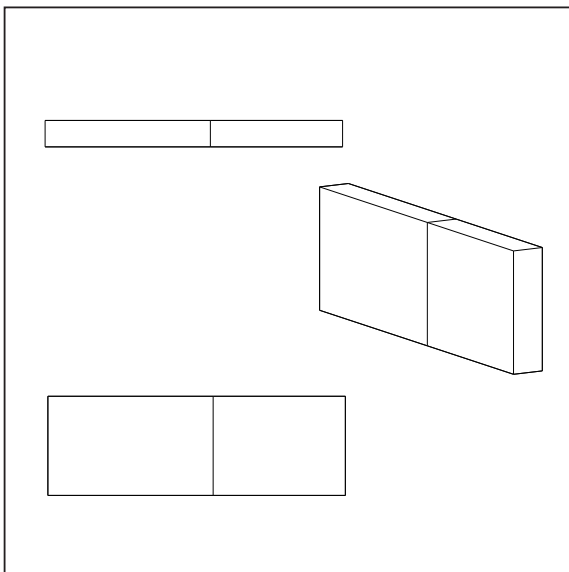
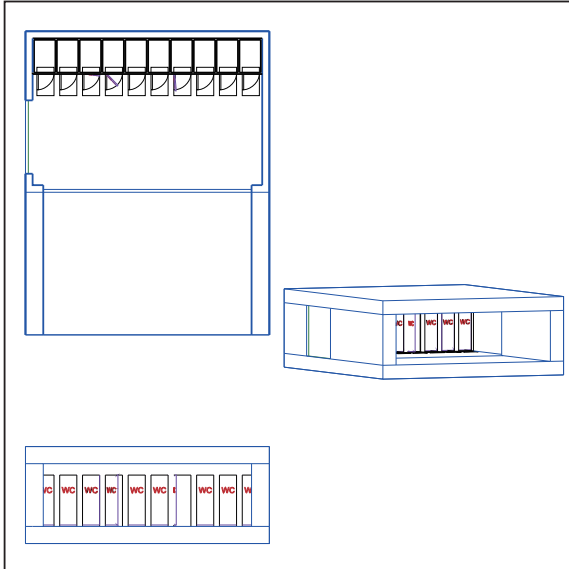
「新旧の同時確認」

__新しいもの

__古いもの

__新規と破壊

__既存と更新



事例 no.39



二重の窓越しに映る通りがかりの自動車が
小さな開口から見えている

事物

行為

解釈

「小さなフレームから伺う外界」

__奥性

__フレーミング

__限定される視野

__動き

事例 no.40



積み上げられたレンガ壁に
魚が泳ぐ水槽が組み込まれている

事物

行為

解釈

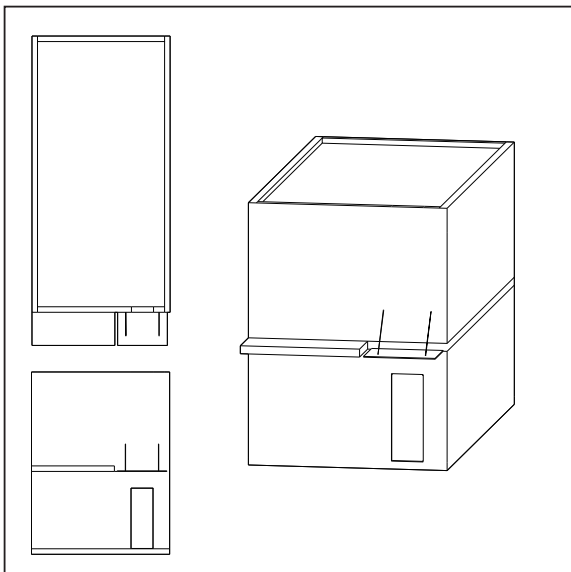
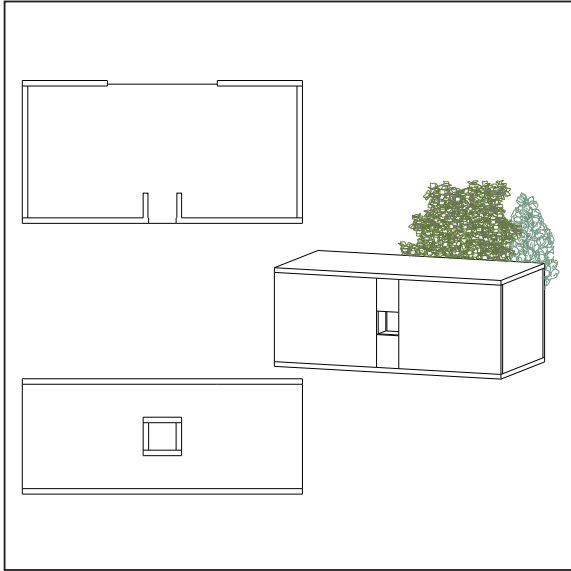
「面を構成するもの同士」

__透明と不透明

__液体と個体を等価に扱うこと

__性質の違い

__面



事例 no.41



古い建物の外構に単管パイプで組まれた足場が
かけられている

事物

行為

解釈

「外側のさらに外」

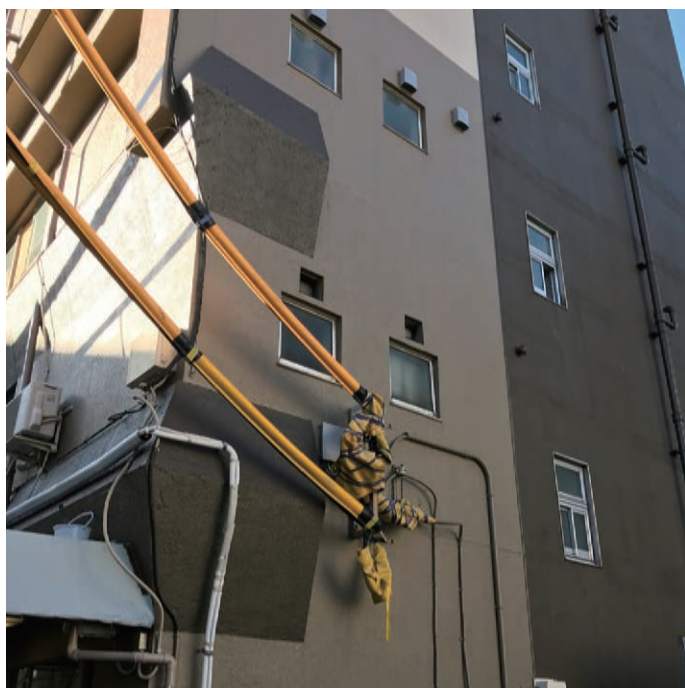
__二重性

__ダブルスキン

__薄膜

__覆いのような面

事例 no.42



工事中の電線がテープでぐるぐるの巻きに
保護されている

事物

行為

解釈

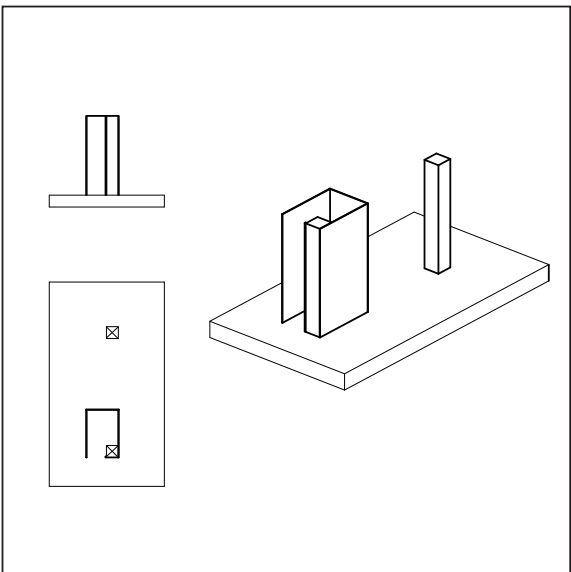
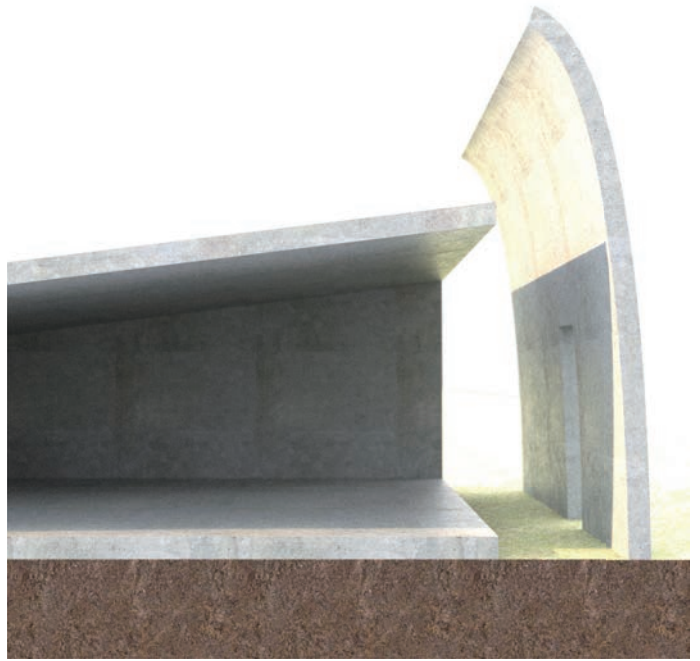
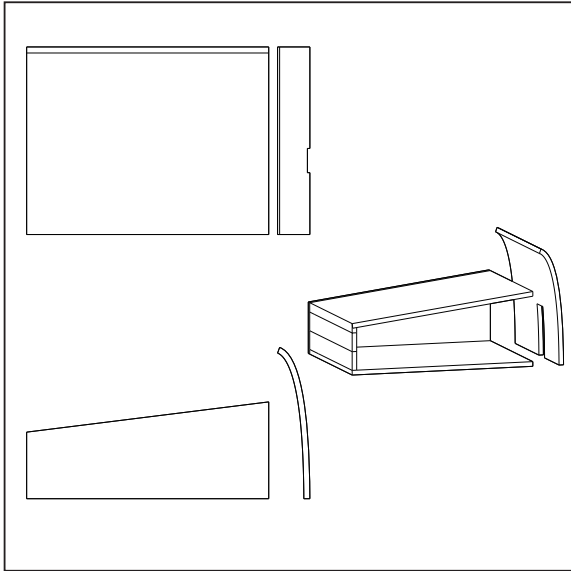
「過剰な保護」

__過保護

__包み込む

__囲い

__覆い



事例 no.43



舗装中の店舗と隣の床屋の間に
視覚的情報量の差が生まれている

事物

行為

解釈

「情報媒体としての建築」

__コンテキスト

__ディテール

__張り紙

__装飾性

事例 no.44



舗装中のビルのエントランスに梯子が架かっており
一番人通りの多いエントランスが空間の裏側に転じる

事物

行為

解釈

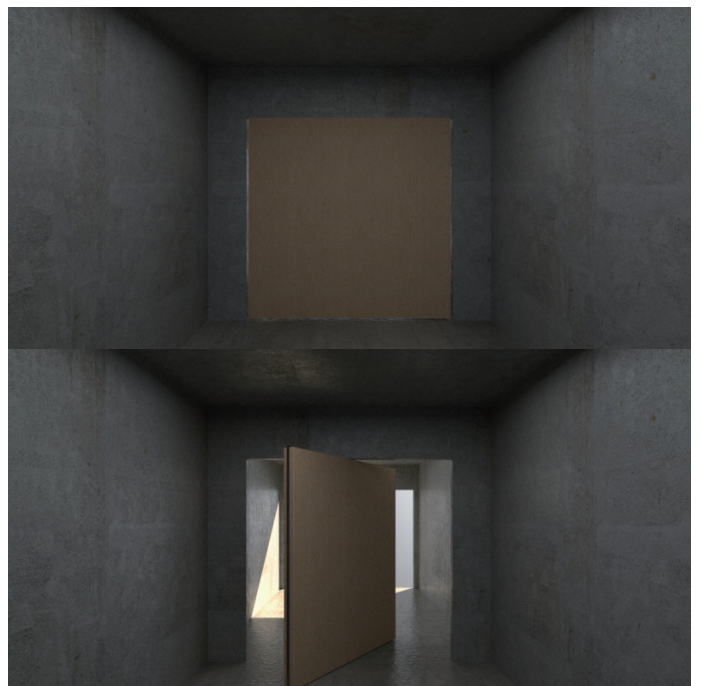
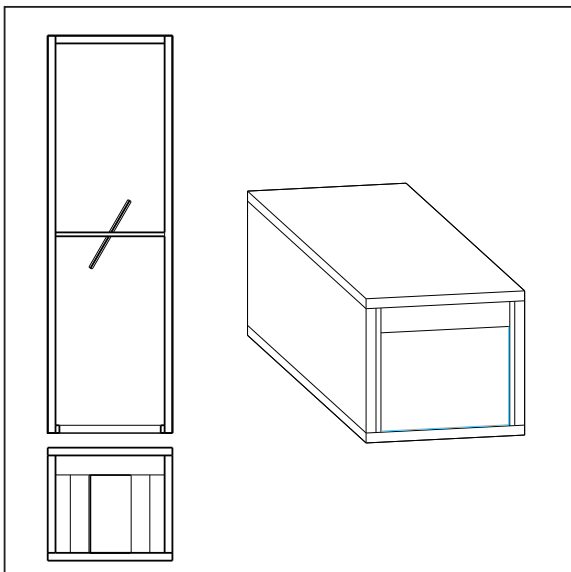
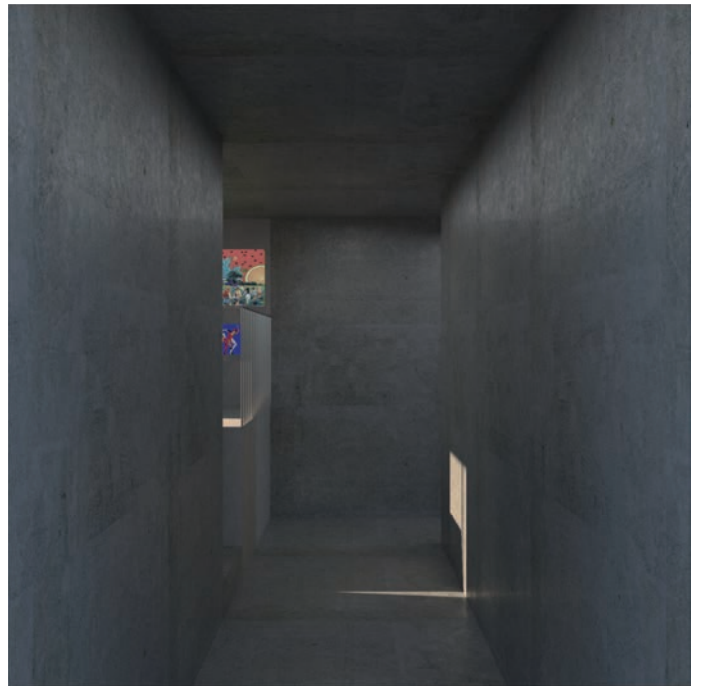
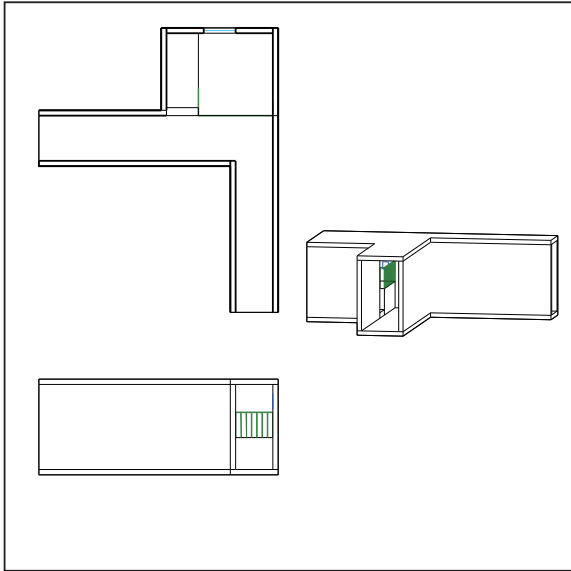
「裏表の反転」

__表空間

__建築の裏側

__場の性質

__空間の切り替わり



事例 no.45



空調機の上に小さな鳥居のオブジェが
置かれている

事物

行為

解釈

「身体スケールとジオラマ」

__オフスケール

__原寸より小さい

__スケール感

__小さなものと大きなもの

事例 no.46



住居の外にゴミ箱が3つ
互いに積み重ねられている

事物

行為

解釈

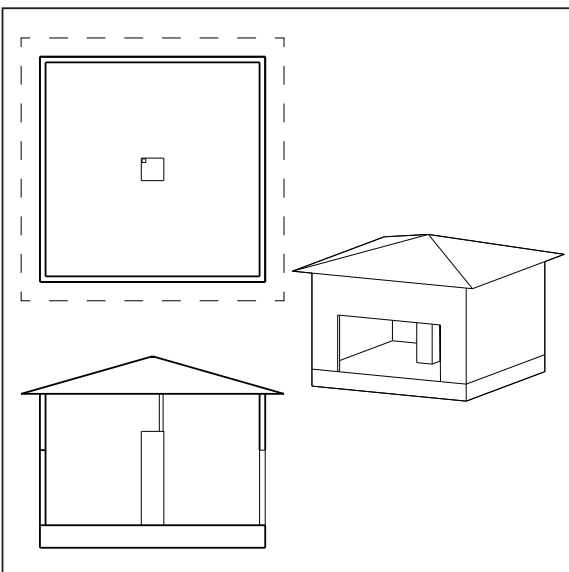
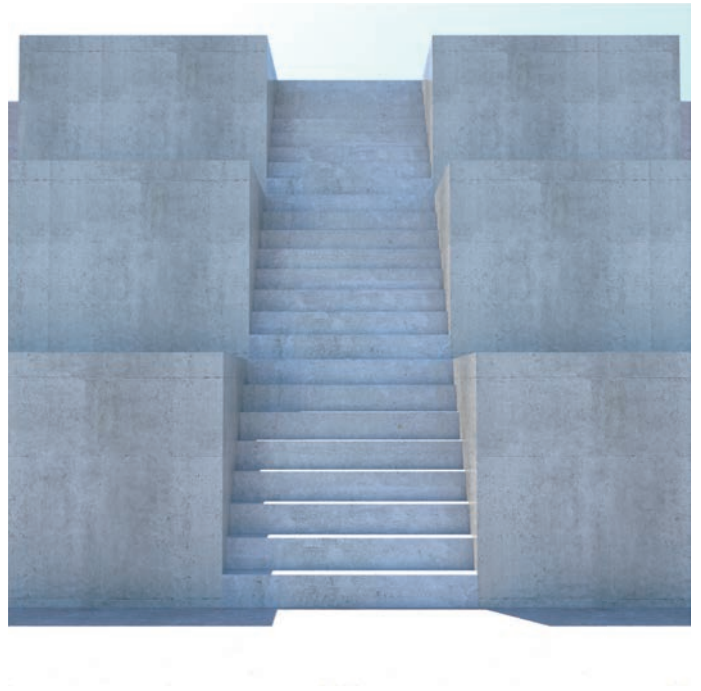
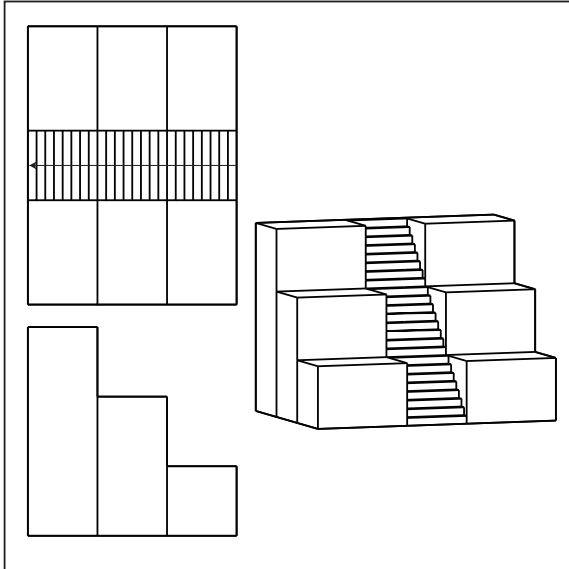
「重なりあって一つになる」

__重なり

__多層性

__合体

__多数の事物の接合



事例 no.47



マンションの前に生ごみ用のゴミ箱が陳列している

事物

行為

解釈

「小さいものたちの集合」

__繰り返し

__分割

__並び

__整列する事物

事例 no.48



小上がりになっているエントランスの段差を
埋めるために縁石のブロックが積みあがっている

事物

行為

解釈

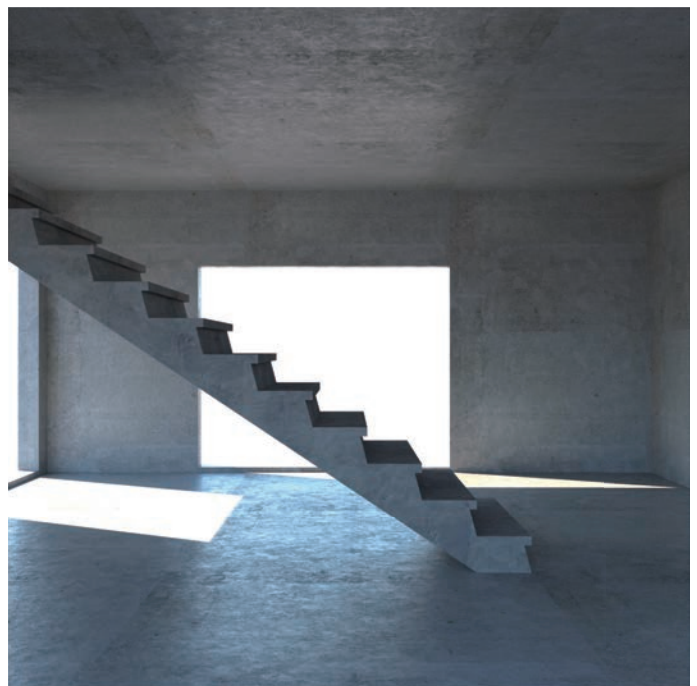
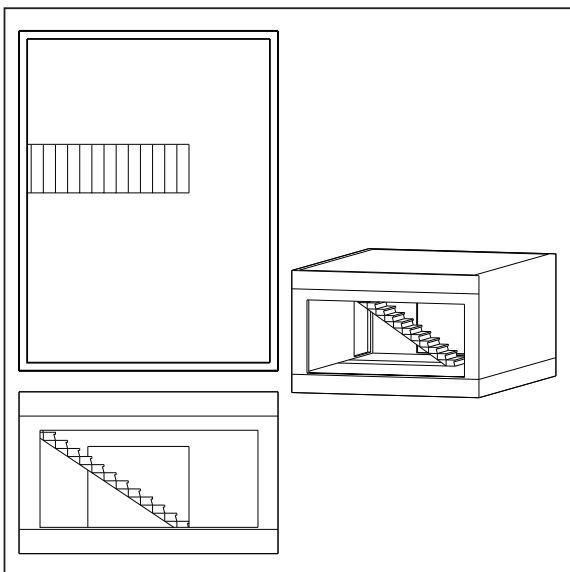
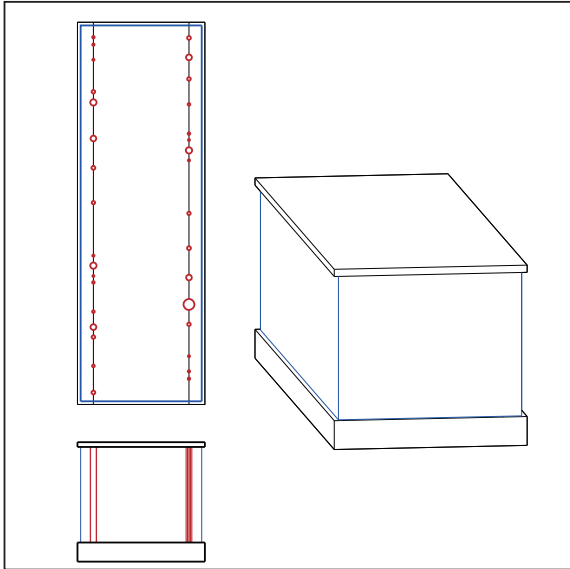
「付け合わせのモノで成立させる」

__用途の補完

__積み上げ

__複層性

__埋め合わせ



事例 no.49



民家のトタン屋根がつぎはぎに取り付けられている

事物

行為

解釈

「空間をつなぐ接合」

__つぎはぎ

__補完的

__重ね合わせ

__一つのモノにするつなぎ合わせ

事例 no.50



壁面に竹の絵が描かれているが
その上にツル植物が生えてきている

事物

行為

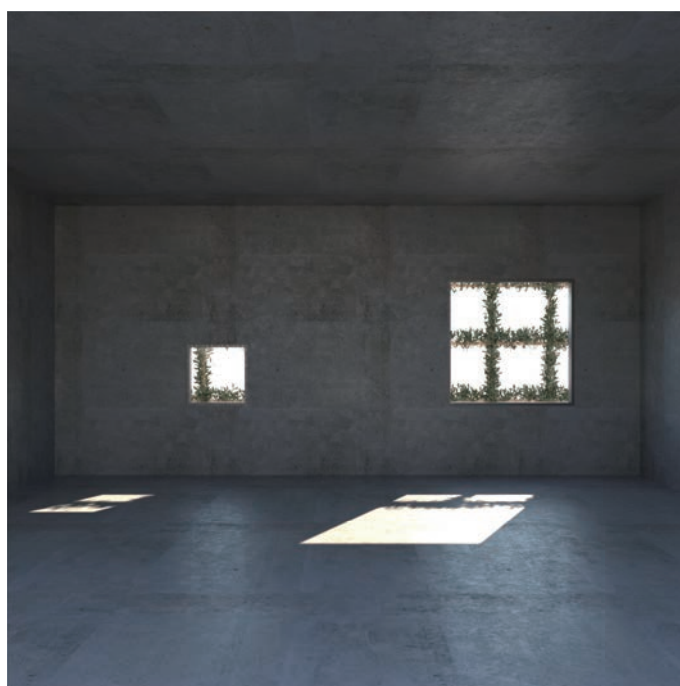
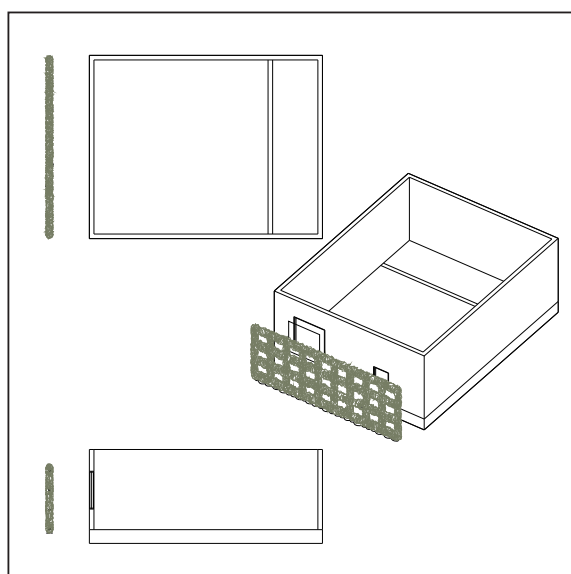
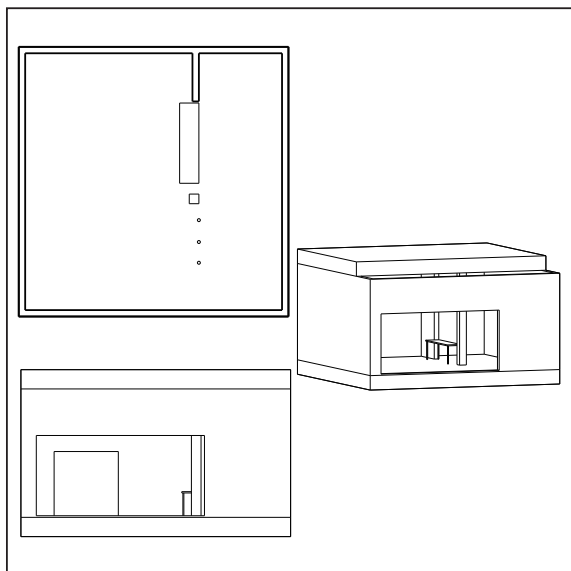
解釈

「似た者同士を重ねる」

__本物と偽物

__同属の異種

__重ねることによって生まれる違和感



事例 no.51



屋根の上に落葉した銀杏の葉が
トタンの屋根を覆い隠すように乗っている

事物

行為

解釈

「ソフトな葉とハードな屋根」

__覆い隠し

__やわらかい素材

__重なり合い

__かたい建築

事例 no.52



コンクリートの側溝用の蓋が敷き詰められた
隙間に異質なブロックがある

事物

行為

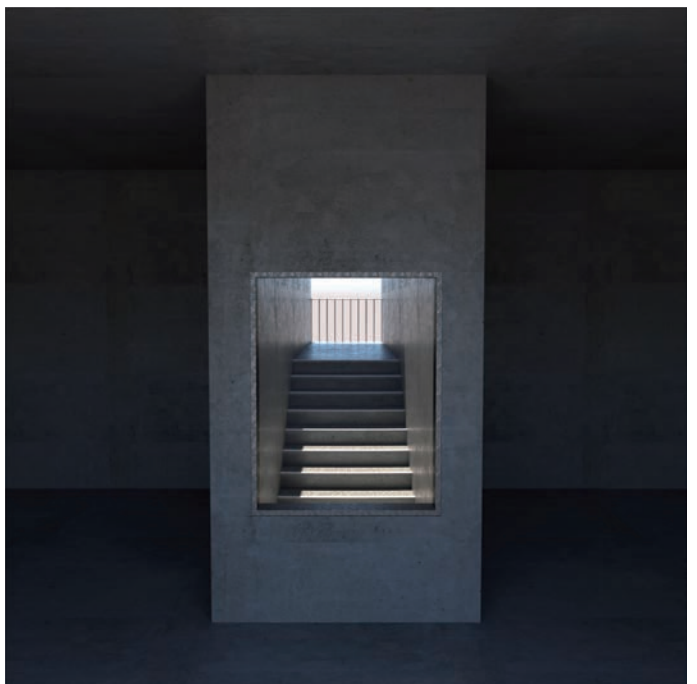
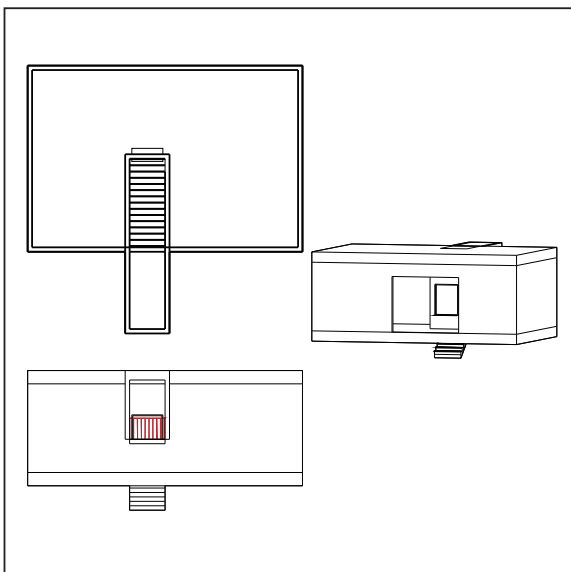
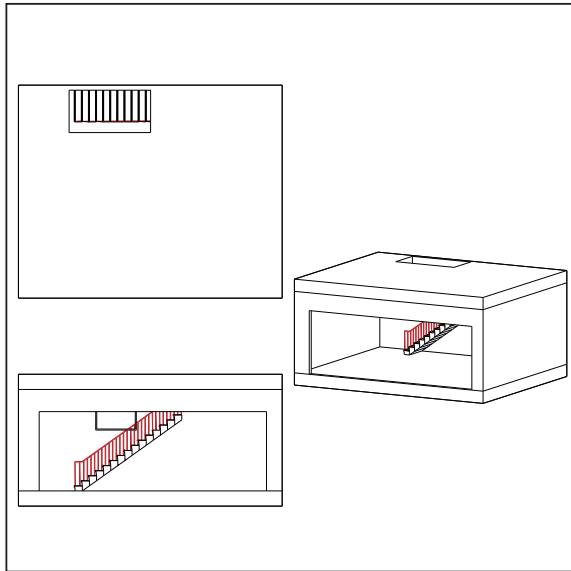
解釈

「埋める事物が主役になる」

__埋め合わせ

__隙間

__異質なモノ



事例 no.53



外構舗装中の建物に巨大な防音膜が掛けられている

事物

行為

解釈

「建築の被り物」

__外皮

__ファサード

__被り物

__レイヤー

事例 no.54



建物のファサードに排気パイプが
たくさん連なっている

事物

行為

解釈

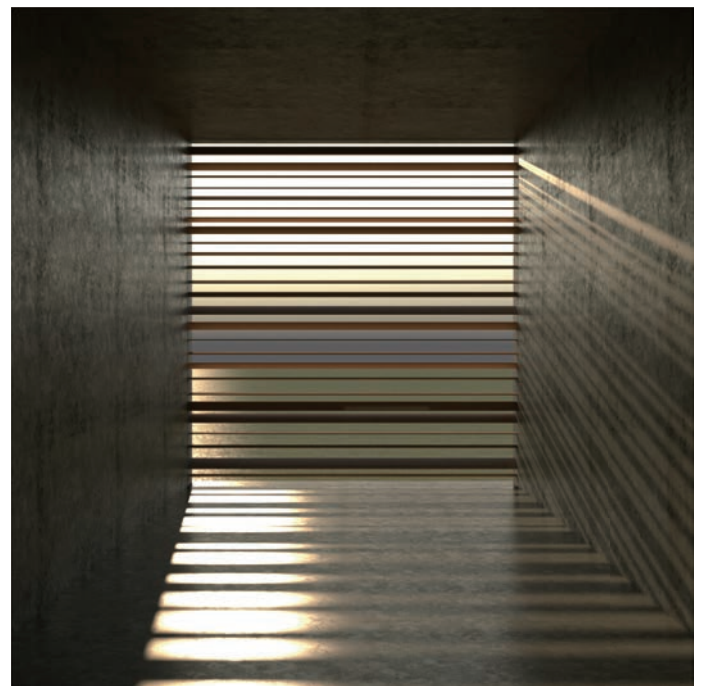
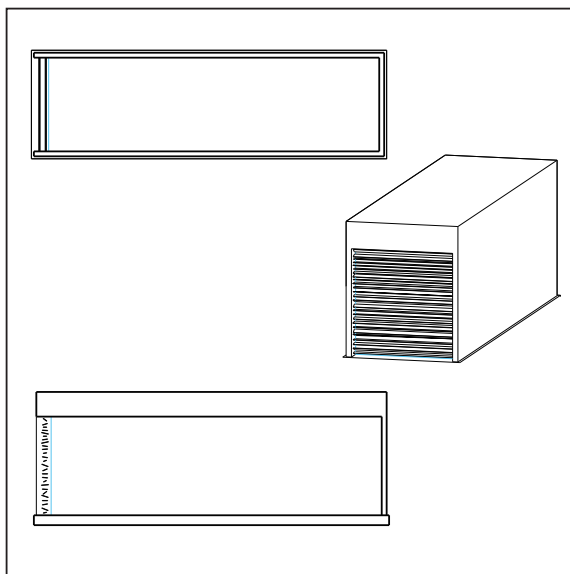
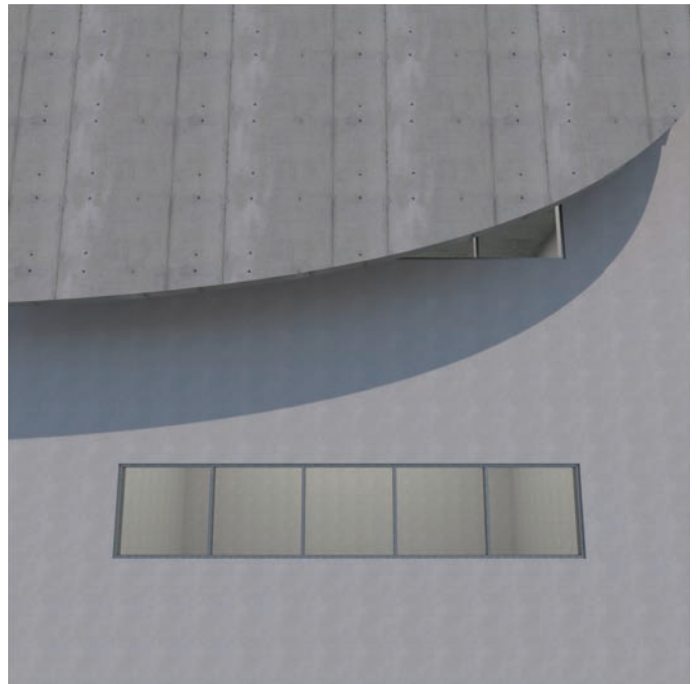
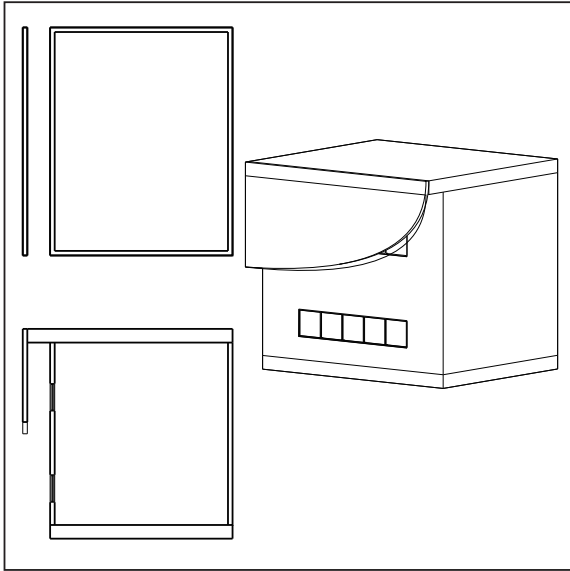
「同じものたちの不揃いな整列」

__列をなす

__列をなす

__同じような繰り返し

__配列



事例 no.55



橋の下の空間に
フェンスが敷き詰められている

事物

行為

解釈

「斜めに敷き詰める」

__垂直性と斜め

__隙間を埋める

__斜めに立てかける

事例 no.56



道路の日陰に
カーブミラーの反射光がきれいな円を映し出す

事物

行為

解釈

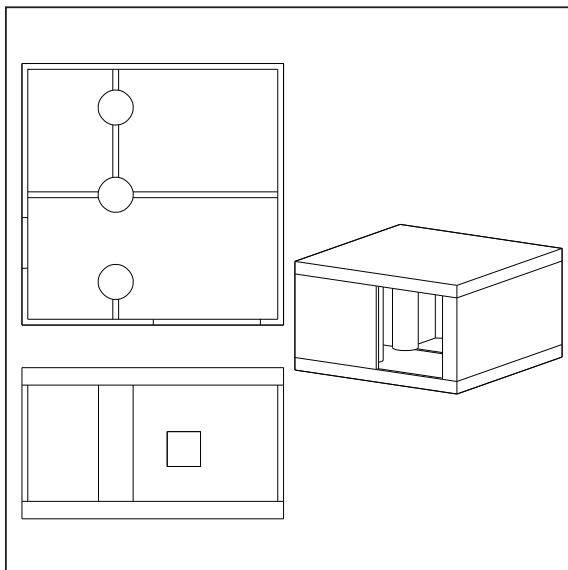
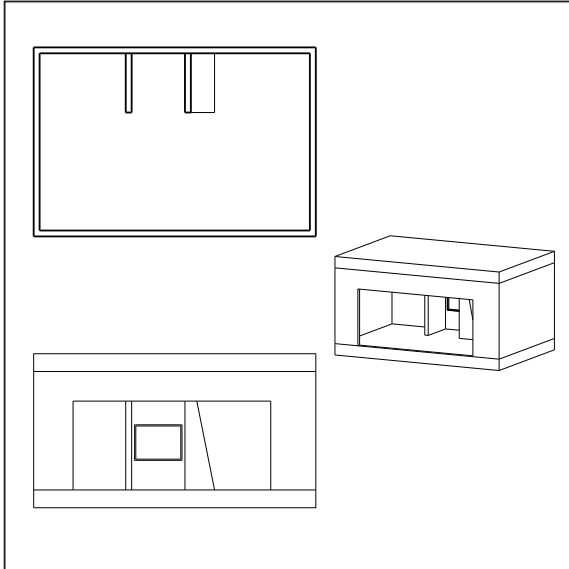
「きれいな円形」

__成形

__不整形

__曲面

__映し出し



事例 no.57



道路わきのマンホールの位置が道路の縁石と
バッティングしている

事物

行為

解釈

「勝ち負けの譲り合い」

__勝ち負け

__収まりきらない

__歪み

__重なり

事例 no.58



住居の底の上に
ウッドデッキが架かっている

事物

行為

解釈

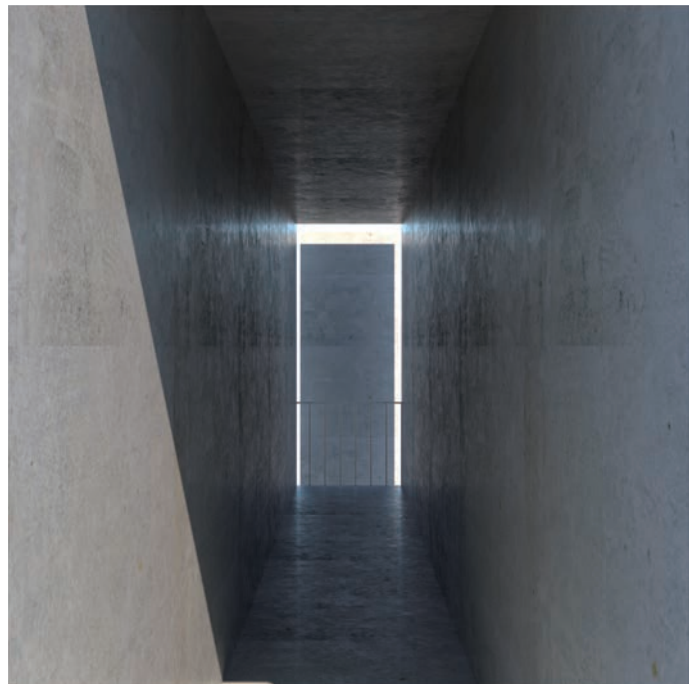
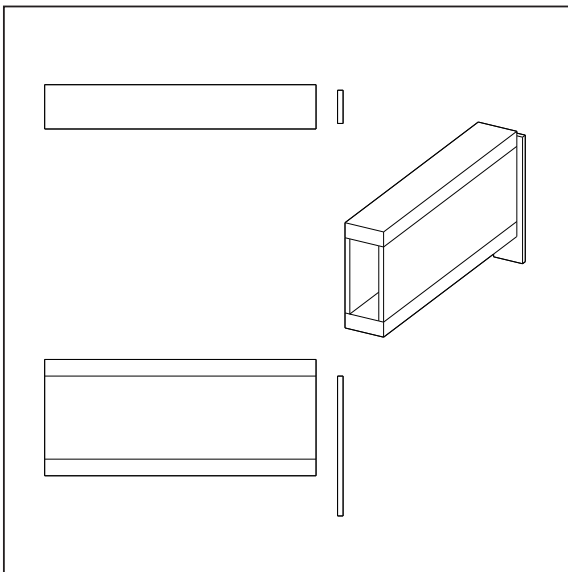
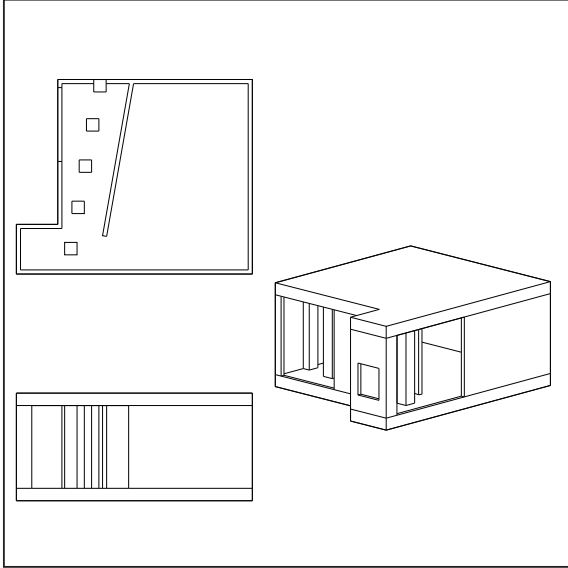
「屋根の上にさらに屋根」

__重複

__複層性

__カバー

__二重に機能



事例 no.59



道路わきの白線が曲がりくねっている

事物

行為

解釈

「曲がりくねった線」

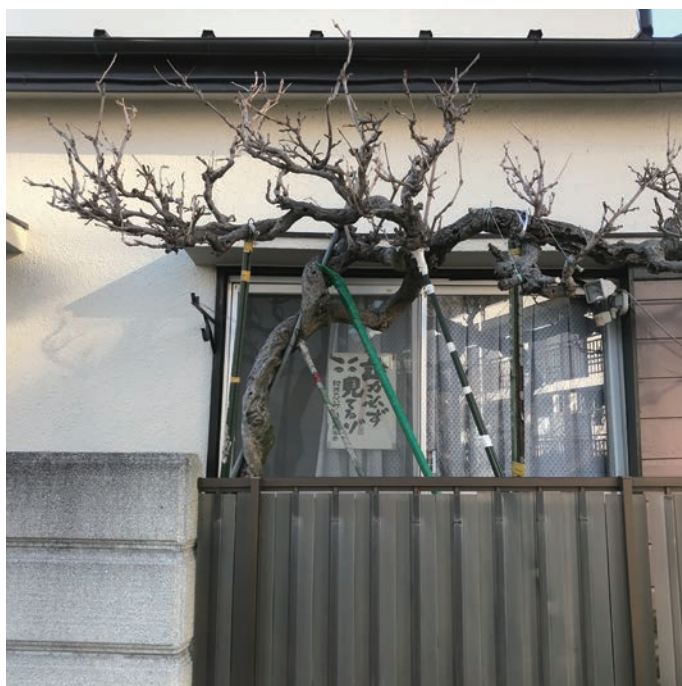
__曲線

__歪み

__揺らぎ

__直線系

事例 no.60



いまにも倒れそうな梅の木が
様々な棒で支えられている

事物

行為

解釈

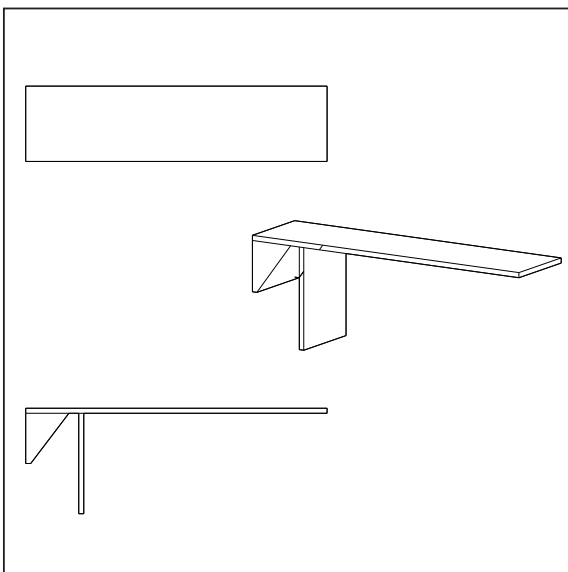
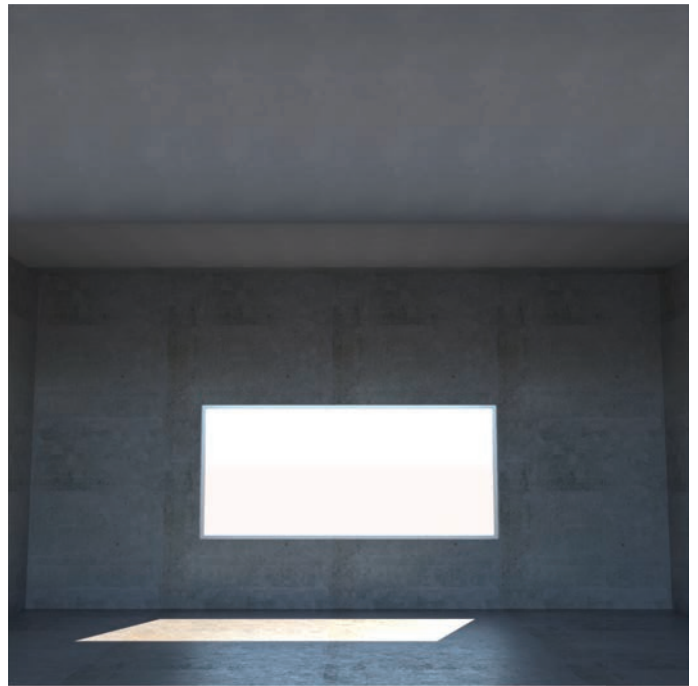
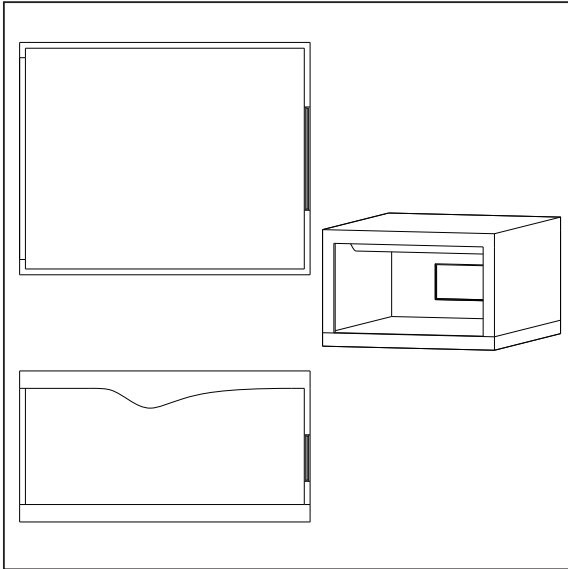
「倒壊の危うさ」

__バランス感

__支え

__重心のズレ

__構造



第 5 章

プロジェクト

5.1. はじめに

本設計では、前半までに示した設計手法をもとに、実在する敷地を選定し、建築物を設計する。
【都市の非合理的事物】を取り込んだ設計手法を用いて設計することにより、利用者に対し、空間を読み込む余地を与える豊かな解釈性を持つ建築が設計されることを目的とする。

5.2. 対象敷地

対象敷地は東京都新宿区の矢来公園である。この敷地付近は第一種低層住居専用地域で、低層の住宅地と事務所が混在する。矢来公園が位置する周辺は、子育てをする若年世代の公園利用が多く見られる。敷地から 150 m ほど離れたところには日ごろから交通量が多い早稲田通りがあるが、敷地が位置する矢来公園はその喧騒から少し離れた閑静な住宅街にたたずむ。



▲ 図 7 (全体配置図 1 : 900)

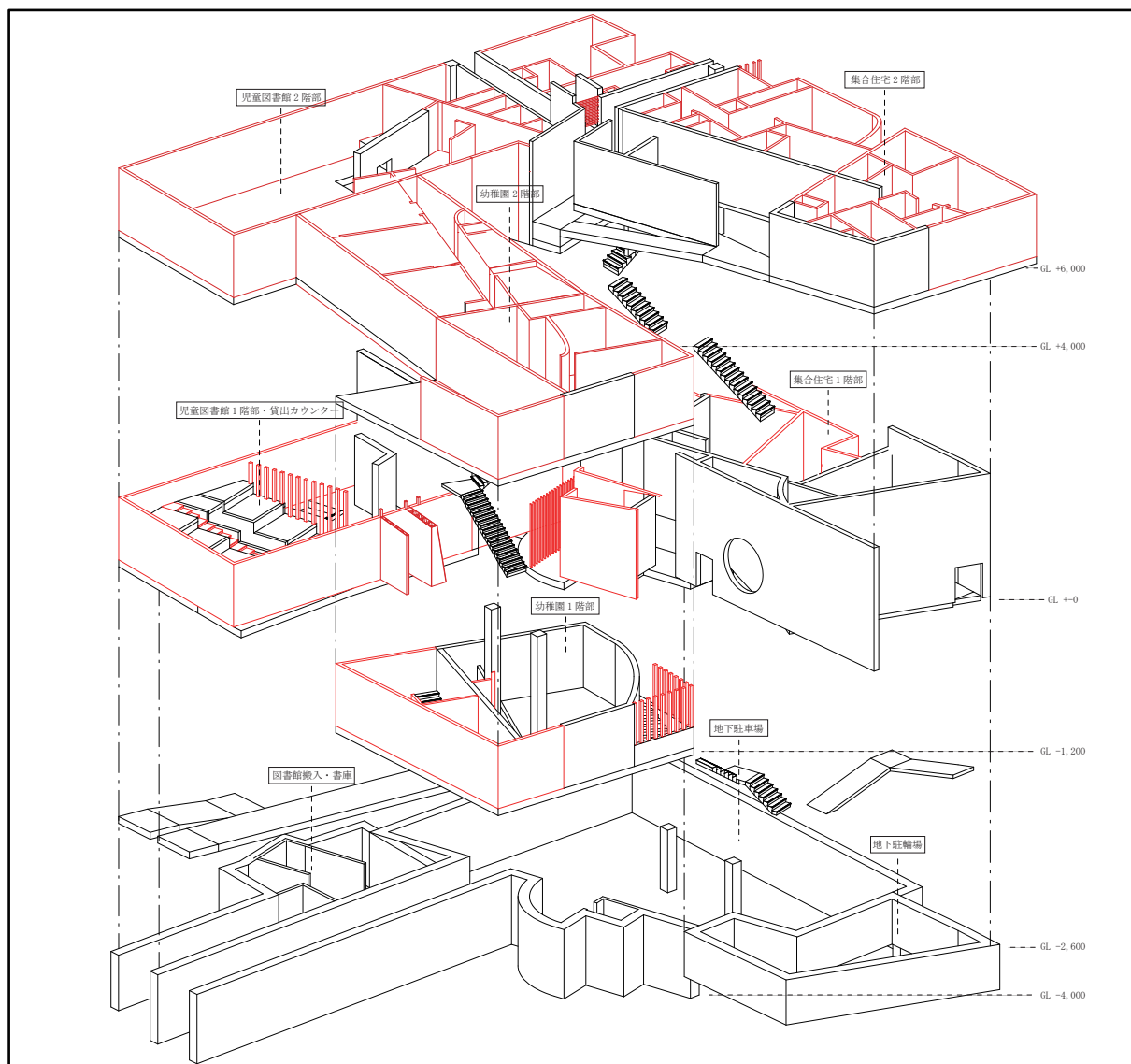
5.3. 用途

用途は、公園・幼稚園・児童図書館・集合住宅の複合施設とする。選定の理由としては、敷地周辺には多くの子育て世帯が居住しているにもかかわらず、彼らのための施設が不足していることがあげられる。集合住宅に関しては本敷地の周辺は、閑静な高級住宅街であるため、ある程度の整然さと専有面積を持った住居を用意する必要がある。住戸部は全体で9住戸用意し、単身住居者から家族世代を想定した住戸を用意する。

5.4. 設計手法を取り込んだスタディ

研究（3. 設計手法の概要と提案、4. ケーススタディー一覧）にて提示した設計手法を取り込み、設計のスタディをおこなう。

手順として、最初の第0スタディ（ST.0）では敷地や周辺環境の読み込みを行う。現状の敷地の高低差、方位、前面道路や周辺環境などを抽出することにより、設計物ではなく、様々な条件を基点に次の第1スタディ（ST.1）に繋げることを心掛ける。ST.1以降は、【都市の非理論的事物】から発想される設計手法を取り込みながら建築物の形式を決定する。スタディの回数が増えるごとに、設計物のヴォリュームから詳細な収まりまでもが取り合いを持ち、互いに共生する建築物ができる。スタディを重ねていくことによって建築空間の極端な機能的破綻も防ぐとともに、着実に多解釈性に富んだ場が創出されることを期待する。

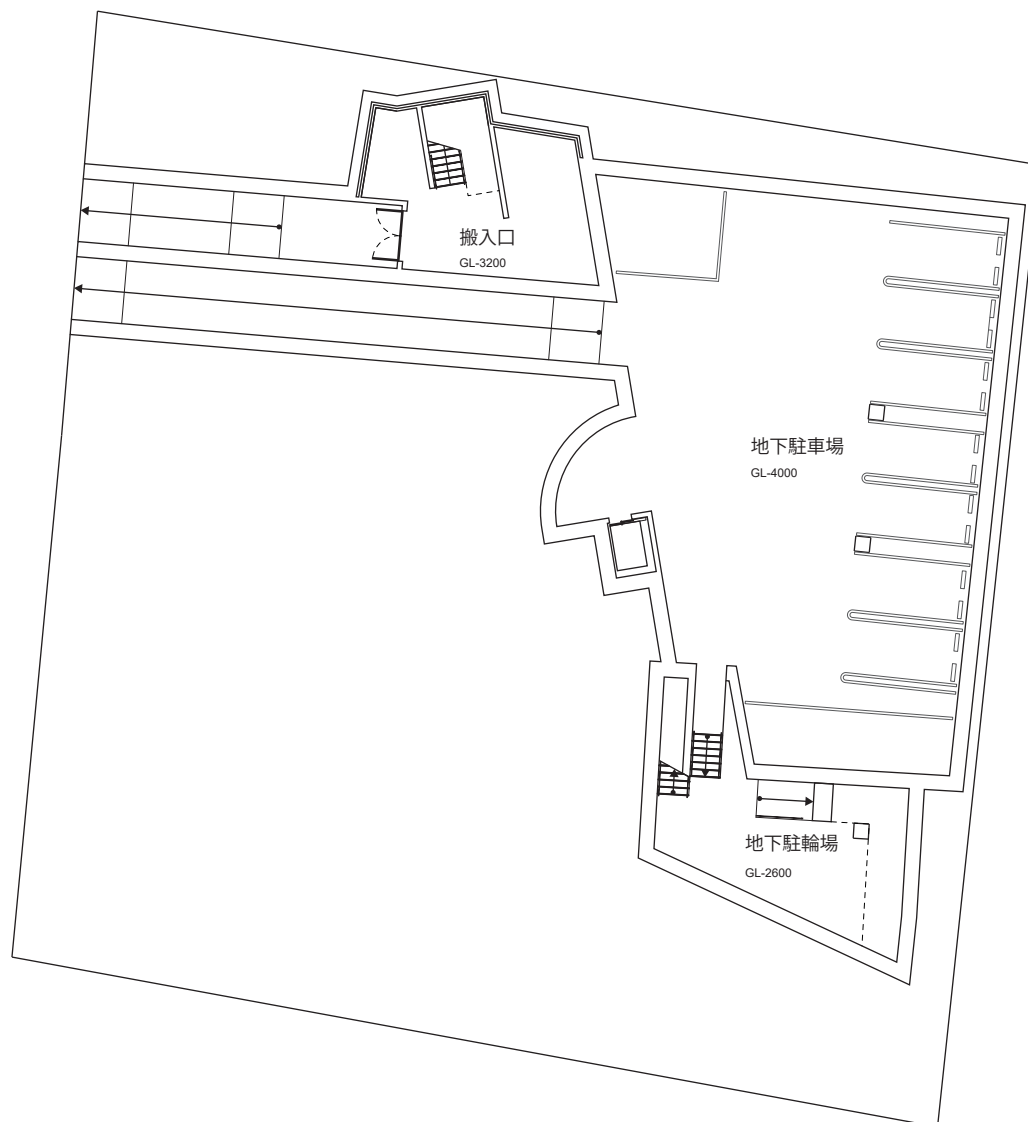


▲ 図 8 (全体平行投影図)

全体平面図

全体平面図（地下1階）

寸法 = 1 : 300



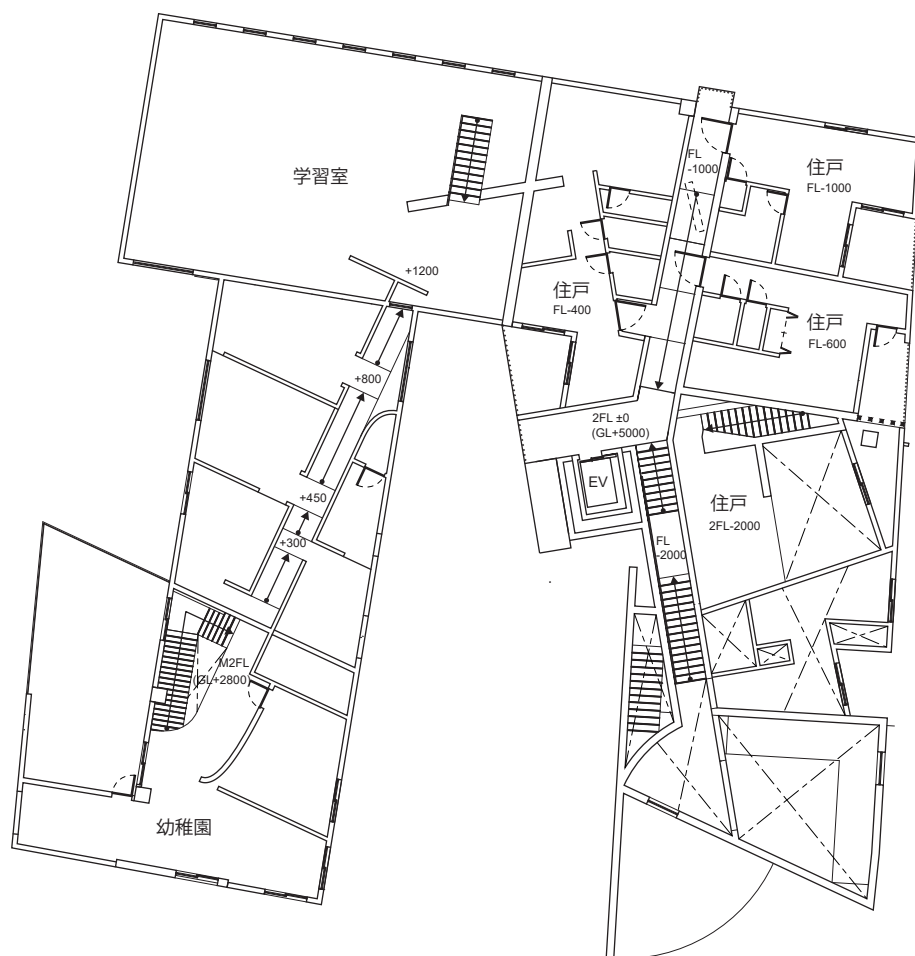
全体平面図 (1階)

寸法 = 1 : 300



全体平面図 (2階)

寸法 = 1 : 300



全体平面図（中3階）
寸法 = 1 : 300

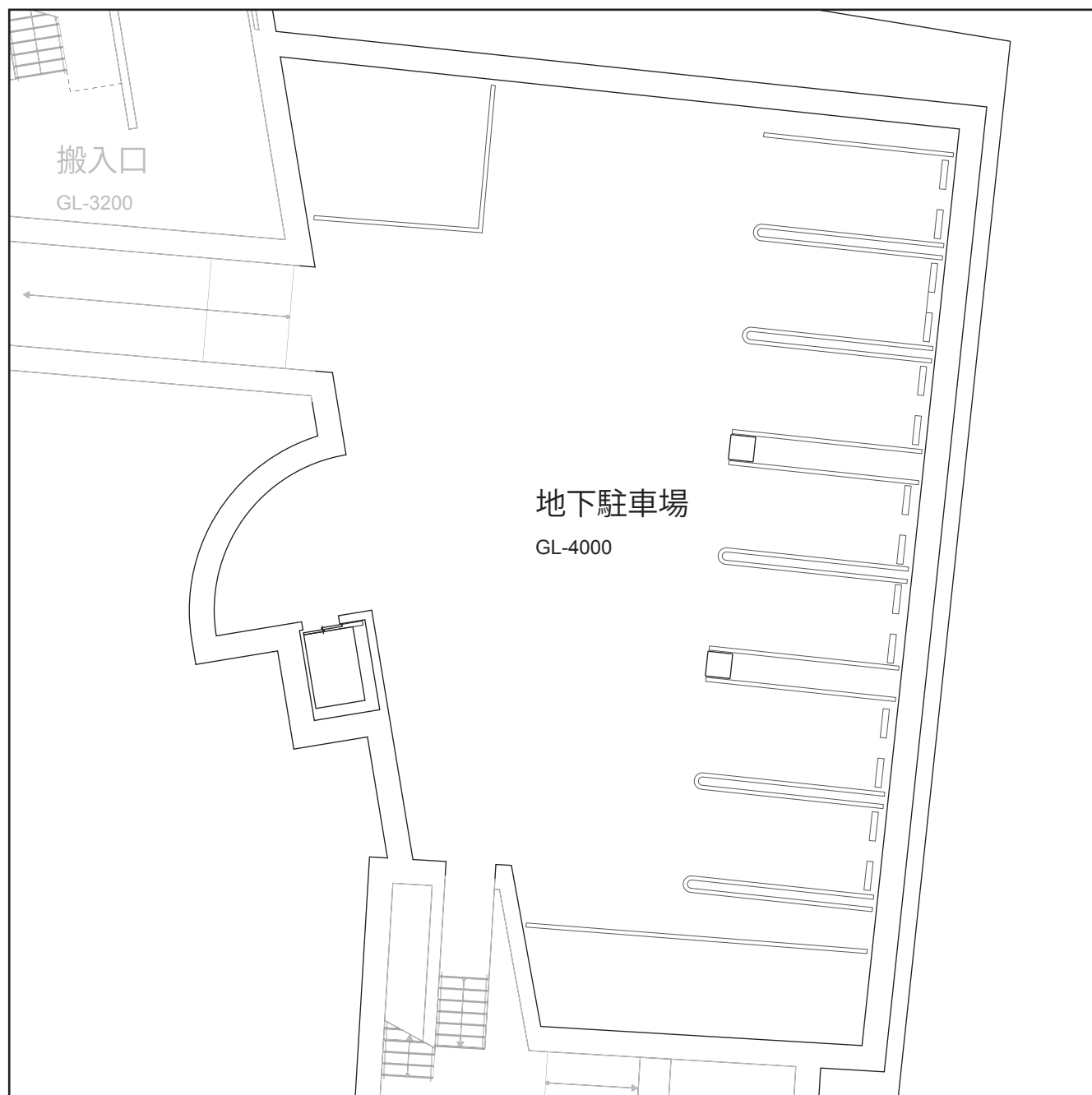


部分平面図

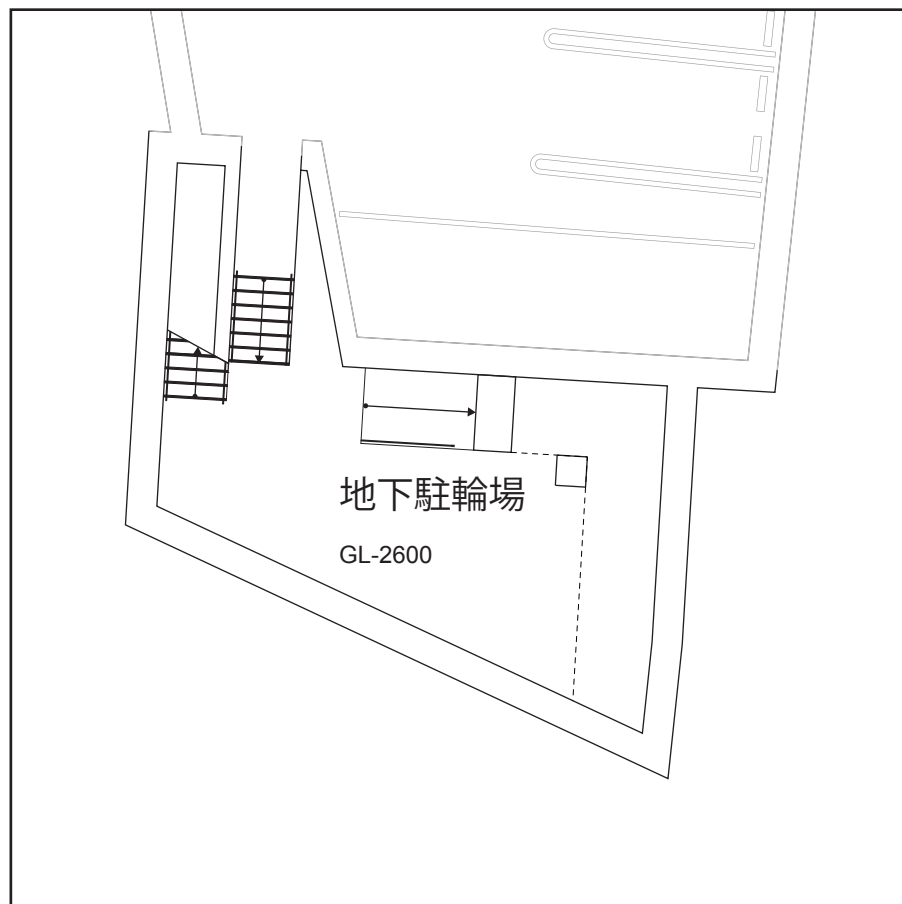
地下室

部分平面図（地下1階）

寸法 = 1 : 150

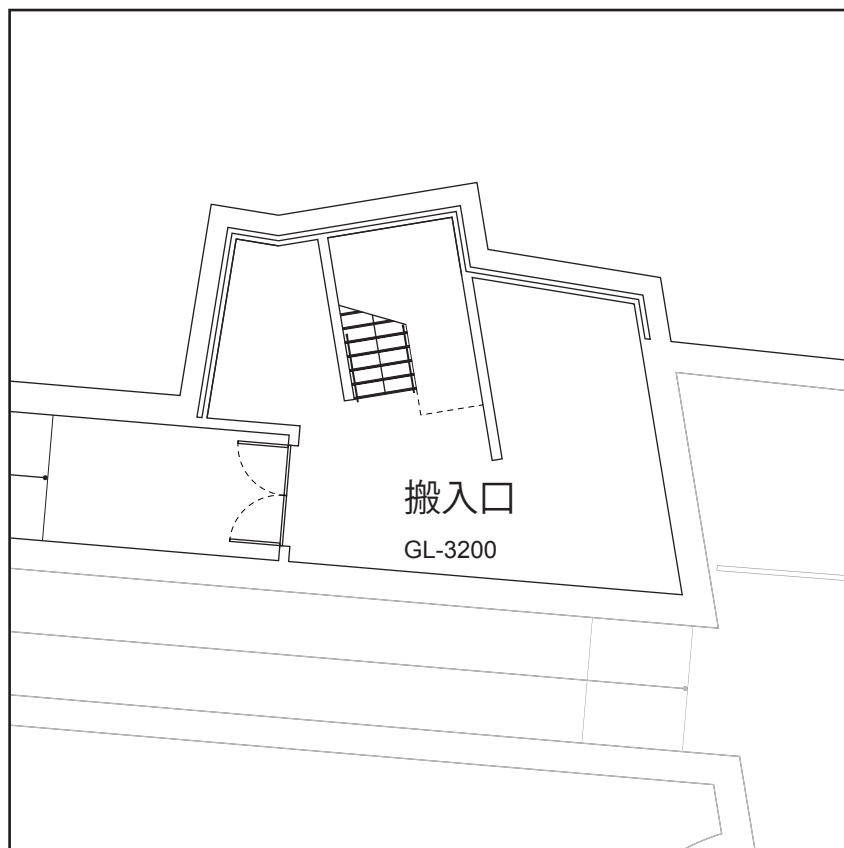


部分平面図（地下1階）
寸法 = 1 : 150



部分平面図（地下 1 階）

寸法 = 1 : 150



(駐車場) 内観パース 1



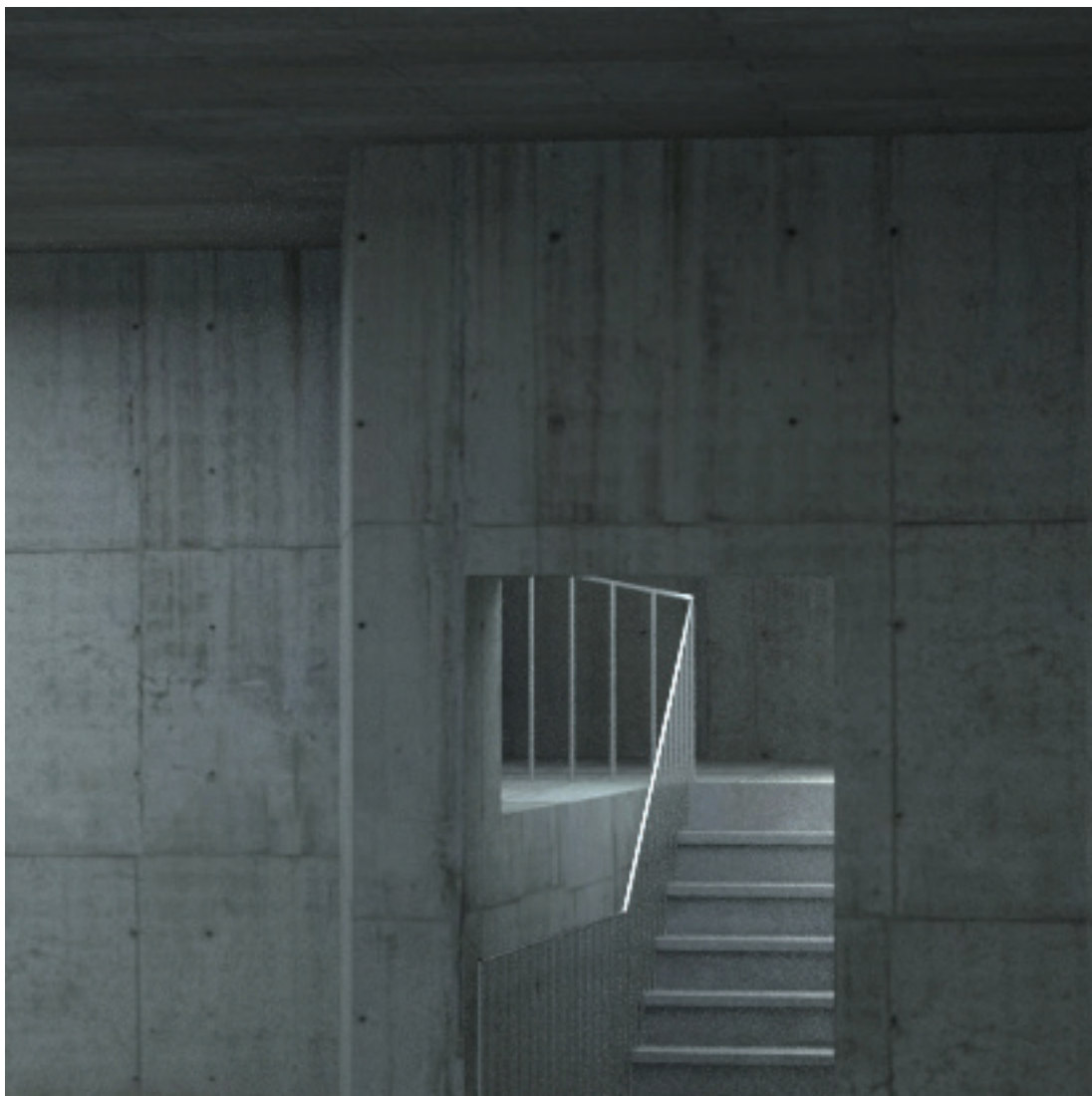
(搬入口) 内観パース 2



(駐車場) 内観パース 3



(駐輪場) 内観パース 4



部分平面図

幼稚園

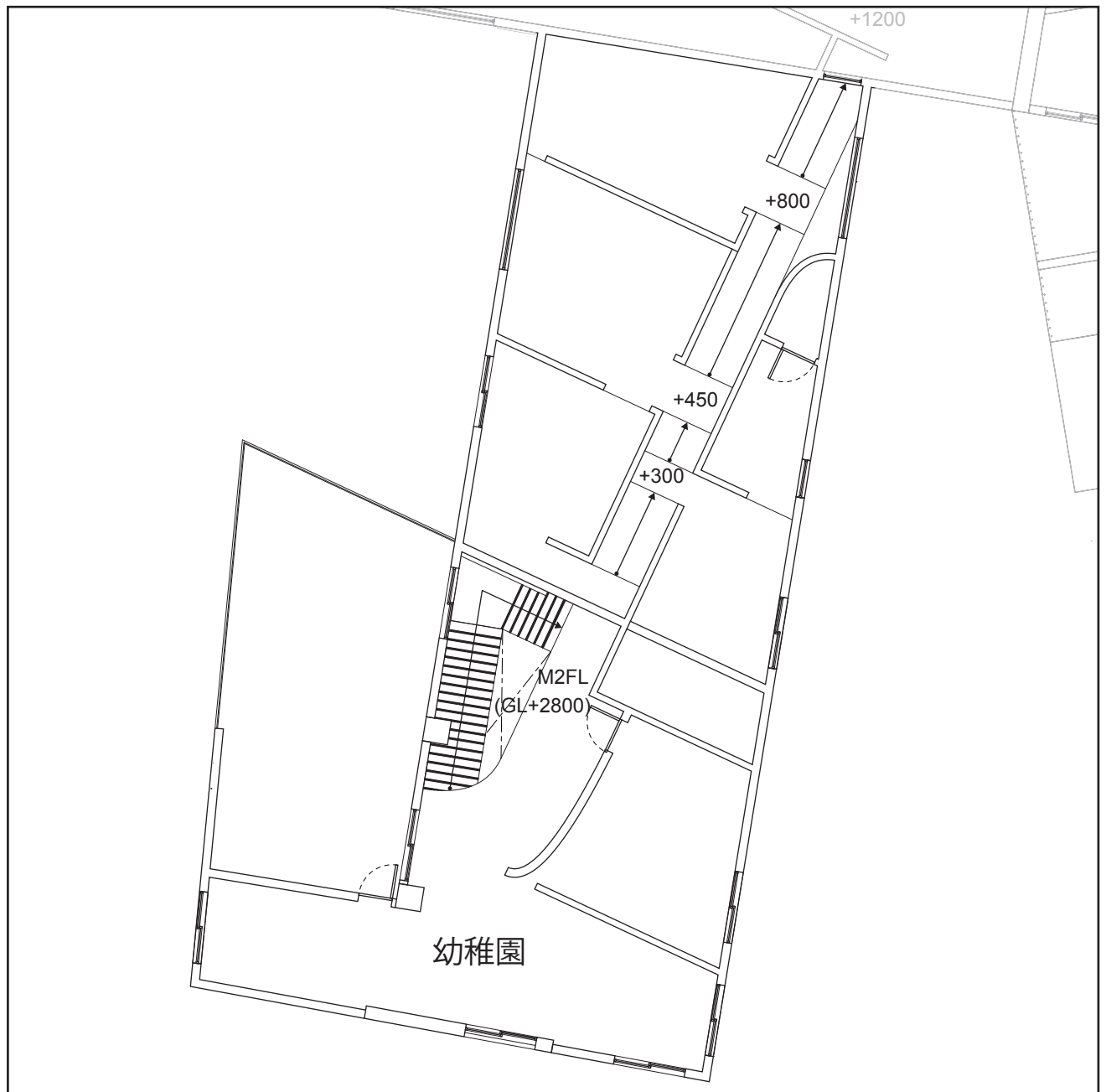
部分平面図 (1階)

寸法 = 1 : 150



部分平面図 (2階)

寸法 = 1 : 150



(幼稚園) 内観パース 1



(幼稚園) 内観パース 2

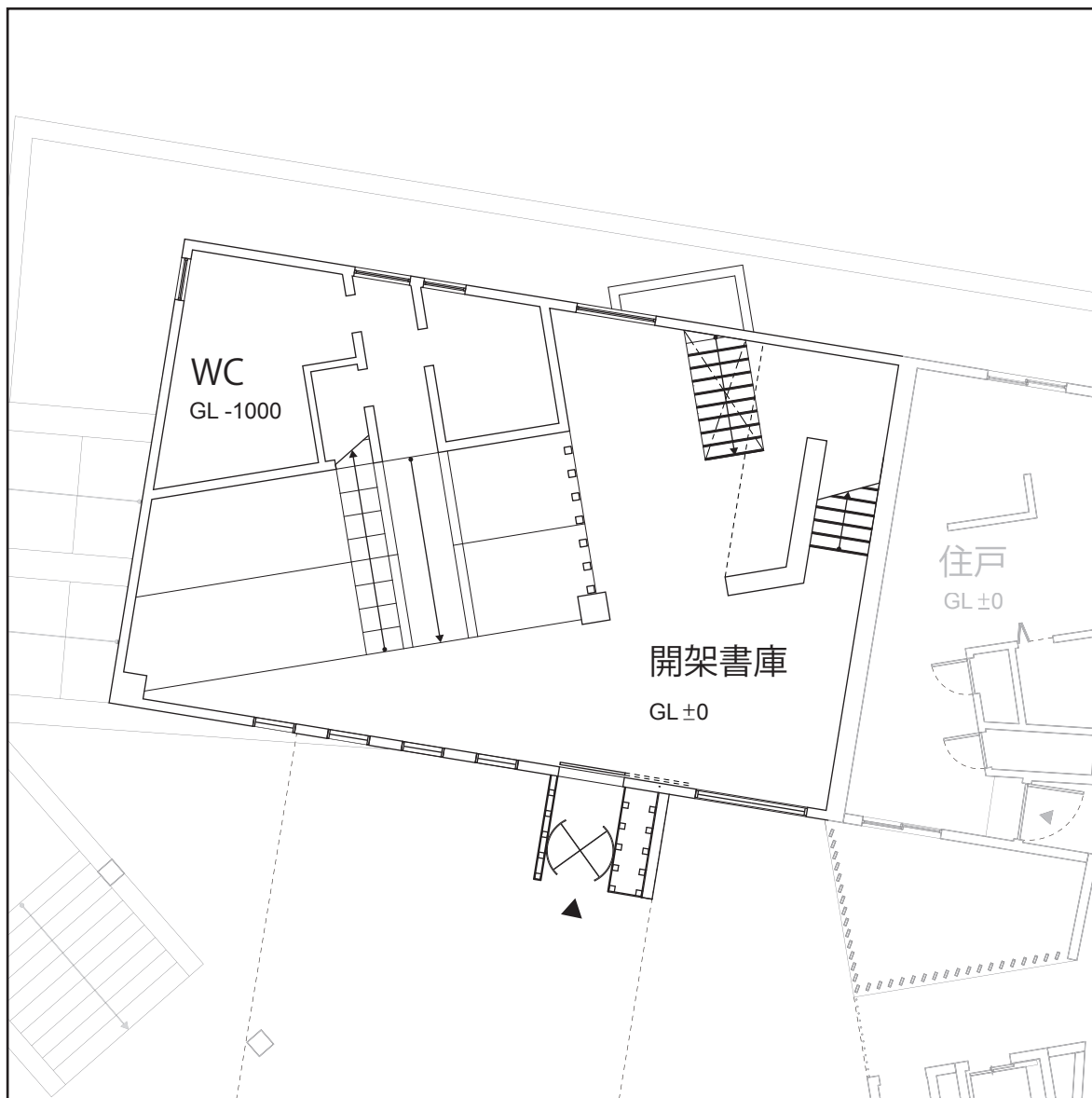


部分平面図

児童図書館

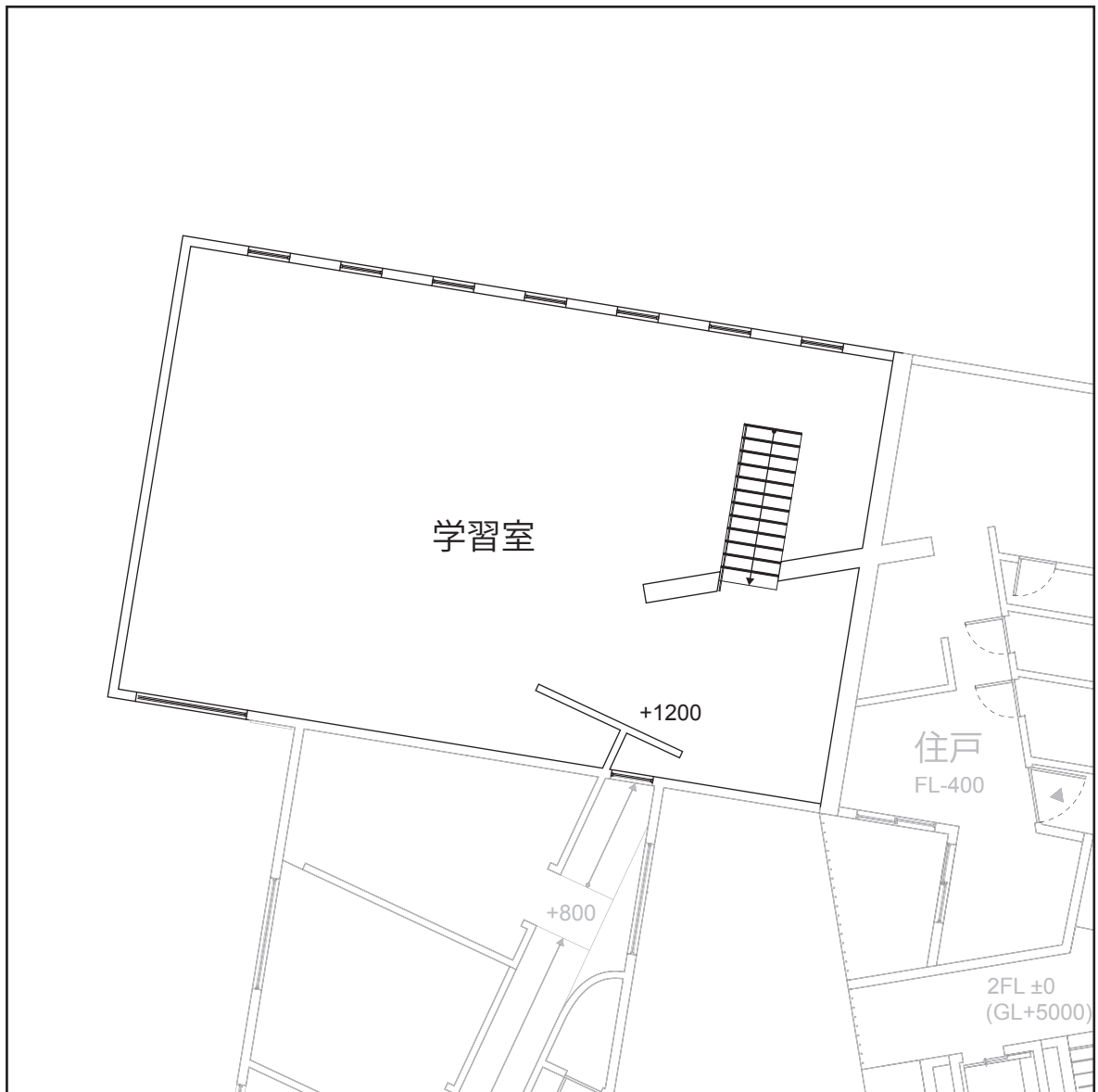
部分平面図 (1 階)

寸法 = 1 : 150



部分平面図 (2階)

寸法 = 1 : 150



(図書館) 外観パース

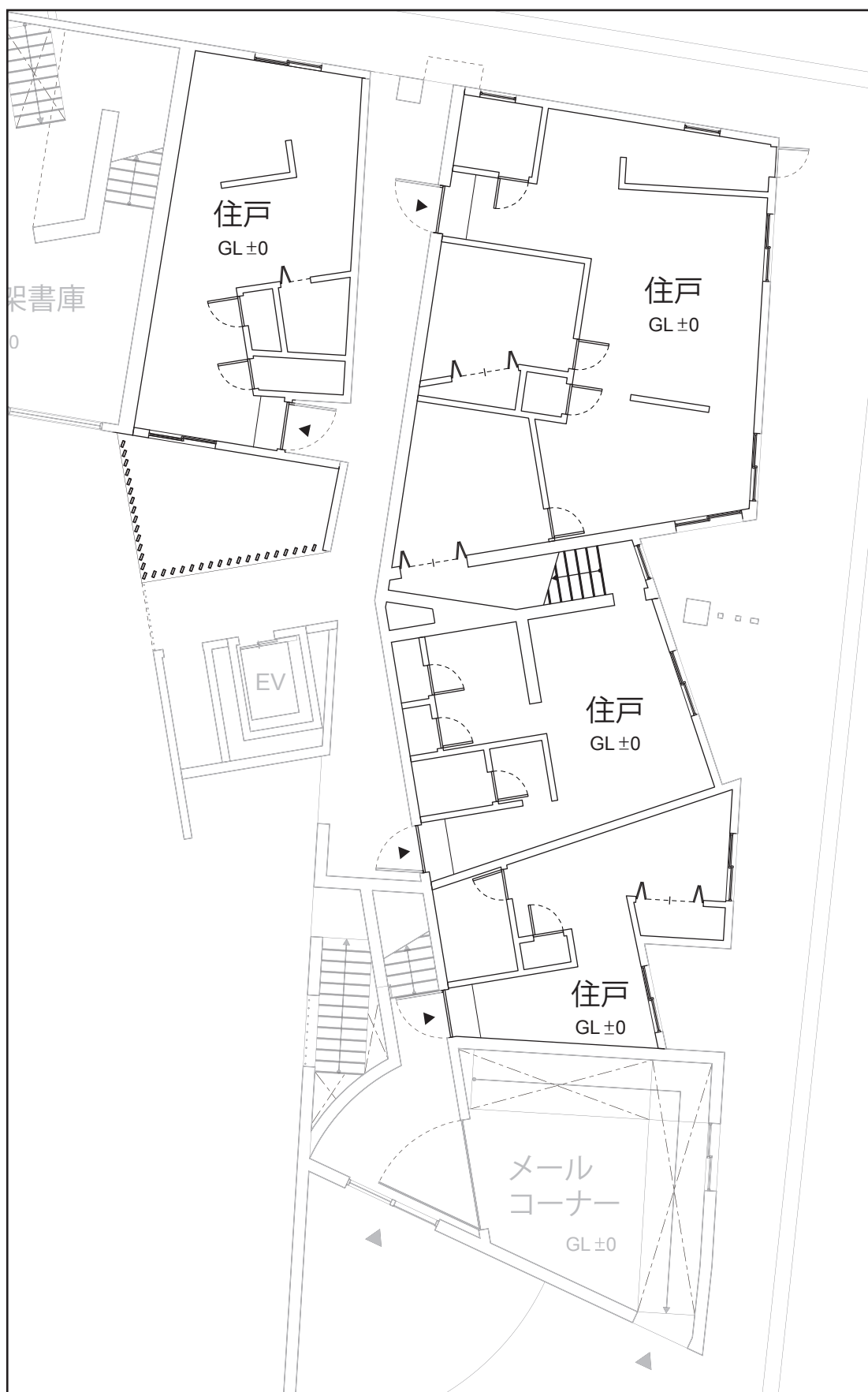


(図書館) 内観パース



部分平面図

集合住宅

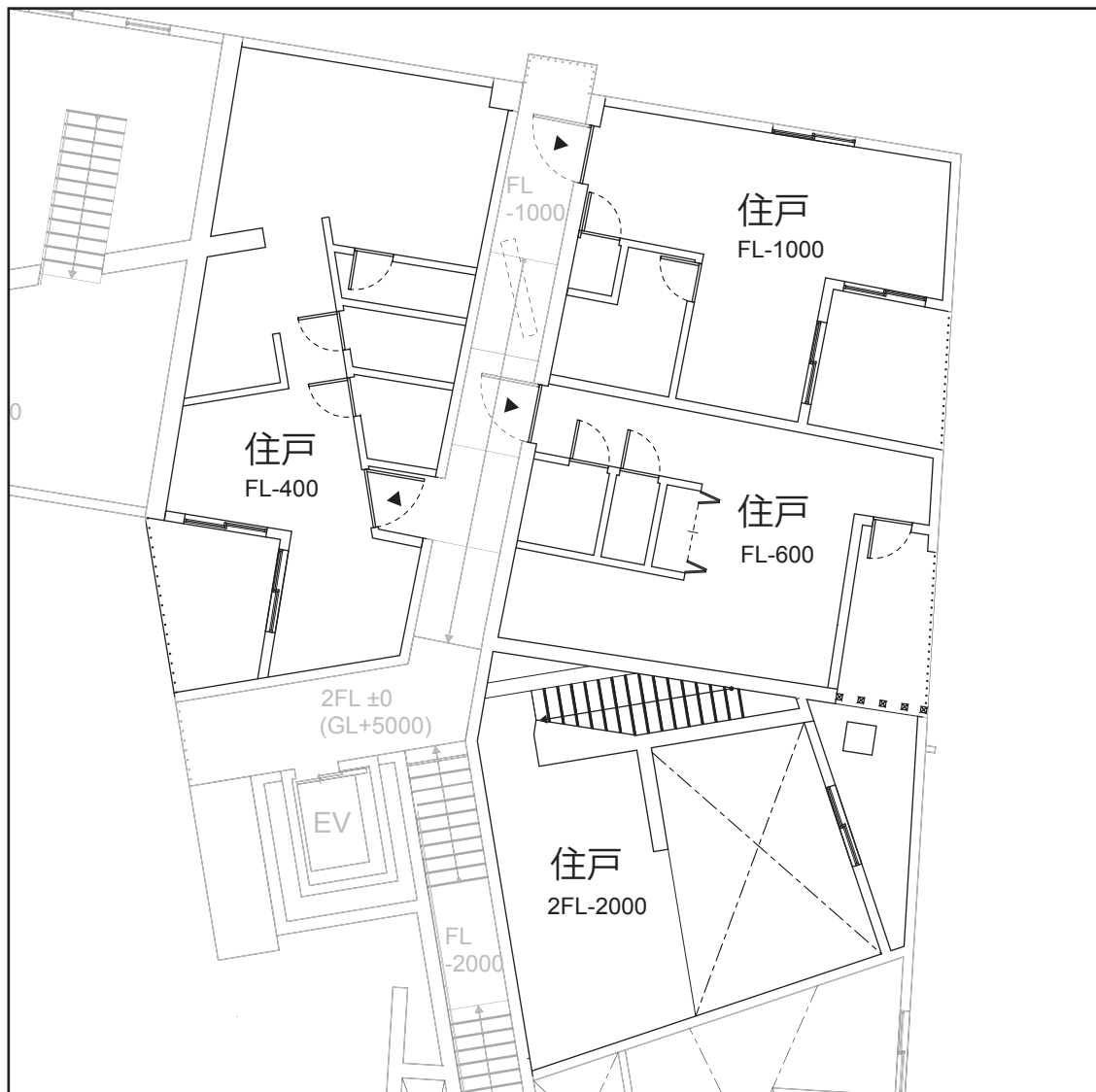


部分平面図 (1階) [左図]

寸法 = 1 : 150

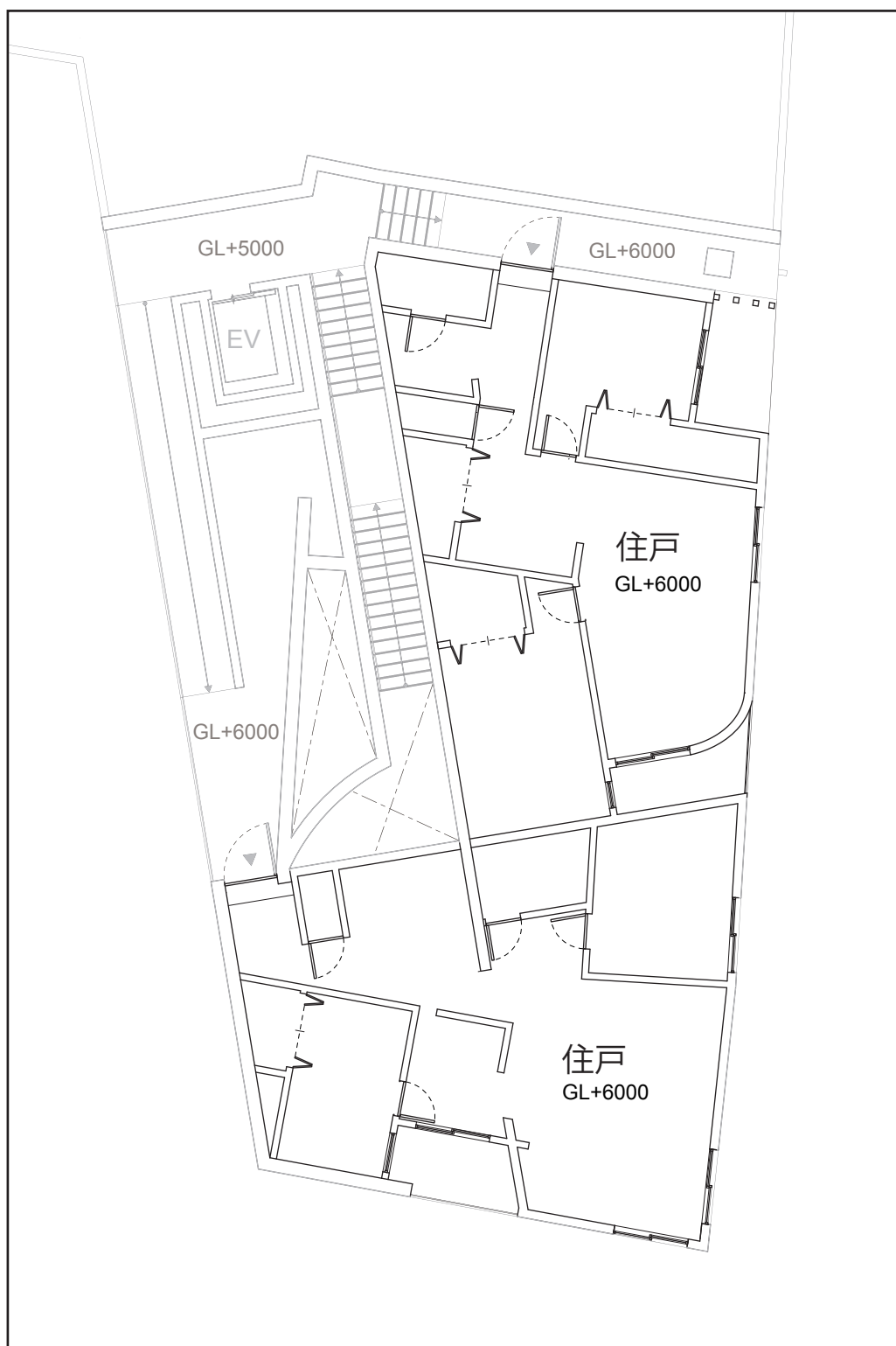
部分平面図 (2階) [下図]

寸法 = 1 : 150

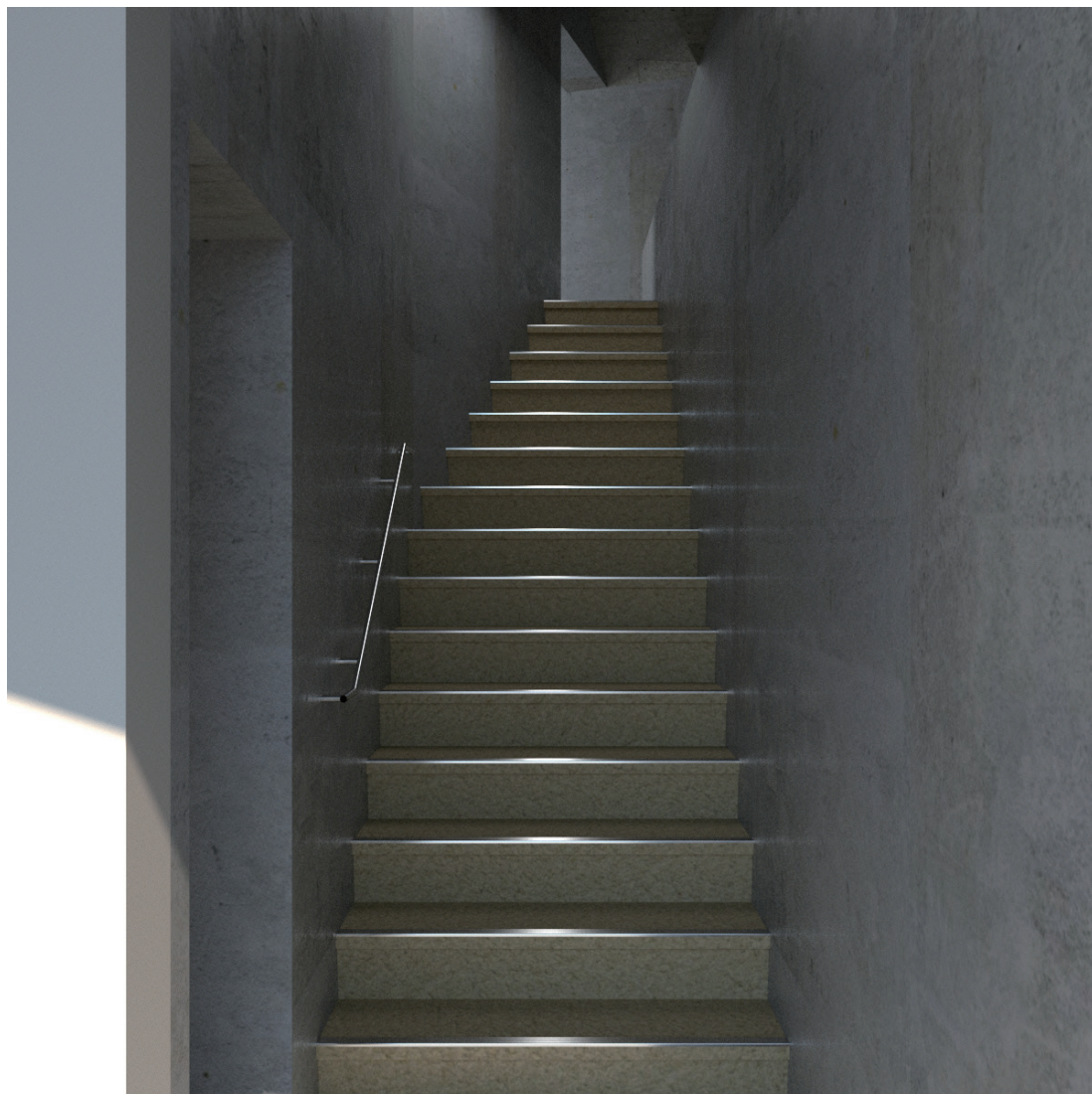


部分平面図 (中 3 階)

寸法 = 1 : 150



(集合住宅) 内観パース 1

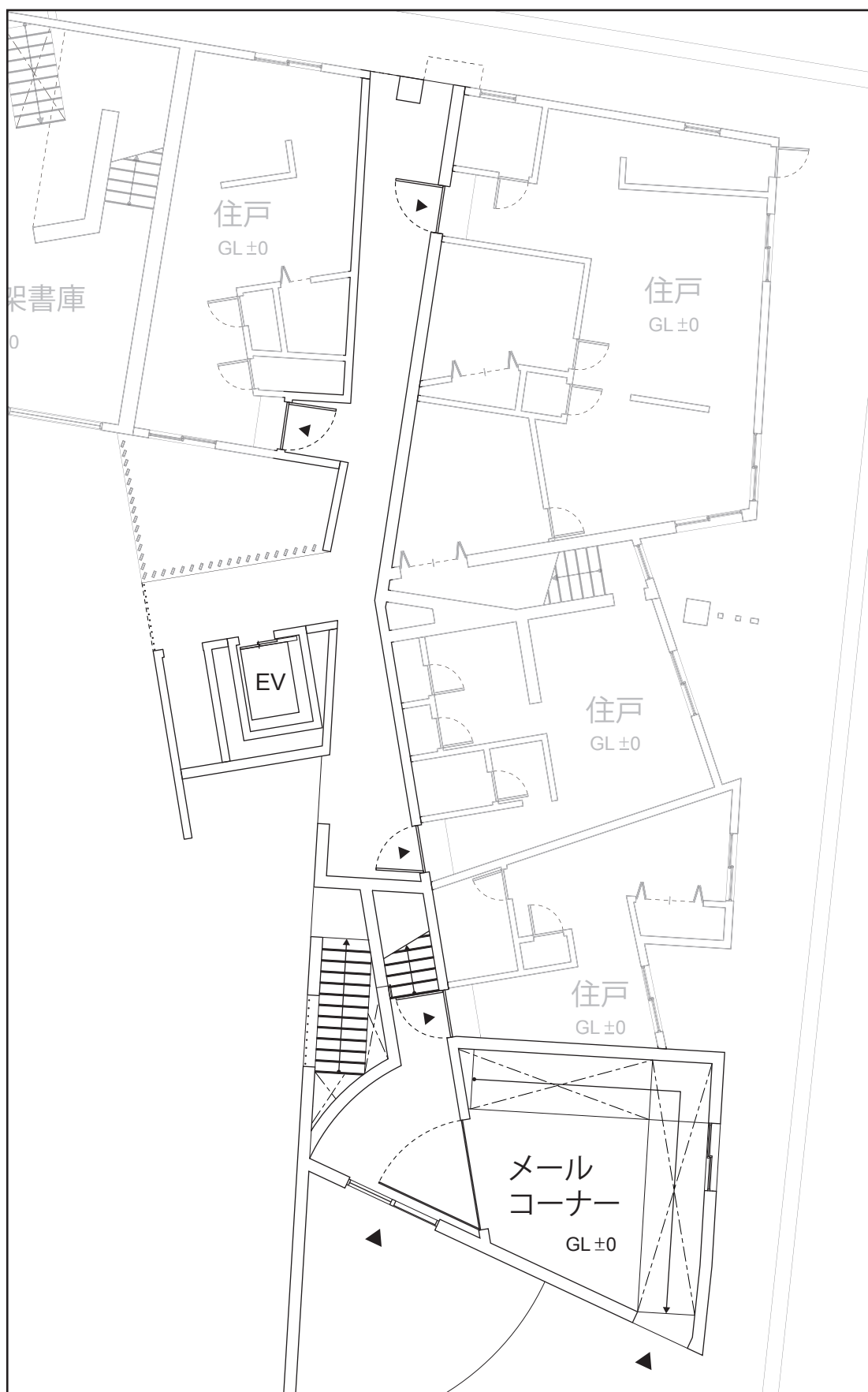


(集合住宅) 内観パース 2



部分平面図

共用部

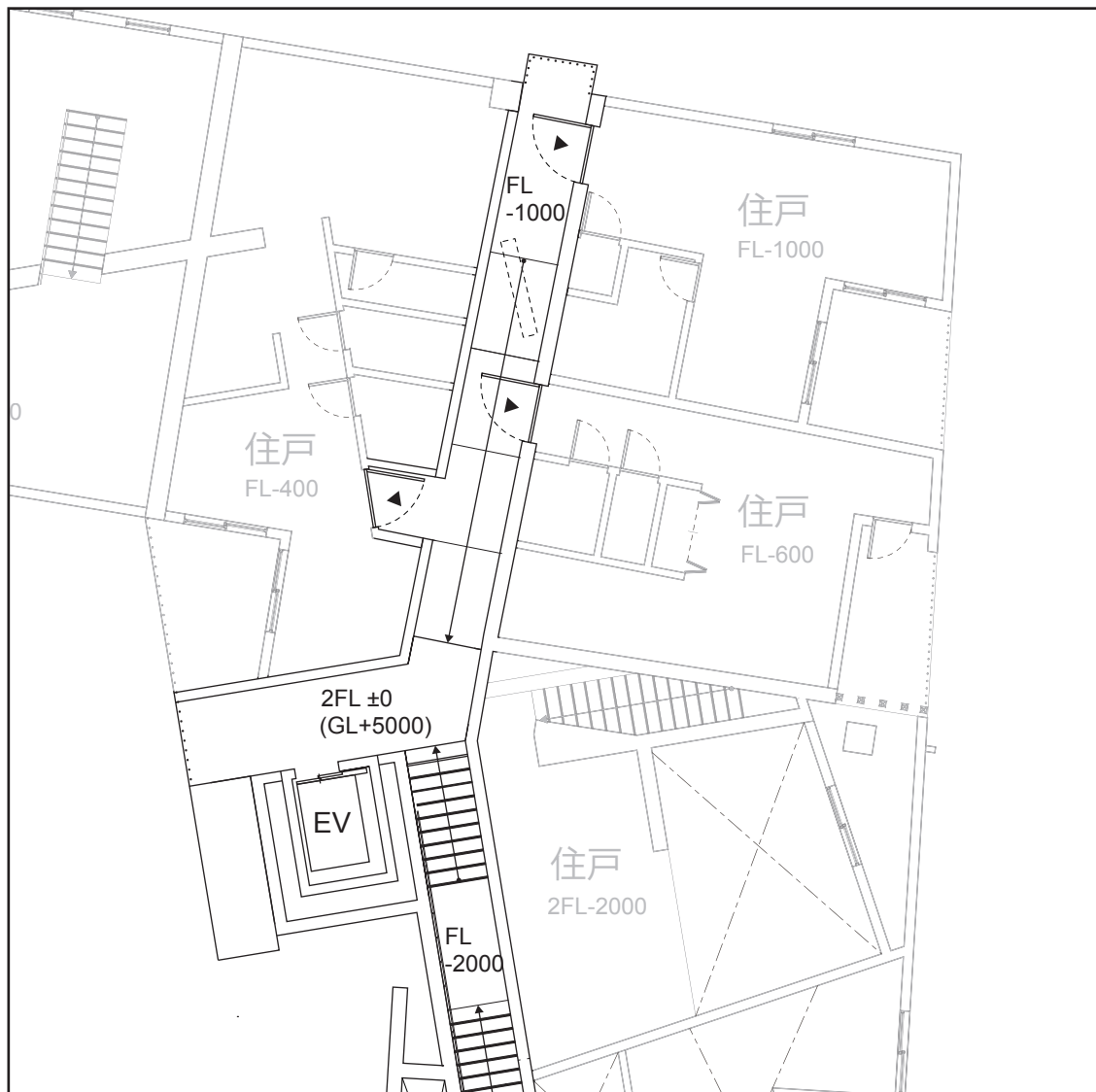


部分平面図 (1階) [左図]

寸法 = 1 : 150

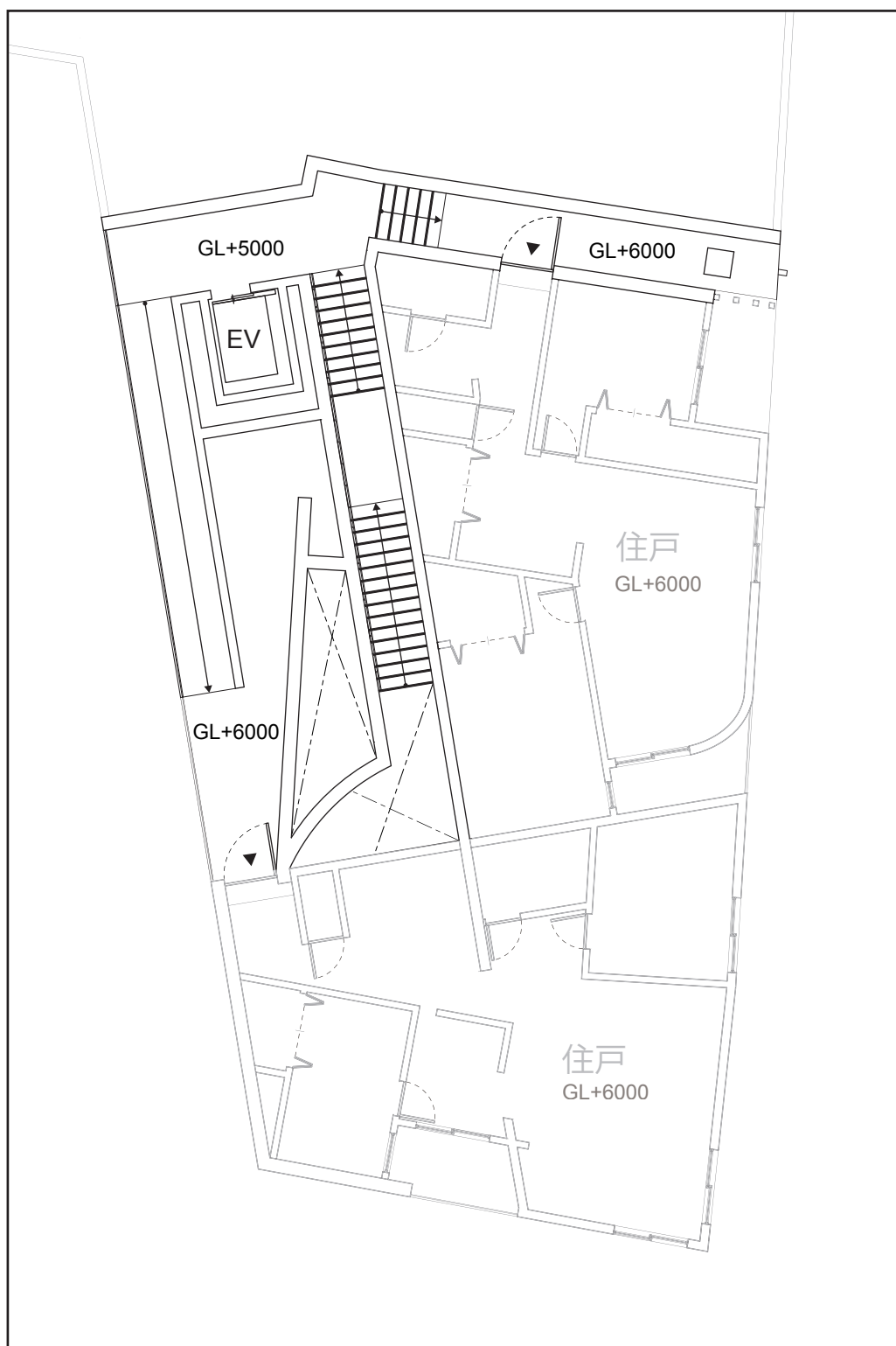
部分平面図 (2階) [下図]

寸法 = 1 : 150

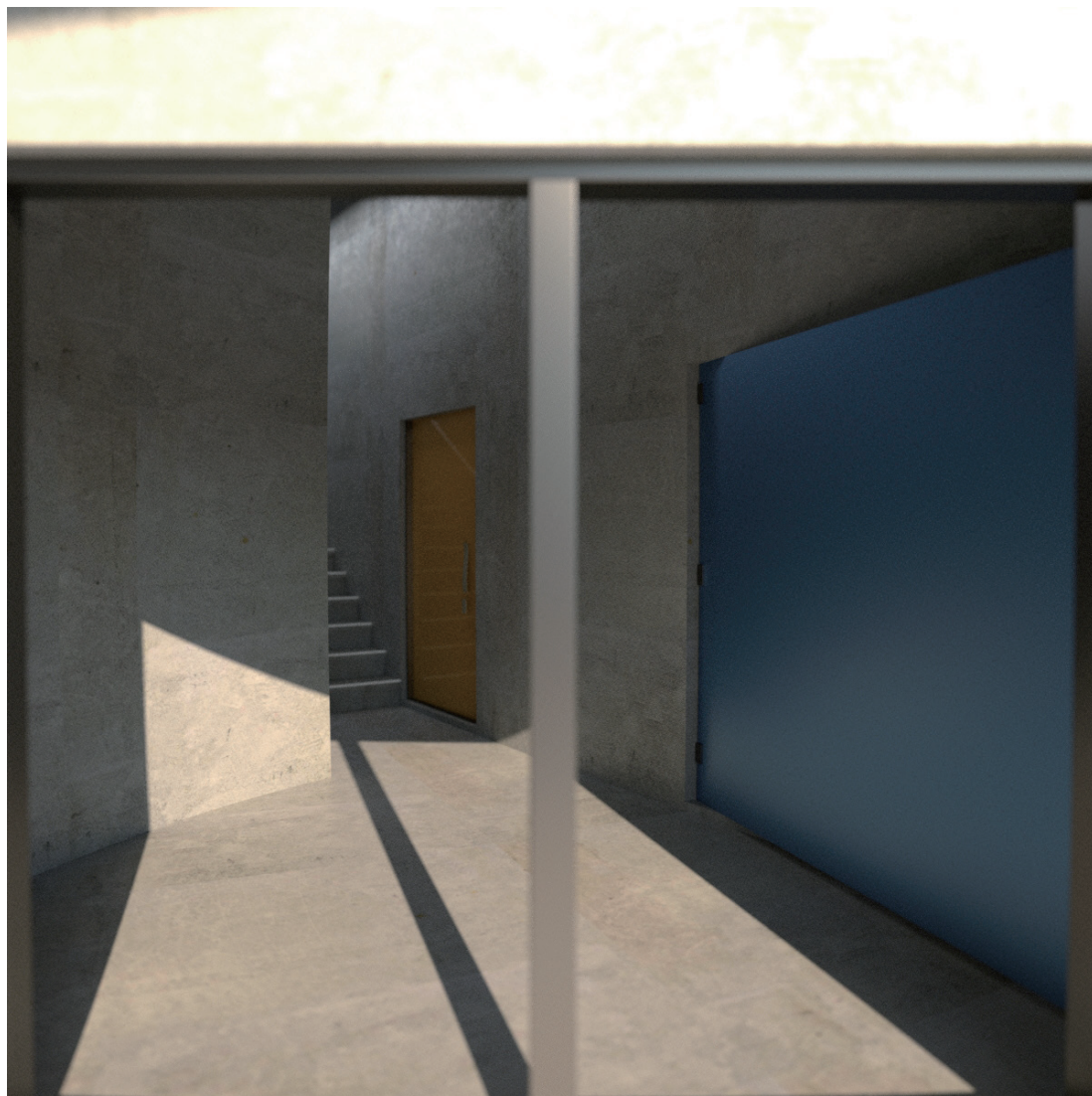


部分平面図 (中 3 階)

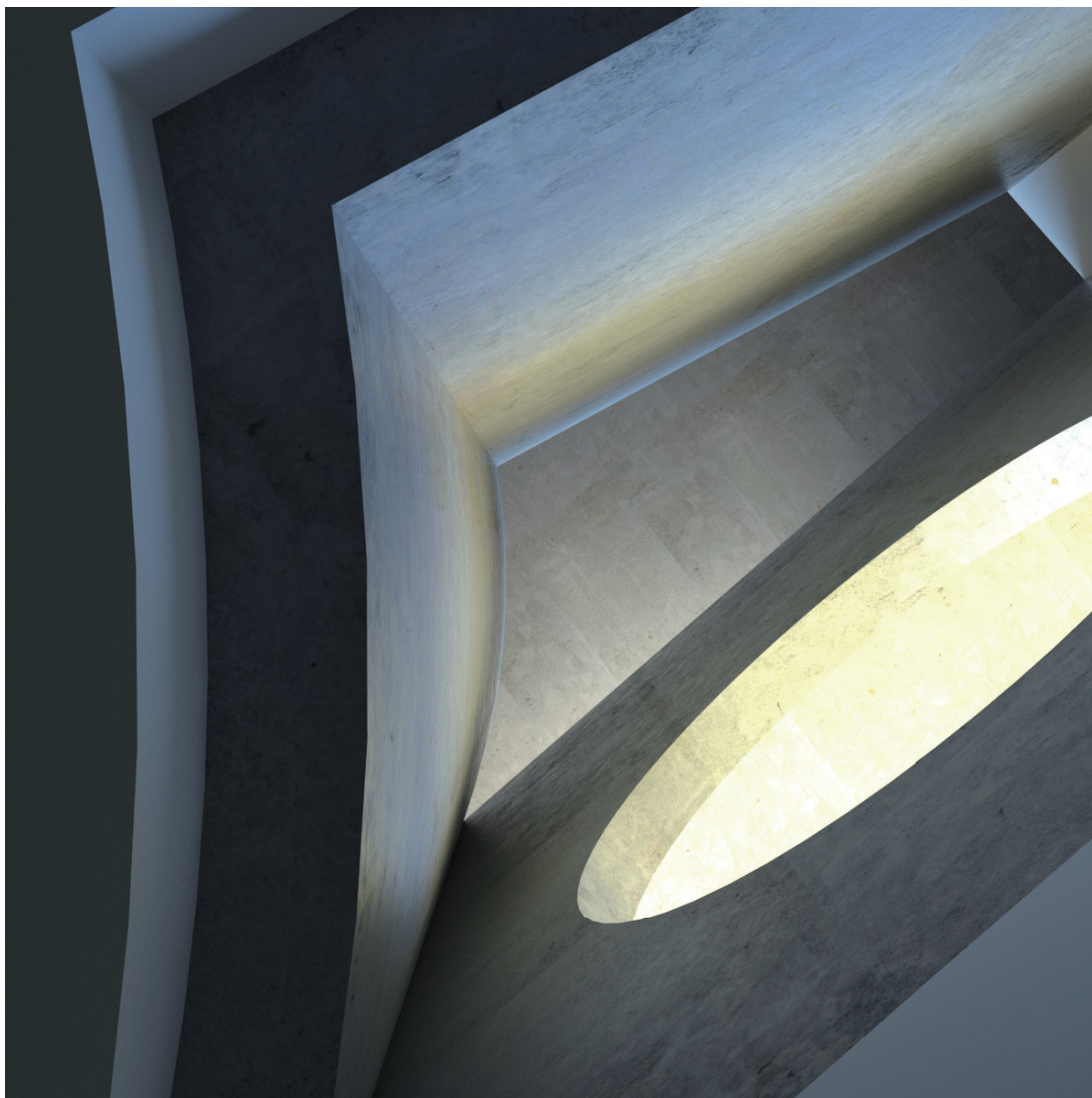
寸法 = 1 : 150



(集合住宅・共用部) 内観パース 1



(集合住宅・共用部) 内観パース 2



(集合住宅・共用部) 内観パース 3



(集合住宅・共用部) 内観パース 4



第 6 章

プレゼンテーション

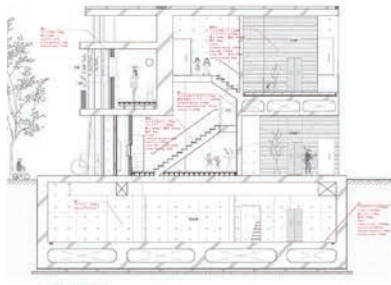
自走都市と多解釈空間

坂牛研究室修士2年
ただせいや

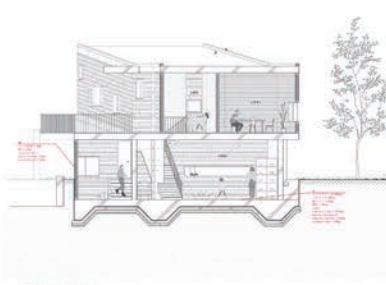
都市の【非合理的事物】に着目した設計手法の提案

ポストモダニズム
ジェネリックシティ
からの学び

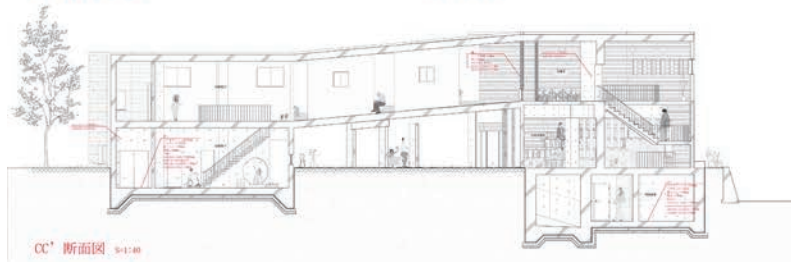




AA' 断面図 1/40



BB' 断面図

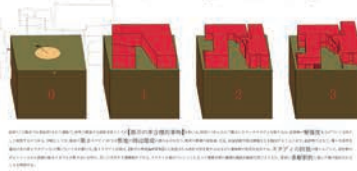


CC' 断面図 1/40

本設計概要：敷地と用途



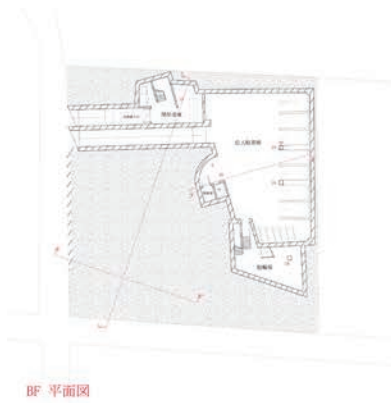
スタディプロセス：経典としての【都市の非合理的事象】



1F 平面図



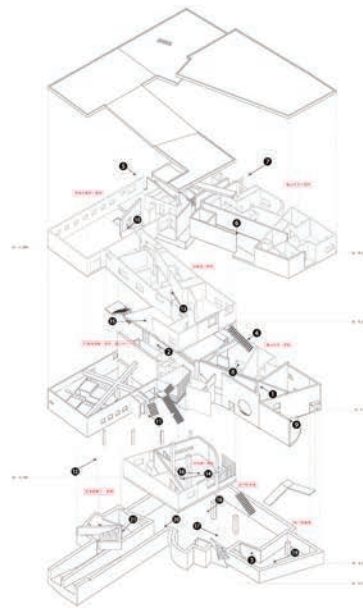
M3F 平面図



BF 平面図



2F 平面図



都市的物事に着目したケーススタディ



都市的事物に着目したケーススタディ



1. 事物の状態の記述

石が扉の可動の前に置かれている / ある

事物 行為 解釈

2. 観察者の解釈

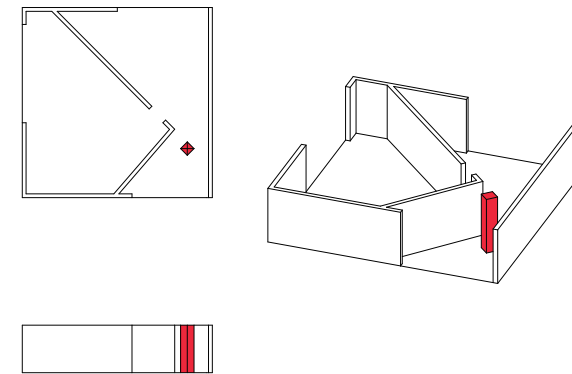
「動線を遮る事物としての“石”」

3. 解釈に関連するキーワード

__動線通路 __遮る
__開閉性 __可動性 __障壁

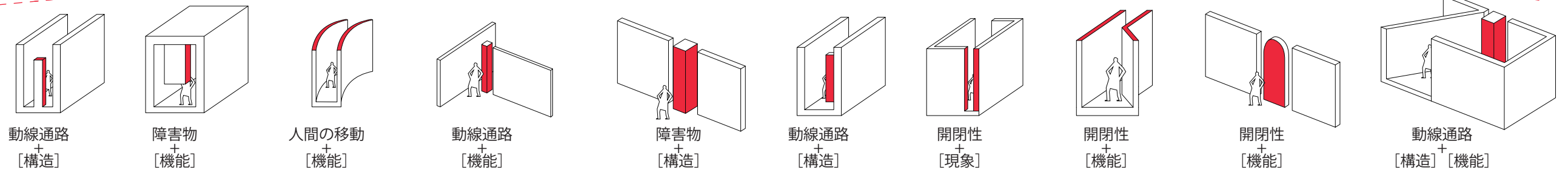
4. キーワードと建築的要素

を結びつけたケーススタディを行う



事例 no. 1

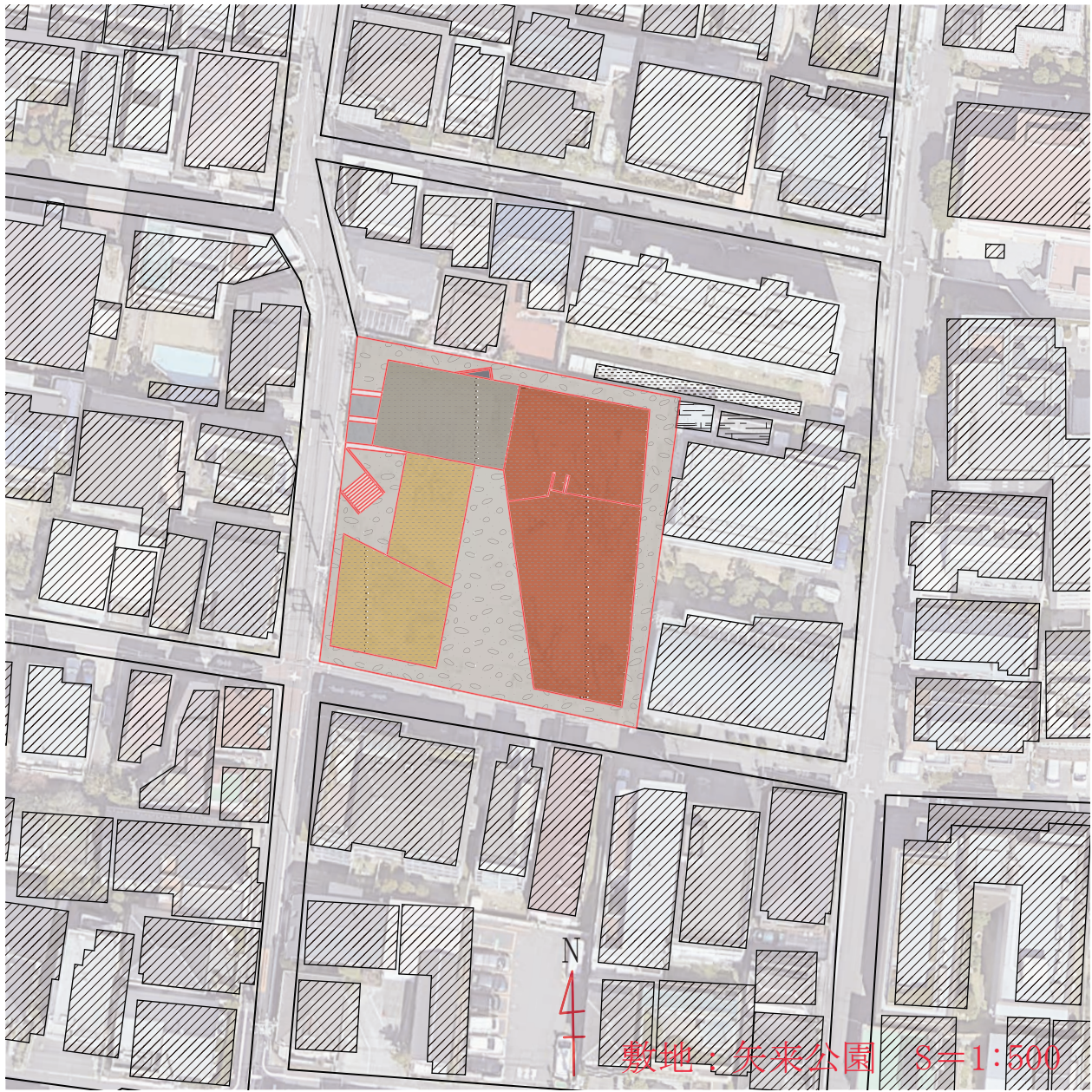
構造・動線・環境・現象・機能・ディテール
の要素と結び付けてスタディを行いその内のひとつを抽出する。



本設計概要：敷地と用途

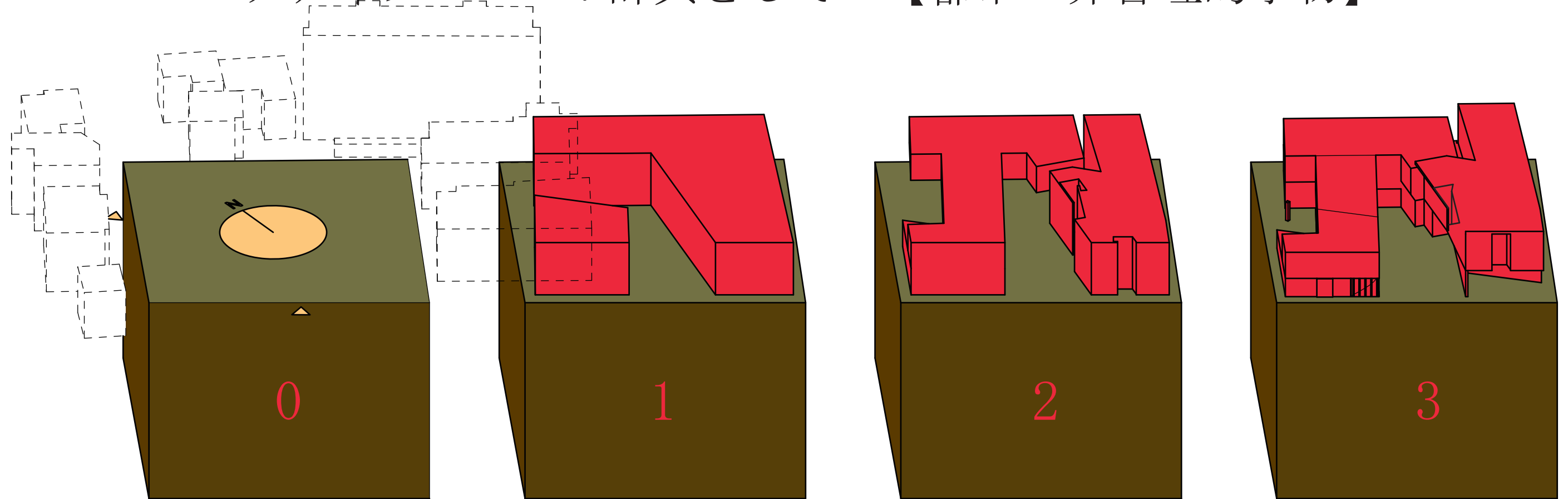
対象敷地は東京都新宿区の矢来公園である。この敷地付近は第一種低層住居専用地域で、低層の住宅地と事務所が混在する。矢来公園が位置する周辺は、子育てをする若年世代の公園利用が多く見られる。敷地から 150 mほど離れたところには日ごろから交通量が多い早稲田通りがあるが、敷地が位置する矢来公園はその喧騒から少し離れた閑静な住宅街にたたずむ。

用途は、幼稚園・児童図書館・集合住宅の複合施設とする。選定の理由としては、敷地周辺には多くの子育て世帯が居住しているにもかかわらず、彼らのための施設が不足していることがあげられる。集合住宅に関しては本敷地の周辺は、閑静な高級住宅街であるため、ある程度の整然さと専有面積を持った住居を用意する必要がある。住戸部は全体で9 住戸用意し、単身住居者から家族世代を想定した住戸を用意する。また、元来公園であり、限られた緑地をできる限り残し、公園としても、子供が安心して遊べる施設として想定している。



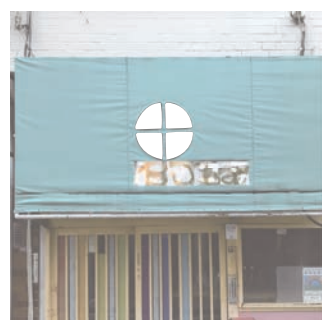
階	区分	室名	面積
BF	駐車場	駐車場	300. 42㎡
BF	駐輪場	駐輪場	50. 53㎡
BF	児童図書館	搬入口・閉架書庫	50. 98㎡
1F	幼稚園	大教室 1	88. 03㎡
1F	幼稚園	事務室	24. 68㎡
1F	幼稚園	倉庫	10. 03㎡
1F	児童図書館	受付・一般開架	146. 05㎡
1F	児童図書館	男女便所	29. 45㎡
1F	住居	エントランスロビー	29. 87㎡
1F	住居	101号室	31. 50㎡
1F	住居	102号室	61. 67㎡
1F	住居	103号室	87. 38㎡
1F	住居	104号室	43. 15㎡
2F	住居	201号室	36. 47㎡
2F	住居	202号室	35. 16㎡
2F	住居	203号室	56. 67㎡
2F	住居	1 F共用部	59. 11㎡
2F	住居	2 F共用部	48. 65㎡
2F	幼稚園	教室1	17. 44㎡
2F	幼稚園	教室2	19. 90㎡
2F	幼稚園	教室3	11. 54㎡
2F	幼稚園	教室4	16. 31㎡
2F	幼稚園	大教室	54. 01㎡
2F	幼稚園	便所	9. 10㎡
2F	幼稚園	倉庫	6. 33㎡
2F	児童図書館	読書室	148. 24㎡
M3F	住居	204号室	81. 65㎡
M3F	住居	205号室	81. 09㎡

スタディプロセス：辞典としての【都市の非合理的事物】



設計(この場合では本設計)を行う過程で、研究で提案する設計手法としての【都市の非合理的事物】を用いる。前頁(パネル2)にて提示したケーススタディを取り込み、設計物の解像度を上げていく手段として利用するのである。手順としては、最初の第0スタディ(0)では敷地や周辺環境の読み込みを行う。現状の敷地の高低差、方位、前面道路や周辺環境などを抽出することにより、設計物ではなく、様々な条件を基点に次の第1スタディ(1)に繋げることを心掛ける。第1スタディ以降は、【都市の非理論的事物】から発想される設計手法を取り込みながら建築物の形式を決定する。スタディの回数が増えるごとに、設計物のヴォリュームから詳細な収まりまでもが取り合いを持ち、互いに共生する建築物ができる。スタディを重ねていくことによって建築空間の極端な機能的破綻も防ぐとともに、着実に多解釈性に富んだ場が創出されることを期待する。

都市的事物に着目したケーススタディ

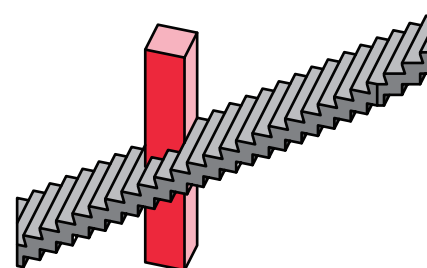
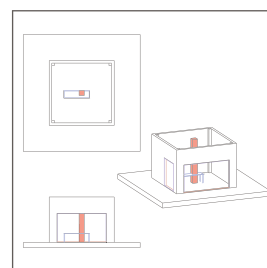


店舗のフーチングの裏に空調換気扇があり
通風のために穴がけられている

事物 行為 解釈

「不都合な重なりによる譲渡」

__取り合いの悪さ __環境の共存
__貫通
__相容れない事物の関係性



60 個のケーススタディは、用意された形式としてではなく、事例的参照を行いながら利用されていく。事例それぞれで出されたケーススタディは一つの形式的可能を示しているにすぎず、実際の設計に適用するときには設計者 / 観察者の「解釈」に立ち戻り、設計される空間に当てはまるように再構築する。

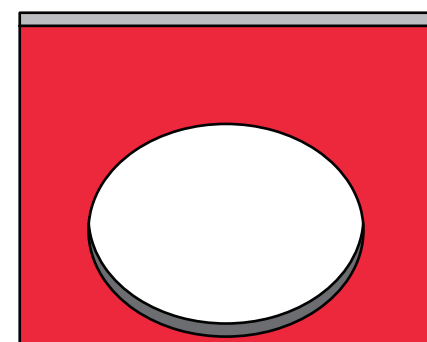
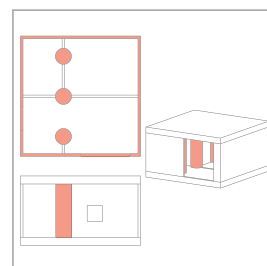


道路の日陰に
カーブミラーの反射光がきれいな円を映し出す

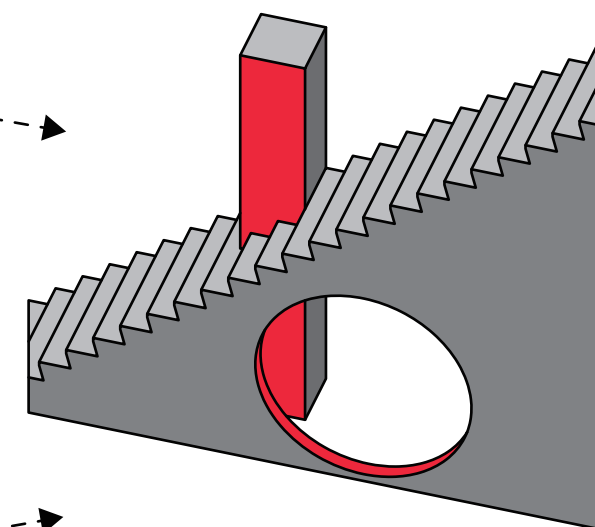
事物 行為 解釈

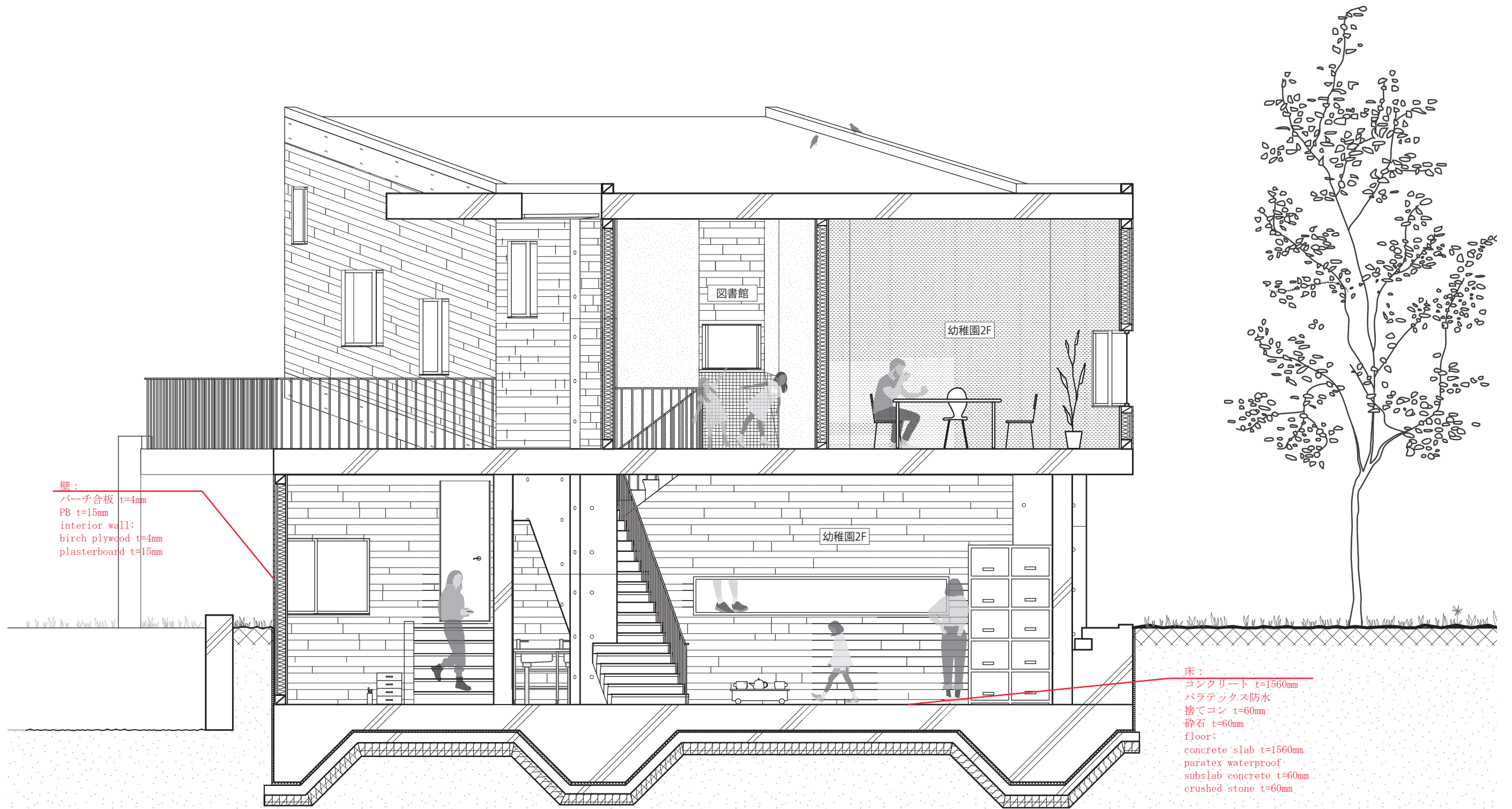
「きれいな円形」

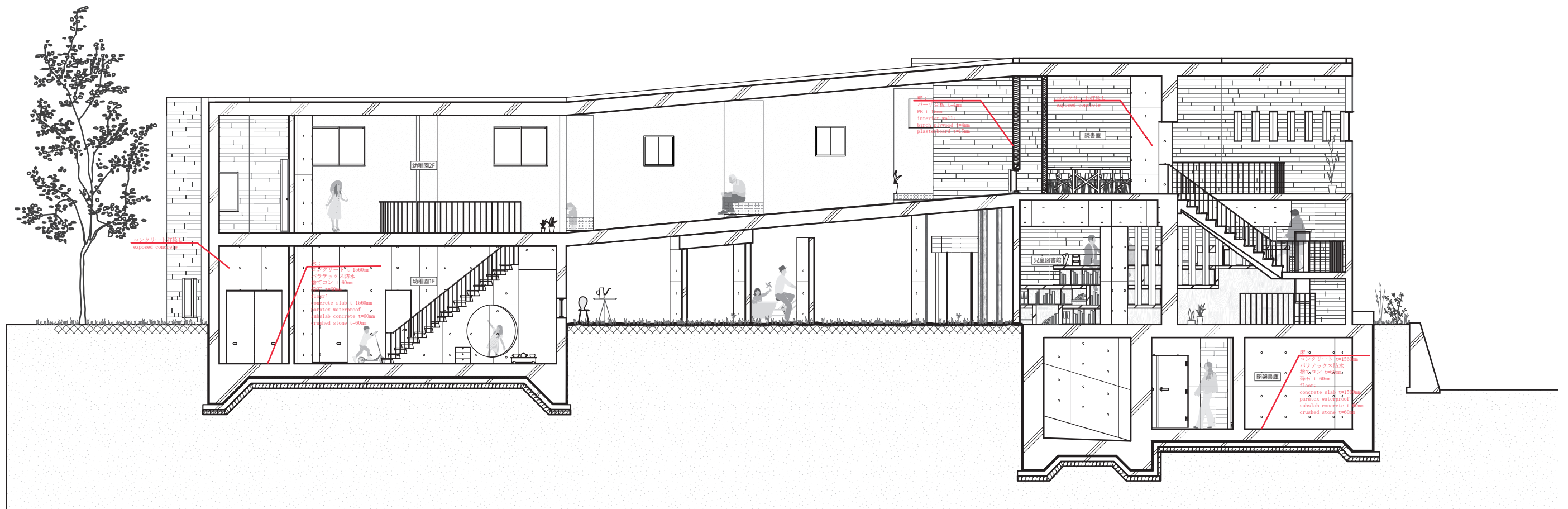
__成形 __不整形
__曲面 __映し出し

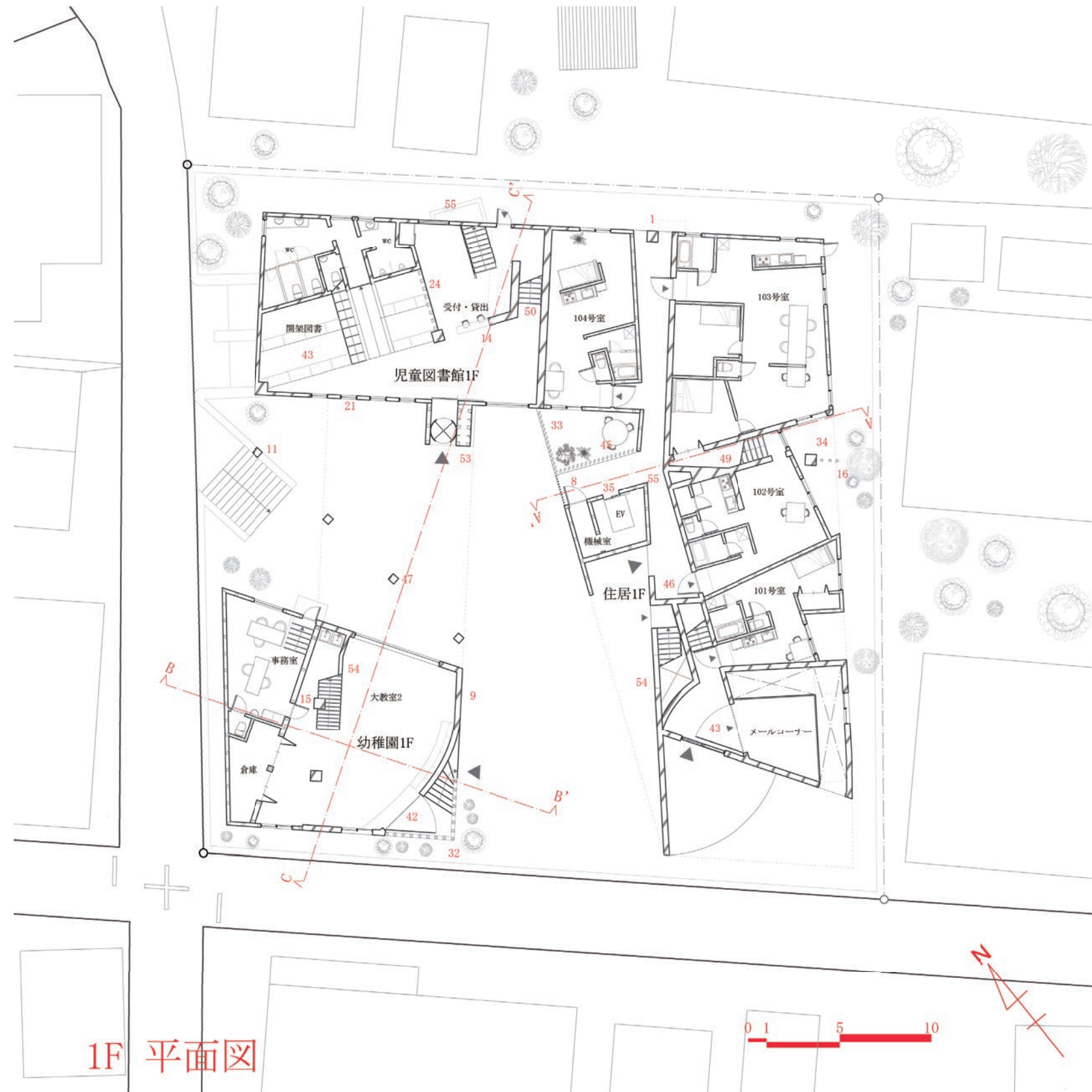


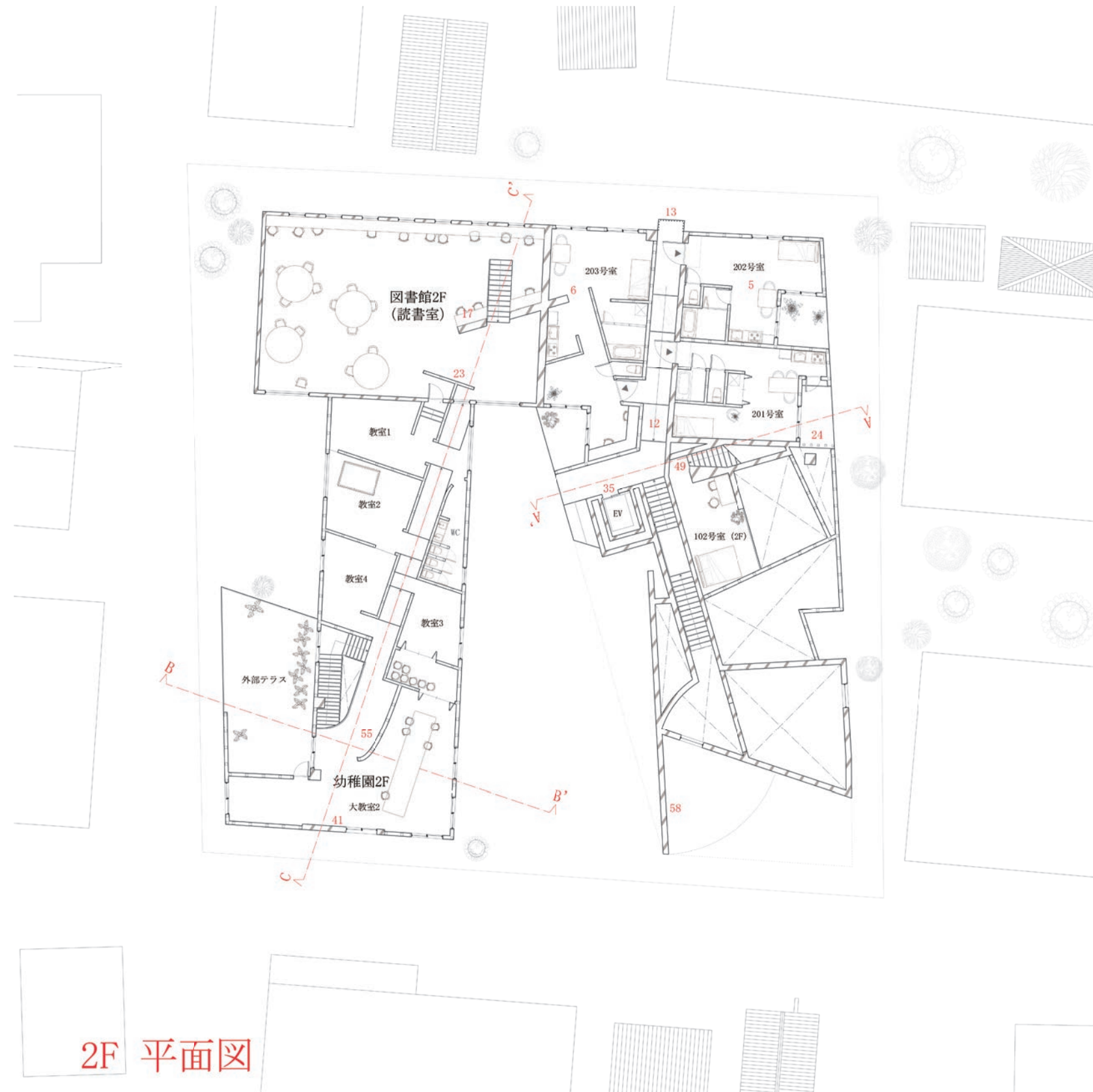
いくつものケーススタディが取り合いを持ちながら一つの全体系を構築していく

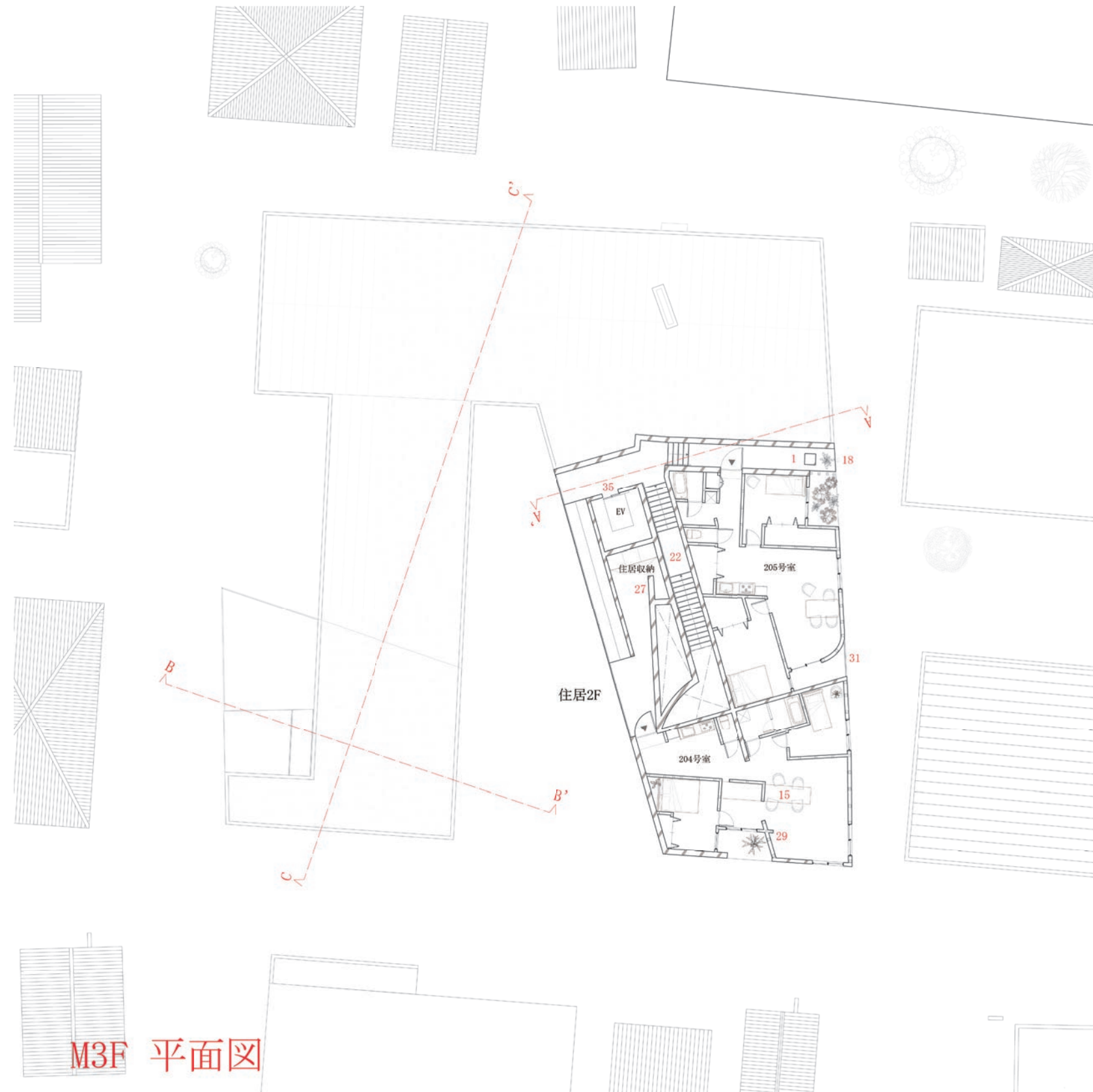




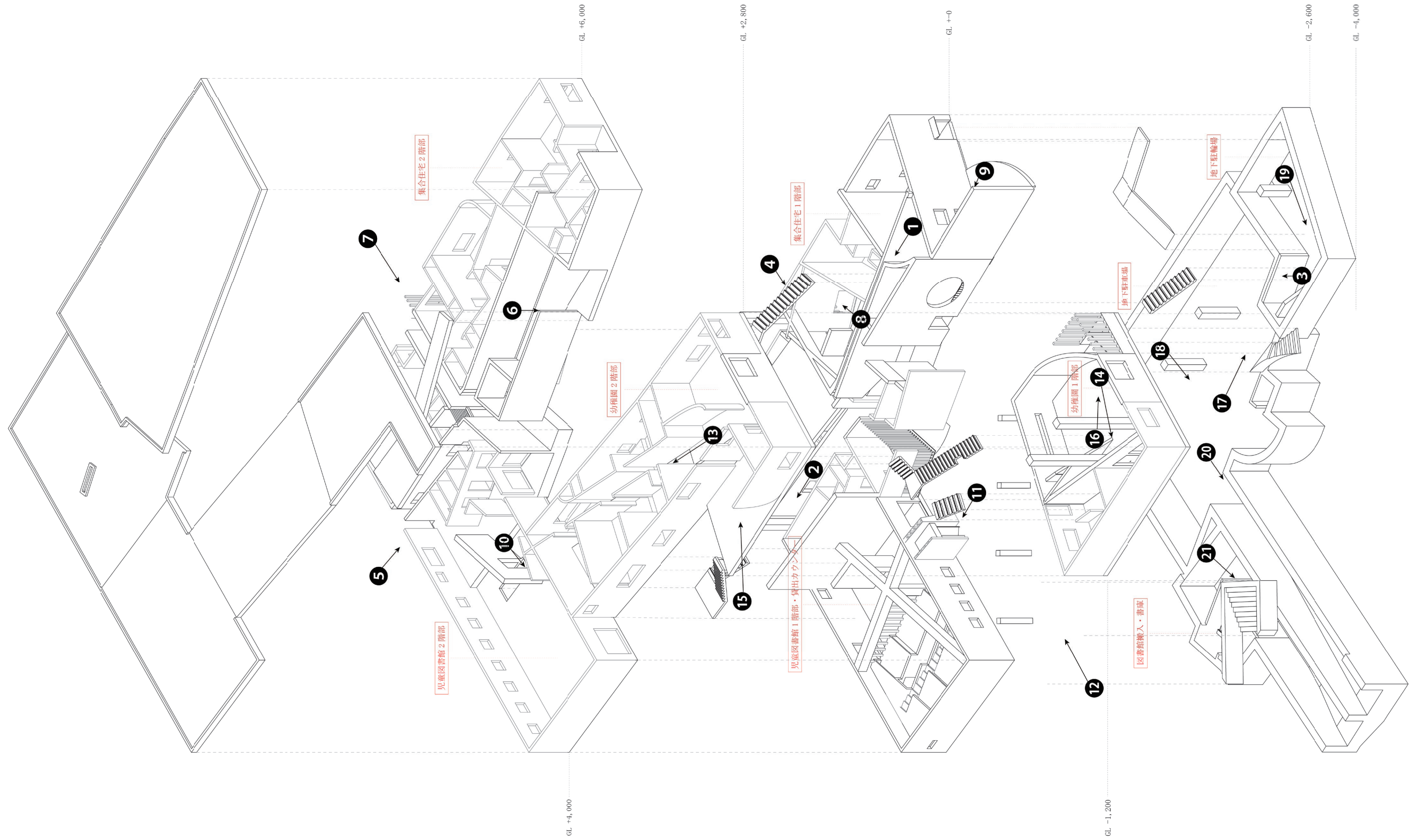






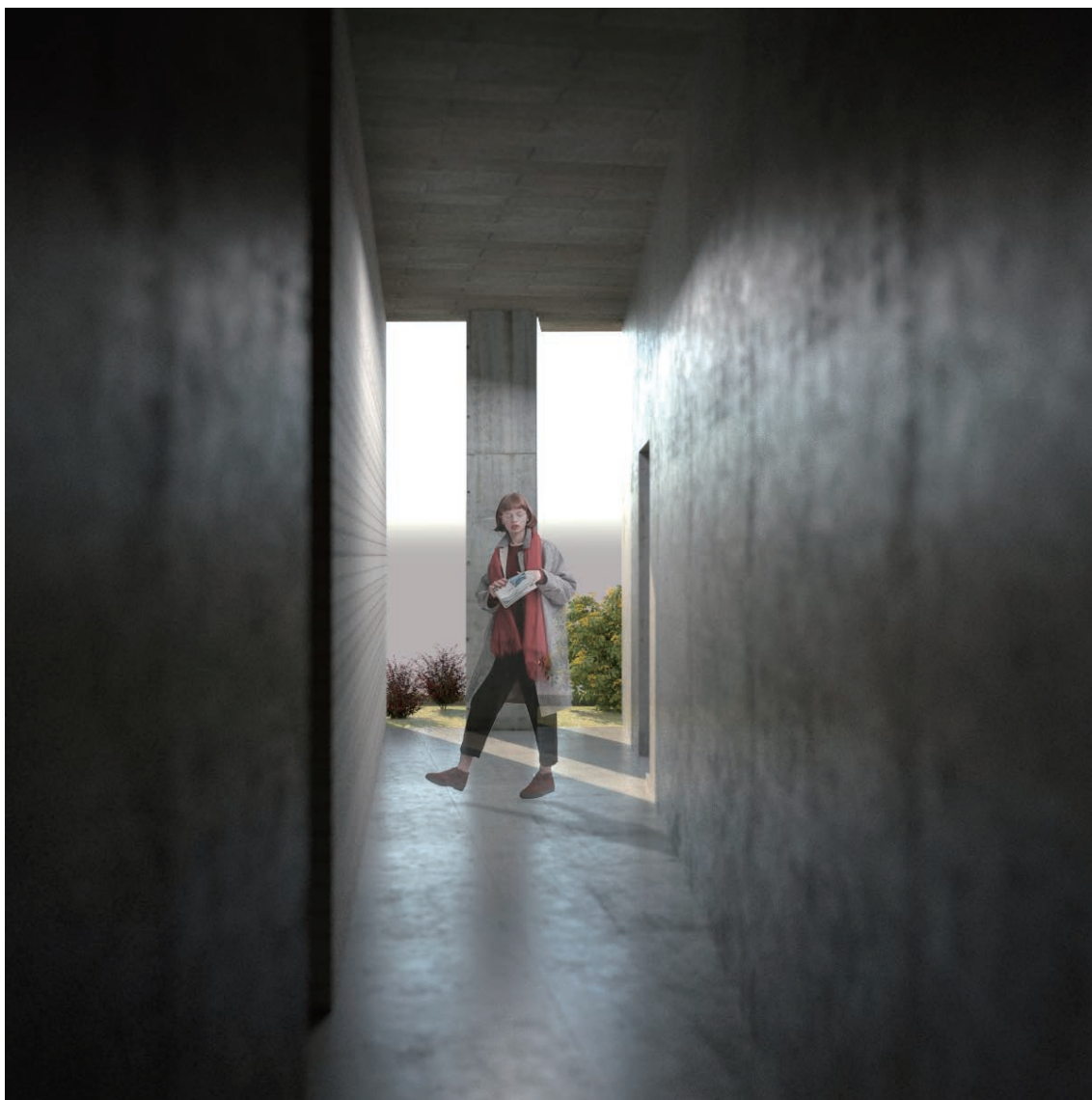


M3F 平面图





1



2



3



4



5



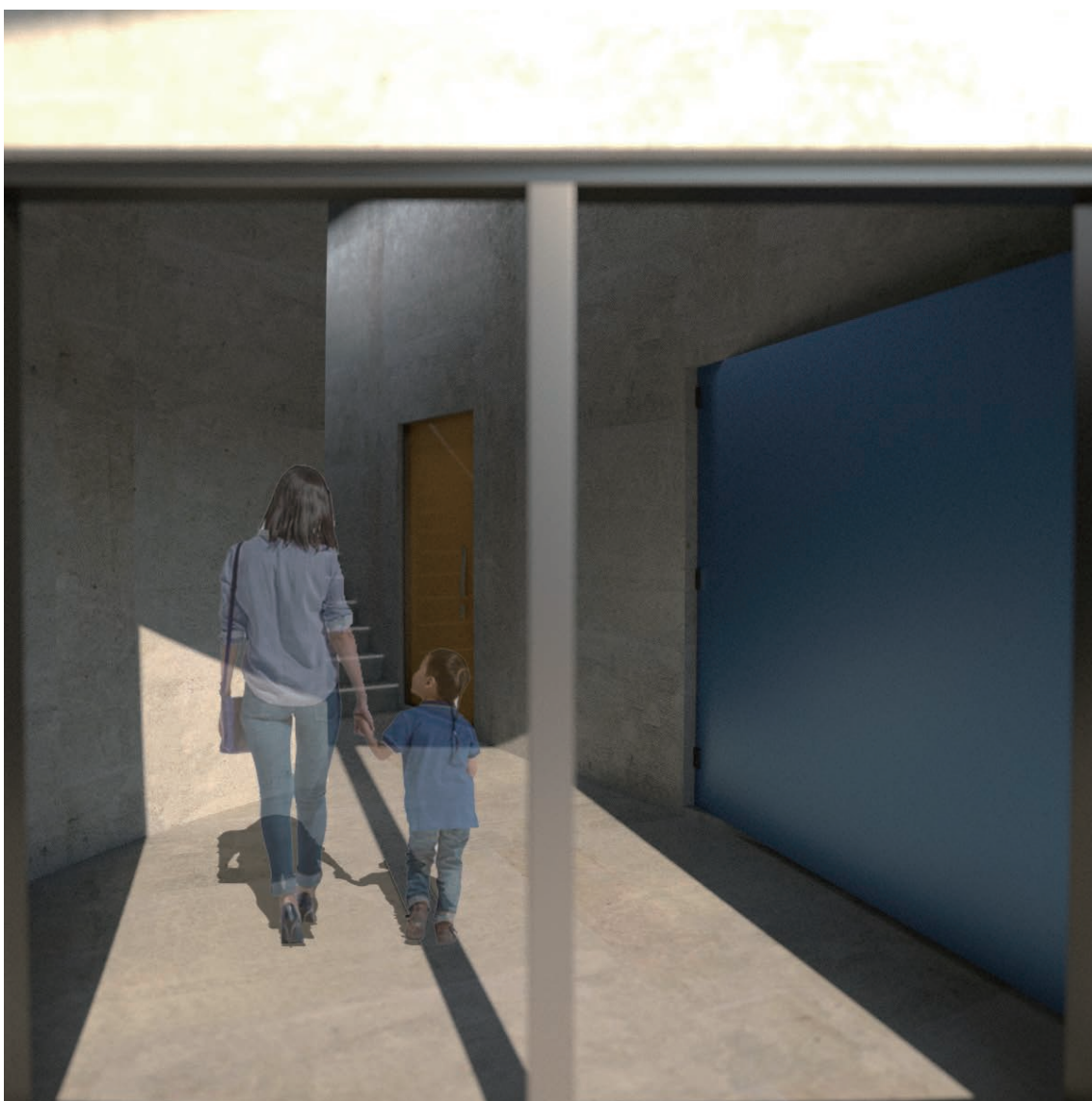
6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18



19

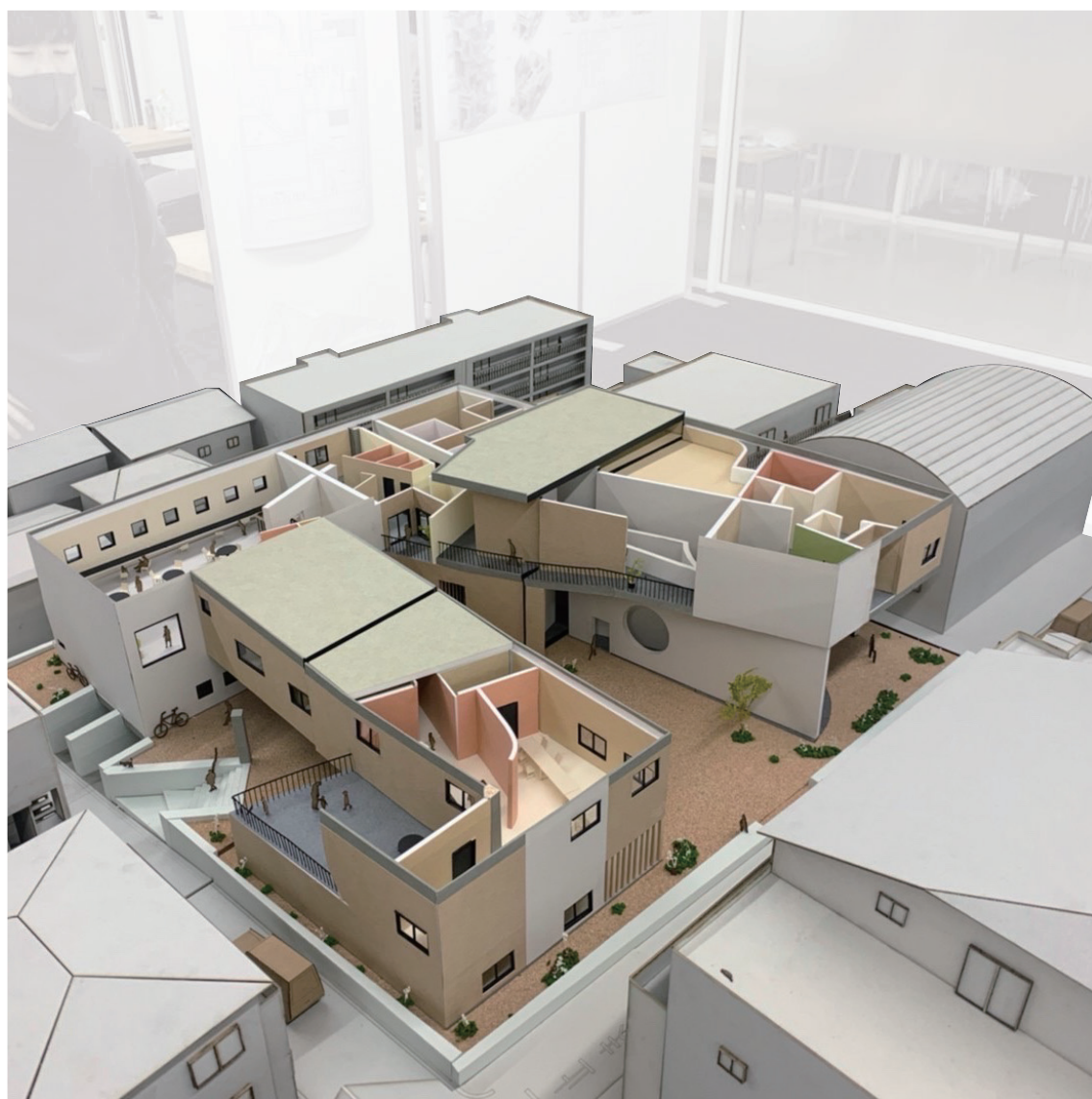


20



21







第 7 章

結

7.1. 結

本研究より提案した設計手法は大都市に点在する、人々の生きる姿、すなわち彼らの都市に対する行為を観察することを主眼としている。

都市で発見される事例を我々が再考し、建築空間として社会に再び還元することは建築設計を行う我々が行うべき職務であるのだと信じているからである。新たな視点で都市を観察し、都市と設計されるべき建築の関係性を再考するきっかけになることを期待している。

第 8 章

参考文献

【参考文献】

- 1) 青木淳 . (n.d.). 『フラジャイルコンセプト』 . NTT 出版 .
- 2) 千葉雅也 . (2018). 『意味がない無意味』 . 河出書房新社 .
- 3) (2017). A+U, 17 : 05(米国の若手建築家)
- 4) Rasmussen, S. E., 訳 . 佐々木宏 . (1966). 『Experiencing Architecture』 . 美術選書 .
- 5) Lefebvre, H. (1929). 『The Production of Space』 . Blackwell.
- 6) Norberg-schulz, C. (1971). 『Existence, Space & Architecture』 . Praeger.
- 7) 門脇耕三 . (n.d.). 反一空間としてのエレメント . Retrieved from <https://www.10plus1.jp/monthly/2015/02/issue-01.php>
- 8) 迫田正美 . (n.d.). 建築をめぐる意味と解釈 . 日本建築学会近畿支部研究報告集 , 計画系 (27), 889–892.
- 9) 渡辺豊和 . (1968). 建築に於ける記号の意味 (その 1 ～ 8) . 日本建築学会学術講演梗概集 , 計画系 (43).
- 10) 大山載吉 . (2016). 『ドゥルーズ抽象機械 〈非〉 性の哲学』 . 河出書房新社 .
- 11) Venturi, R., Brown, D. S., & Izenour, S. (1977). 『Learning from Las Vegas』 (新装版). MIT Press.
- 12) 乾久美子 . (2014). 『小さな風景からの学び』 (初版第 3 刷). TOTO 出版 .
- 13) 古谷嘉章 . (2020). 人類学的観察のすすめ (1st ed.). 古小鳥舎 .
- 14) Mallgrave, H. (2011). 『An Introduction to Architectural Theory: 1968 to the Present』 (1st ed.). Wiley.
- 15) Foster, H. (1987). 反美学『ポストモダンの諸相』 (室井尚 , & 吉岡洋 , Trans.)(新装版第 6 刷). 勁草書房 .
- 16) Venturi, R. (1982). 『建築の多様性と対立性』 . (伊藤公文 , Trans.)(第 1 版 16 刷). 鹿島出版 .
- 17) 門脇耕三 . (2021). 『ポストモダン建築とは何だったのか』 . 現代思想 .
- 18) O.M.A, Koolhaas, R., & Mau, B. (1995). S,M,L,XL (1st ed.). 010 Publishers.
- 19) Relph, E., 浩夫神谷 , & 寛之岩瀬 . (1999). The Modern Urban Landscape. (高野岳彦 , Trans.)(初版). 筑摩書房 .
- 20) 碓井タカシ . (2000). 社会学の理論 (1). 有斐閣ブックス .

【謝辞】

本修士設計論文は東京理科大学大学院工学研究科建築学専攻修士過程坂牛研究室で行った研究・設計をもとに著したものです。本研究においてご指導頂いた指導教官である坂牛卓教授に心より感謝申し上げます。坂牛研究室の博士課程の平田柳さん、堀江欣司さん、また、設計助教の高佳音さん、研究や設計の相談に乗ってくださり感謝申し上げます。

そして、制作にお手伝い頂いた後輩や同期のみなさまに感謝いたします。模型の製作を管理し、より良い修士制作になるようたくさんの助言をしてくれた石崎晴也君、八木このみさん、誰よりも早い段階で制作に参加してくださることにより、計り知れないサポートの数々をしてくださいました。修士1年生の二人には感謝致します。また、他大学に通いながら（実務のプロジェクトも抱えながらも）お手伝いに来てくれた山口紗英さんもありありがとうございました

坂牛研究室の4年生、河田祐希君と小林泰君は、自分の卒業設計で多忙にもかかわらず、多大なる時間を制作に割いてくださり、感謝いたします。本人たちの設計やプレゼンテーションには感化させられるものがあり、著者も勉強になりました。

来年度から坂牛研究室の後輩になる、北井宏佳さん、お手伝いありがとうございました。本研究が少しでも勉強になってくれれば光栄です。また、池戸美羽さん、西田風くん、制作が大詰めの時期であまりお話できませんでしたが、それでもお手伝いいただきありがとうございました。西田くん、来年度卒業設計されるか迷っていましたが、お手伝いを機に、少しでも気持ちが変われば光栄です。卒業設計しましょう。

連日間来てくださった小島武瑠君、学部2年生にして模型の一部を任せられる頼もしさに救われました。これからの成長が楽しみです。ありがとうございました。

学部1年生の高垣幸輔君、坂本慶次君、三輪知弘君、田村康輔君、制作のお手伝いありがとうございました。4人の設計に対する好奇心は、建築家を志す理由を考え直させる新鮮さがありました。今後の活躍に期待いたします。お手伝いありがとうございました。

学部時代の同期でお手伝いしてくださった、蔭山亮君、本田晃一、布井翔一郎君、ありがとうございました。また、同研究室で切磋琢磨しともに頑張った、高南さん、宮田将司君、山口海君、お疲れさまでした。研究室で共に過ごした時間はかけがえのないものになりました。感謝いたします。

多くの課題を残す修士設計論文となりましたが、本研究で行ったのは、設計者という存在、恣意的なるものの可能性を探求する挑戦であると考えています。取り組んだ2年間で思考すること、デザインするとはどのような行為なのか、本気で思考したつもりです。本研究で行ったものが設計者としての自分を今後も強化してくれることを期待いたします。

最後にはなりますが、両親をはじめ、たくさんの友人や同士によって支えられ無事修士課程まで修了することができました。関わってくださったすべての方に感謝申し上げます。

ただ せいや



